

---

# バカとテストと鏡花水月

気まぐれのコウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストと鏡花水月

### 【Zコード】

Z0208Z

### 【作者名】

気まぐれのコウ

### 【あらすじ】

とある理由でFクラスになった転校生の双子が、Fクラスの面々と共に大暴れ（？）する！

作者の初掲載で色々間違いもあるかも？

ついでに、この小説は受験生の受験生による息抜きのための執筆によつてうまれるため亀更新かと…

## プロローグ（前書き）

作品紹介にもあるとおり、亀更新の確立大な上駄文かも…  
それでもよろしければどうぞ

## プロローグ

春、俺達は転入する文月学園へ歩を進める。

「桜がすごいなあ。でも、夏とか大変そう。毛虫とか毛虫とか」

『**満開**の桜並木を歩きながらビービーことを呟く俺こと』『**影隠水月**』

よく長身瘦躯とか言われるくらいには背が高く細めな感じで、黒い髪を腰までのばしている。

わかりやすい特徴と言えば水色の瞳くらいか？

「多分……駆除するんだと思ひたゞ」

律儀に相づちをうつてくるのは双子の『**影隠鏡花**』。

身長は女子の平均ぐらいらしいがまず目が行くのは髪形かな？目元が隠れるくらいまでのばしていて「それで前見れるのかよ」ってつっこみたくなる。せっかく双子そろって水色の瞳なのにもつたいいい……

「だろうなあ。あれ？門の所に先生？」

「クラス分け……」

「なーる。そりいえばそつだな」

まあ俺達が入るクラスは分かってるんだが……

「おはよっござこます。えーっと……」

「生徒指導の西村だ」

鍛え上げられたであるつ身体に浅黒い肌、スース姿でなければ何かの選手にしか見えない。

「そうでしたか。西村先生、おはよひ「やれこます。」

「おはよひ「やれこます……。」

「おはよひ。確か影隠だつたな。」

「はい。鏡花と水用です。」

指差しながら言つ。

「それにしても双子で上下がわからないなんて珍しいなんてものじやないぞ」

「そつなんですか？いまいち実感がわかないんですけど……」

「職員室でもだいぶ話題になつてているぞ」

転入前から有名なのかよ！？

「そついつのつてちょっとといい氣はしないんですけど……」

「そつだらうな。ほら、クラス分けだ。」

封筒を2つ受け取り片方を鏡花に渡す。

「すまんな。これもルールだからな。」

?ああ、クラス分けの事か。

「いえ、じつちの事情で迷惑をかけるのもあれなので……気にしないで下さい。」

言いながら開けた封筒からはでかでかと『F』の文字が書かれた紙が出現した。隣の鏡花も同じだ  
家の事情で転入時期がずれて振り分け試験受けてないしな

「まあ、本人達が受け入れているならこれ以上は言わん。」  
「ありがとうございます。それでは」  
「……（ペコリ）」

西村先生に一礼してその場を後にする。  
転入生なので一度職員室へ向かっていく必要があるな

## プロローグ（後書き）

どうでしたでしょうか…

感想、アドバイス等ありましたら更新が…早くは出来ないかもしれません

バカテストってやうなきやだめかな…

## 第一問（前書き）

バカテストは思ひついたらやれりと思こます。〇×

## 第一問

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始める時問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希、影隱鏡花の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であると

いう点。

合金の例……ジュラルミニン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』は駄目といつ引っ掛け問題なのです  
が、二人は引っ  
かかりませんでしたね。

影隱水月の答え

『問題点……持ち手が熱くなつた?

合金の例……材質変えずに布でも巻く』

教師のコメント

問題点はよくある間違いですが、仮にそつだとしても合金の例を挙げてください

土屋康太の答え

『ガス代を払つていなかつたこと』

教師のコメント

そこは問題じやありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

俺達は担任の福原先生（冴えないオジサン先生とも言える。まさか先生までFクラス級とは……）に連れられて2・F前へ来ていた

「それではここで待つていて下さい」  
「分かりました。」

返事を聞くと先生は教室に入つていった

「あーくそ、敬語疲れた」

「大丈夫？」

「まあ、実際にそんなに疲れた訳じやないからな。どうしても口をついて出るというか……」

『では、入ってきて下さい』

お、呼んでるみたいだ

ガラガラッ

扉を開けた瞬間絶句。  
が、一秒で復活

卷一百一十一

「えーと 景隱 水戸です」

『うおおおお、女子だあーーー。』

なんちゅー連中だ。確かに見回しても女子は一人みたいだし、貴重

「双子だから基本、名前呼びでたのむ」

あのハイテンションの中何人に聞こえるかは知らんが、一応言つておく

「ホームルームを続けますので、質問などは休み時間にお願いします」

先生の一言でみんな渋々口を閉じる

ପାତ୍ରର ପାତ୍ର

じばかり連絡が続も、

「それでは自己紹介でも始めましょうか。廊下側の人からお願ひします。あ、鏡花さんと水月くんもお願ひします」

やつぱりあれだけじゃマズいか

ちなみに俺達の席は廊下側前から「一番田」と「二番田」で、三番田が俺だ

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

鏡花の前のやつか。何か女っぽい顔してたが、それに爺言葉つて……なぜかしつくつくる。謎だ

「……今年一年よろしくたのむぞい」

不思議がつてゐる間に終わつちました。

「影隱 鏡花です。……趣味はパソコン、得意科目は理系全般です。みひしくお願ひします」

おー、顔真つ赤。いつもの事だが……

（（（かわいいいーーーーーーー）））

あーあ、いたるとこりで死者が……

「影隱 水月だ。趣味は機械いじりと運動、得意科目は文系全般だ。一年間よろしくー。」

俺の方は特に何もなく終わり、自己紹介は続く

めんどくさいから面白かったやつだけ取り上げよ。

まず島田 美波さん、海外育ちで趣味が吉井明久を殴ること。

で、件の吉井 明久、ジョークで『ダーリン』と呼べと言つ 野太い大合唱 撤回とまあ面白いバカだ。

そんなとき、一人の女子が遅刻してきた。第一印象としては髪ピンクつて……つて感じ

周りの話を聞く限り、その姫路 瑞希さんは高得点を取れるような人のようだ。姫路さんが席についてちょっとしたら、先生が教卓を叩きつつ注意する

しかし、この時教卓は「ミミクズ」に変身した

「替えの教卓を取つてきます。それまで自習していくください」

と言つて先生が出ていった  
さて、寝るかな

（side鏡花）

自習となつて先生が出ていった直後にクラスの過半数の人達が寄つてきつた。

『彼氏つている?』『どんな人が好き?』『俺と付き合つて…』『…………』

みんなが別々の事を聞かれて、何から返事すればいいんだろう…

「やめんか皆！転入生を困らせてびつするのじやー」えつ？

木下君の言葉でみんながしぶしぶ下がる。

「鏡花じやつたか、大丈夫かの?」

「う、うん。……ありがとう。えつと、木下君

「ワシの事はできたら秀吉でたのむのじや。お主らと違つてクラスが違うがワシも双子の姉がいるのでな。」

「やうなんだ。改めて、影隱 鏡花です。よろしくひ、秀吉君」

恥ずかしくて少しつづかえりやつた……

「う、うむ。木下秀吉じや。よろしくたのむわい鏡花（むう、赤面していののがこいつた事に疎にワシから見てもかわいのじや）」

互いに赤面した顔を背けてくる

「えーと……やうじやつた、落ち着いたのなら質問に答えてやつてくれんかの？」

「う、うん」

そう言つてみんなの方を見ると、

『『『『『『いえ、やつぱり結構です。』』』』』

と、口を揃えて言われた。

秀吉君と揃つて首をひねつてはいるが、先生が戻つて来て自己紹介が再開された

～side水月～

起きたら自己紹介が終盤に差し掛かっていた。  
ぼーっと見ると最後の一人がなぜか教壇に立つた。

「Fクラス代表の坂本 雄一だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなんように呼んでくれ」

代表だから壇上に上がったのか。では、好きなように呼ばせてもらおう

「ノッポ野郎」

「お前もな」

「ゴリラ野郎」

「うるせえ針金細」

「バカ野郎」

「アレよりマシだ」

坂本が指差した先には吉井がいた。確かにバカっぽかつたが……

「ちょっと雄二ー！何で僕を引っ張り出」坂本、「一ついいか？」って

「酷くない！」

「何だ水月」

しつかりあれは聞いてたのか。

「針金細」と言われるほど俺は細くねえ！

「そうか？まあ、そうかもしかんな、言ひ過ぎた。」

あれ？？あつさり通つた？

「いや、じつに言ひ過ぎた。すまん。」

「いやいい。それより、話を戻すが……」

話を戻したかったのか。それにしてもやけに真剣な顔だな。

「皆に一つ聞きたい」

上手いこと視線を操作して設備を再確認させてやがる。

「Aクラスは冷暖房完備の上、リクライニングシートらしいが……  
…不満はないか？」

『『『大ありじやあああ』』』

「無い事も無い」

声をそろえるクラスメイトと、一人KYOですね俺。

「だらう。俺も代表として問題意識を抱いている。」

あちこちで不満が上がる

「そこで代表としての提案なんだが、」

「FクラスはAクラスに試合戦争を仕掛けよつと思つ

開戦の笛の音を聞いた気がした。

## 第一問（後書き）

キャラ壊れたりしてないか不安な作者です。  
ちなみに水月に言ってた『針金細工』は人間シリーズの零崎双識さんの説明から。あれも好きなんですよね。

## 第一問（前書き）

書きだめ投下中…一応一巻の最後までは書いてあるんですが…  
勉強が忙しくて誤字脱字のチェックも出来ません

都合上、上藤愛子の転校は一月から、とこりとこりしています

## 第一問

よじにもよつてAクラスとは……

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらない』

『俺は鏡花さんがいたらい』

いたるところで悲鳴があがつたが何かおかしい奴いなかつたか？

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

一瞬俺の疑問に『そんなことはない』って言つたのかと思つてしまつた

『何を馬鹿なことを

『できるわけないだろ』

『何の根拠があつてそんなことを』

そつ思つのも無理は無い。

聞くところによるとAとFだと1対4前後でやつとらしきからな

ヴヴヴ、ヴヴヴ

「おっ、メールだ」

俺のポケットで携帯が振動したので見てみる

『From: 工藤 愛子』

Title・残念!』

俺達が編入試験を受けたとき仲良くなつた工藤 愛子からだ。たしか一月に編入したんだつけ(といふか俺達がずれただけだが、……)

『一緒にクラスになれなかつたね(泣)。ボクはAクラスになつたよーそつちは?』

うーむ、まさかAクラスとは……とりあえず、

『振り分け試験受けてない。』Fクラスだ。』

こんなところかな

「んで、送信つと

「それを今から説明してやる」

坂本が勝利宣言の根拠を説明しだすよつだな。

「おい、康太。畠に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「…………!!(ブンブン)」

「は、はわつ」

あそこまで堂々と覗いといてしらばっくれても無意味だつが。畠の跡ついてるし(手で隠してるけど)

「土屋 康太。こいつがあの有名な、寡黙なる性識者だ」（シシコー）

ムツツリとムツソリーーをかけたんだろうな。そんなに有名なのか

よ……

『ムツツリーーーだと?』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか?』

結構有名らしいな……

「姫路のことは説明するまでもないだろう。一人以外はよく知っているはずだ」

まあ確かに俺達は知らないがな。

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

『俺は鏡花さんが……』

やつぱりおかしい奴混じつてるって

「木下秀吉だつている」

『おお……』

『ああ。アイツ確か木下優子の……』

「秀吉君……」

今、ナチュラルに鏡花が混ざつてたよな?

「当然俺も全力を尽くす

『坂本つて、小学生の頃は神童とか呼ばれてなかつたか?』

『じゃあ振り分け試験の時は体調不良だつたのか?』

『実力はAクラス並が一人いるつてことだな』

そんなにすげいならなぜFで代表なんだ？

「それに吉井明久だつている」

『 』  
『 』  
『 』  
『 』  
『 』  
『 』

沈黙。どうやらすげい訳ではなさそうだ。  
周りがちらほら喋りだすが知らないようだ。

「知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

『 それって馬鹿の代名詞じゃ……』

「ち、ちがうよつーちよつとお茶目な十六歳につけられる愛称で「  
そうだ。バカの代名詞だ」肯定するな、バカ雄一ー！」

吉井の使い方がなんとなく分かつってきた気がする。  
じゃあ俺も…

「観察処分者。それは問題児につけられる肩書きで開校以来一人し  
か存在せず、その一人がでる前は教師内ではただの齎しぐらいに考  
えられていたらしい。物体に干渉できるがダメージや疲労の何割か  
がフィードバックされる。」

「ちょっと…………転入生まで何言つてんだよー。」

「水月だ。一度で覚える。ちなみに、ほとんど教師の受け売りだ」

「ほう、転入生なのによく知ってるじゃないか。」

「まあ、戦争に興味あつたし。ルールも理解してるぜ」

「なら話が早い。とにかく、俺達の力の証明としてまずロクラスを  
潰す」

なぜAやEじゃないんだ？後で聞いてみよう。

「皆、この境遇は大いに不満だろ？？」

『おおーーーー！』

「ならば全員筆ペンを執れ！出陣の準備だ！」

『おおーーーー！』

「お、おー

姫路さんまで流されてるよ。

「明久にはワクラスへの宣戦布告の死者になつてもう。大役を果たせ！」

「下位勢力の宣戦布告の使者つてたいてい酷い目に遭つよね？それに字が違つてない？」

雰囲気で察したか。どれ、それなり

「おー、吉井。ここのはだいだ？」

「は？えーと日本？」

「範囲がデカいわ！学校だろ。んでこの時間教師は？」

「クラスに居るだろ？ね。」

「目の前で暴力沙汰になつたらどうする？」

「止めにはいってくれる！」

「そう言う事だ（ニヤリ）」

「じゃあ僕行つてくるよー！」

クラスメイトの歓声と拍手を背中に受けて吉井は出ていった。チョ  
ロいな

「中々やるじゃあないか、水月」

「面白くつてつこ、な。どうせ坂本も似たようなことあるつもりだ

つたんだろう?」

「もちろんだ。あと、雄一でいいぞ」

「りょーかい。これからよろしくな、雄一」

（side 鏡花）

あつ、吉井君行つちやつた

「のう鏡花、水月も存外腹黒い性格なのかの?」

「面白い人に対してはそう……」

「そうなのか。お主も大変じやのう」

「そうかも……」

## 第一問（後書き）

これからは本文のネタの原作でもあとがきに書いつゝ思っています（何を書けばいいのかまったくわからないので）  
こんな作者ですがどうぞよろしく

## 第二問

「騙されたあつ！」

吉井が帰つてきた（ボロボロで）

「やはりそうきたか」

「やはりってなんだよ…やつぱり使者への暴行は予想通りだつたんじゃないか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「少しは悪びれるよ！」

「そんなこと言われても、俺は明久に頼んだだけだが？」

「そうだった。おい、水月のせいでこんなになつちやつたじゃないか！」

確かに制服も所々破れてるしなあ。

「すまなかつた。本当にやるとは……」

「あつ、いや、水月の言つたことが普通なんだから。あまり気にしないで」

「…思つてたがな」

「うおい！わざとだつたのかよ…」

当たり前だと思つが…

「吉井君、大丈夫ですか？」

姫路さんが吉井を心配して近寄つてきた。

「あ、うん。大丈夫。ほんとがすり傷」

「吉井、本当に大丈夫？」

「平氣だよ。心配してくれてありがと」

島田さんまでやつてきた。

両手に花つてか？いいねえ。

「やう、良かつた。ウチが殴る余地はまだあるんだ」

「ああつーもうダメ！死にやうー」

……訂正、片方は花じやなかつた。

「そんなことはどうでもいい。それより今から//一トイシングを行つぞ」

おひ、やつとか。

「大変じやつたの」

「水月……弄りすぎじやない？」

木下と鏡花か。なんか仲良くなつたつて感じか？

「こやあ、面白くつてつー」

明るく元気に言つてみました。

「…………（サスサス）」

「土屋、畳の跡ならとつぐに消えてるぜ」

「…………（ブンブン）」

「転入生にまでバレてるのに否定するなんて、たすがムツツリー」

「…………！」（ブンブン）

「何色だった？」

「みずいろ」

いや、即答かよ！

「なんつーか、凄いな。」

「…………！」（ブンブン）

そんな馬鹿をやつてたら島田さんが近付いてきた。

「ほら吉井。アンタも来るの」

吉井の腕を引っ張つて行つてしまつた。俺もついて行かねば。

で、屋上に来たんだが。

「出入り自由なんだな。」（）の屋上

「なんだ、前の学校は違つたのか？」

そなんだよなあ。だから、ちょっと嬉しかつたり

「原則立ち入り禁止だつたな。せいぜい天文部が星見るときぐらい  
だ

「ふーん。そなつとじつもあるんだね」

フェンス前を陣取つて話始める。

「さてと、明久。宣戦布告はしてきたな？」

「一応今日の午後に開戦予定と告げて来たけど」

へー、宣戦布告まではギリギリ待つてもらえたんだ。

「それじゃ、先にお皿(いん)ご飯(ごはん)つてことね?」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べろよ？」

「そり思ひながらソーナーもおじいさんとお話しした  
「何うござい?」」

「一 もあ、まあ その

「二つの食事はそんなものじやない」

は？これより酷いのか？

「なんせこいつの食料、基本水と塩だからな」

「日本こ莫つて來ハ水用」

上卷

はつ、しまつた。混乱しちまつた

「あらんと砂糖だつて食べているやー。」

」のタイミングでそれは……

「ちよつ、水月笑いすぎ！」

「あの吉井君、それうな食ぐるとは言つぱい」

「あの吉井君、それうちは食べるといいわなこんじや……」「

「アーニ田舎、アーニ……」

「しつかし、何でそんな」

「仕送りが「すべて遊びに消えてるからな」雄一、セリフ被せない

でよー」

「……あの、良かつたら私がお弁当作つてきましょつか?」

「え?」

「ふ?」

乗つかつてみました。反省はしていない

ヴィー、ヴィー

「スマン、電話だ。先進めていいぞ」

さつきと違ひ振動で、携帯を取り出しつつ距離をとる  
相手は……愛子か

「もしもーし、どうした?電話なんて」

『……メール見てない?』

「メール?スマン、気付かなかつた」

『まあいいや。せつからくだから毎休み中、鏡花とこひで遊びにこ  
ない?』

「今、クラスのやつらと色々話しかつてゐるから、ちゅうとかかるナ  
どそれによければ」

『おつけー。じゃあ待つてゐるねー』

携帯を置みつつ鏡花に近づく

「作戦会議終わつたら愛子のところに行くべぞ

「……分かつた」

「雄一、予定入ったから手短に頼む」

「ん？ それは構わんがどうかしたのか？」

「いや、ちょいとAクラスの友達に呼び出されてな」

「そうか。なら今の点数と連絡先だけ分かればすぐに行つてもいいぞ。詳しくはメールしてやる」

「悪いな、恩に着る。これが俺達の点数とアドレスだ」

メモに殴り書きしてそれを渡す。

「おう。携帯だけは気にしてくれよ」

「りょーかい」

「……それじやあ」

俺達は屋上を出てAクラスに向かう。

↓ side 明久 ↓

「どれどれ、点数はつと……はあ！？」

「どうしたのじゃ雄一？……なぬ！？」

「秀吉まで……なあ！？」

「？どうしたんですか皆さん」

「吉井、一体何なのよ」

「水月たちがこれ程とは……」

そう言って雄一がメモを島田さんたちに渡す。

「何これ、ものこよつてはAクラス上位並じゃないー！」

「私より高い教科もありますよ」

「二人合わせれば完璧つてか」

「一人の点数は鏡花は理系に、水月は文系に片寄つている。  
一人合わせれば学年トップにも匹敵するんじゃないかな？」

「なんでこの点数でFクラスなんだろう?」

「私みたいな理由なら0点でしょうし」

「0点になつてるの忘れてるとかじゃないでしようね」

「そればかりは本人に聞いてみないことには何とも言へんな」

そう言つて携帯をいじり出す雄一。メールで聞いてみるのかな?

「まあ、後は返信を待つとして……作戦を立つぞ」

↓ side 水月

廊下を歩いていると携帯が振動した。

先生が周りにいないことを確認して携帯をひらく

「えーと、雄一か」

メールのタイトルに『雄一だ』って書いてあるし。

「ナニナニ、何でこの点数でFクラスなんだ?だと?」

「説明しない……」

「忘れてたなあ。それじゃあ『後で説明するが点数はマジだ』うん。  
こんなもんだろ」

やつこひつこする間にAクラス前に到着した。

「失礼します」

ちょっと遠慮がちに扉を開ける。

「……誰」

「おっ、びっくりした。

「えっと、2・Fの影隱水円と影隱鏡花です。どちらは?」

「2・A代表の霧島 翔子」

いきなり学年トップと「対面とは……

「上藤愛子さんと会いに来たんだが

「……わかった。待つてて」

「どうやら呼びに行つてくれるらしく、奥へと歩いていった。

「てか、鏡花はまた隠れてるし……」

「……ごめん……」

「別に、もう慣れた」

ちょっとしたら愛子たちの姿が見えてきた。

「やつほー。久しぶり。早かつたね」

たしかに会うのは久しぶりなんだが、メールや電話でじょっちゃん  
話してたから実感がないな

「久しぶり。代表が、点数とメアド教えれば行つていい。って言つ  
てくれたからな」

「久しぶり……愛子」

再開の挨拶を一通りかわす俺達

そこで愛子の後ろにいる、木下に良く似た人物に気がついた

「えーと、そちらは？」

「木下 優子です。よろしく」

「ああ。影隱水月と影隱鏡花だよろしく」

「……木下って、秀吉君の？」

「ああ、うちの弟知ってるんだ。秀吉の双子の姉です。よろしく」

「どうで瓜二つなわけだ

「よろしく……」

「挨拶も終わつたといひで、話は戻るけど点数気にするつてことは戦争するつもりなのかな？」

「ああ。この後Dクラス戦だ」

最終目的がAクラスなのは伏せておく。（元々、Aクラス戦には参加しないつもりだがな）

その時、携帯が振動した。

「すまん、多分作戦のメールだ」

そう言つて、一応周りを確認して携帯を出す。

内容は

『出来れば授業開始ギリギリまでAクラスで待機して、横から攻めろ。P-S 今回は低得点科目だけで戦え』

「どうだつたの？」

「こや、時間ギリギリまでここにいて横から攻められて  
なことでもござつた。

「あと、点数の低い科目で戦えだと？」  
「温存してゐるのかな？つてことは連戦になるんぢやない？」  
「かもな。でもまあ、はからずも時間がとれたから色々な話つか  
「そうだね」

「うして時間は過ぎていつた

## 第二問（後書き）

どうも作者です。

作中で言つてる『屋上進入禁止』は作者の学校まんまです。  
田舎だからか？いや、逆に都会の方があぶないのでは…とか思つて  
たり

#### 第四問（前書き）

ほかの作者様の作品で『Rバーカー 突破』や『スニーカーク』とか見た事はありましたが、嬉しいものなんですね！

そんな区切りはまだまだ先ながらも、見てもうえてる感じに喜びまくつて更新しちゃう俺つて…

そんなことより、第四問どうぞ！

## 第四問

「いやー、自己紹介はアイツのが傑作だつたな

只今、お互ひのクラスについておしゃべりしてゐわけだが

「誰?」

「吉井明久。分かりやすく言つながら唯一の観察処分者」

「ふーん。そんなに面白かったの?」

「ああ。ジョークで『ダーリン』と呼んでつて言つたんだが、Fク  
ラスなんて9割以上男子な訳で……」

「何かオチが読めちゃつたんだけど……」

まあ、そつだるつな。

あやこまで説明してたら予想ぐらじはつづか

「そりやもう野太い大合唱だつたぜ。お陰で『ダーリン』といふ言  
葉がトラウマになるところだつた」

あつやマジで危険だ。面白くはあつたが一度どめんだ

「ダーリン（ぬきひけつた／＼）」

「ちょひ、愛子……」

一人して赤面して俯く。なぜ愛子まで?と思つたが多分予想外に恥  
ずかしかつたんだろ?。

「あー、えつと…そうだ、吉井と言えば、姫路が弁当作つて来るの  
どつて話が出てたがどうなつたんだ?」

若干気まずくなつたので鏡花に話を振つてみる。

かなり露骨な話題転換だつたが、まあいいだろ？

「結局…みんなに作つてくれる？…」

「ふーん。結局そこに落ち着い「それってどういって事？」つまつ…」

びっくりした。愛子がここまで食いつぶとは…

「（愛子、大丈夫。姫路さんの田舎な吉井君だから）」「

「（それは良かつたけど、うーん……）」

「（水月をお皿に誘つてみれば？）」

「（ふえつ？い、いや、それは…）」

「（大丈夫。私は引っ込むから）」

「（いや、そうじやなくて、あの、その……）」

「（まあ、とりあえず誘つてみれば？）姫路さんって料理得意なのかな？」

何かさつままで小声で話してたと思つたら急にこいつに話を振られた。

「さあな。ある程度は出来なきゃあんなこと言わないと悪いが」

「そ、そういうえば水月と鏡花つて料理は出来るのかな？」

「ん？まあ、人並みには出来るつもりだが……愛子は？」

「ボクもそれくらいかな。ねえ、せつかくだから、お弁当の交換

とかしない？」

「あ、ああ。でも、今日は無理だな。寝坊しちまつてパンだからな

今朝買つてきた惣菜パンを見せながら言つ

「じゃ、じゃあ明日あたりお互に作って来よつよ!」

「お、おつ。じゃあクラスのやつらにも昼は用事あるつて言つとくへどつ」とへ

か

「…私はみんなと食べる。仲良くなりたいし…」

「?まあ俺は構わんが、それでいいか愛子?」

「うん。クラスの友達も大事だしね(ありがとつ鏡花ー)」

「…愛子、教室移動」

「あ、代表。そつか移動だつけ」

「真面目だなあ。まだ10分前だぜ」

「…5分前には移動し終わつてこるのが基本」

「俺達のクラスじゃ考えられんな。移動するなら俺達もいじ出た方がいいよな?」

「…別に。問題ない」

「代表もいじつ言つてるし。もうじがまじがへりじにじれば?」

「悪いな。いじの都合で…」

「ありがとつ…」

「それじゃ。戦争頑張つてね!あと、明日期待してるから」

「おつ。絶対勝つてやるぞ」

愛子は霧島さんと出ていってしまった。外に一瞬木下さんが見えたから三人で行くのだろう。

「つてか、いつの間にか周りも誰もいないし」

「んだけ熱心なんだ△クラス。

「電気…消されちゃつたね…」

そう。クラスのみんながいないので霧島さんが消していったのだ。  
誰もいない(はず)の教室に電気ついてても怪しいからな

「まあ、下手に見つかるよりいいだろ。あとは開戦を待つだけだ」

#### 第四問（後書き）

キャラが壊れてなかつたでしょ？  
第一問のあとがきで『ネタの原作をかく』とか言つてゐるけれど、とくに使つてなかつた

## 第五問（前書き）

バカテストが思いつきません…

## 第五問

『さあ 来い！この負け犬が！』

『て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだつ！』

『黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷり指導してやるからな』

『た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！』

『拷問？そんなことはない。補習が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのには「富金次郎」といつた理想的な生徒に仕立てあげてやるつ』

廊下に響き渡る西村先生の声……どんな補習なんだよ。それ

「もうそろそろ行くかな？理系が多いみたいだから俺だけ出る」

「頑張つて……」

「おつー！」

で、廊下に出たのはいいが……どうじょうつ？

『よ、吉井、早くフォローを……』

少し手前（Fクラス側）に島田さん（と吉井）を発見。

『島田さん、君のことは忘れない！』

『ああつー吉井！なんで戦う前から別れの台詞を！？』

なんかドロドロとした状態に見えるが大変そうなので加勢するか。

「Fクラス影隠が行きます。試験召喚」<sup>サモン</sup>

幾何学的な陣から出てきた召喚獣。黒いスーツを着たデフォルメされた俺の姿なんだが、武器は鎖鎌。良いんだか悪いんだか…

Fクラス	影隱水月	VS	Dクラス	清水美春
化学	68点	VS		
41点				

鎖についた分銅を敵に引っかけて思い切り引く。

引っ張られて近づいてきたところに一閃。首を切り裂く

「吉井い、女子見捨てるのはまずくないかい？島田さん大丈夫か？」  
「ええ、助かっただわ水月。補習の鉄じ 西村先生、早くこの危険人物を補習室にお願いします」

「おお、清水か。たっぷりと勉強漬けにしてやるぞ。いっちに来てなにやらあだ名（おそらく鉄人だらう）で呼びそうになつてなかつたか？」

「おお、清水か。たっぷりと勉強漬けにしてやるぞ。いっちに来てさつかも聞いたが補習室つてそこまです」いののか。

「…………影隱水月、必ず殺します」

怖ええ。ボソッと言づからなおのこと怖ええ

「吉井」

「島田さん、お疲れ。とりあえず一度戻つて化学のテストを受けてくるといこよ」

「吉井」

「さ、行こうか水月。戦争はまだまだこれからだ」

「吉井いっ！」

「は、はいっ！」

あえて吉井の言葉にも返事をせずに傍観していたのだが、ま、自業自得ってやつだな。素直に謝ればいいものを

「……ウチを見捨てたわね？」

「……記憶にござりません」

「そり。水月は聞いてたのよね？」

「これの事か？」

そう言つてボイスレコーダーを取り出す俺。

『島田さん、君のことは忘れないー。』

さつきの吉井の台詞だ。実は開戦したときから状況把握のため録音している。

「す、水月、貴様何の恨みがあつてこんなこと……」

「特に無い」

「この野郎！ふざけやがいだだ、し、島田さんその関節はそつちには曲がらな……（ガクツ）」

あ、死んだ（といふか氣絶だが）

「しようがない……みんな聞け！部隊長が行動不能の為臨時に俺と島田さんで指揮を執る。すまんが、須川君は雄一にこれでいいか聞いてくれ」

「わかった。すぐにこいつ

これでひとまず安心か？

転校生が部隊長代理つてのもおかしな話だが

「島田さん、教師の科目を教えてくれ」

「うん。あそこには化学の五十嵐先生、あっちの布施先生も化学よ。それであっちに立つてるのが総合科目の高橋先生」

指をさして教えてくれた。理系メインの戦場か……みんなそこそこ消耗してるし、

「布施先生の方は防御に専念。多少大袈裟にでも出来るだけ避ける！五十嵐先生の方は高橋先生の方と交代しつつ戦線を維持！」

いつまでもつか知らんが今の「うし」に作戦の確認を

「（島田さん、この作戦の要は姫路さんでいいんだよな？）」

「（うん。今補充試験を受けてて放課後になつたら紛れながら代表を討つ予定よ）」

「（そうか。どうするか……）」

「水月、代表からの伝言だ『やれると書つならやつてみる。ただし失敗は許さん』だそうだ。あと、相手は数学の木内を連れ出したようだ」

最後の方について島田さんが「採点の早い先生」と説明してくれた。

「次はおそらく戦線の拡大を狙うだろう。もう一度悪いが、先生達に対する偽情報を流してくれ。内容に困つたら雄二に指示をもらえ」「わかった。必ず騙してみせよう。」

そう言つて走り去る須川君。

雄一ならきつと何とかするだらう。頭の切れるやつのようだからな

「さて、じゃあ俺達も適度に援護するか

「そうね。部隊長の代わりだから戦死はしないようにしないと

心なしか『部隊長の代わりだから』を強調してないか?

しばらくすると放送が入つた。

『船越先生、船越先生』

おつ、さつき相手の部隊長らしきやつ（塚本だつけ?）が言つてた  
先生だ。

『吉井明久君が体育館裏で待つています』

良く分からぬが良いのかこれで?

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

うん。忘れよう。クラスの連中が「水月、何て冷酷な奴だ」とか言  
つてたが、俺はここまで指示しちゃいない。

『戦死!』

『こつちもまざい。応援を』

だいぶ消耗してきたな。

「水月、後ろから援軍が!」

言われて振り向くと遙か後方に雄一たちのいる本隊が。

『合流せらるな！全員討ち取れ！』

ちつ、間に合わん。こうなつたら、

「総員、後退しろ！」

言いつつ『ある2つのモノ』を地面に落とす。バンッという音と共に召喚フィールドが消滅し、辺りが煙に包まれる。

『何が起きた！？』

『フィールドが消えたぞ！』

『前も見えない！』

だいぶ近づいてきたな。

「総員構えろ！合流でき次第攻めるぞ！」

視界が遮られたこの状態であえて大声で指示を出して、落としたものを拾う

片方は単なる煙幕だがもう片方は特殊な電波を出して召喚フィールドを崩すものだ。

「待たせたな。行くぞ」

隣に来た雄一の声と共にスイッチを切る  
もう視界は大部分回復している

「Fクラス近藤がいきます。」

「じゃあ俺も。同じく影隠こきます。」

軽く追い詰めていく

『IJOは退くぞー・全員遅れるなー。』

まあ、そつなるよな

「あまり深追いするな。俺達も退くぞー。」

対峙した敵を鎌で切り裂き雄一の元へ

「こんなもんでも良かつたか?」

「上出来だ。予想よりかなり良い」

さて、ロクラスも退いたことだし

「俺達も戻つて回復しないとな」

「ああ。みんな一度教室に戻るぞー。」

テストの後  
「すーいーげーつー」

何か吉井が迫ってきた。包丁持つて……

「なんだよ。そんなもの持つて

「死ねえええ……」

「うおつ！」

なんだコイツ、人間離れした速さで突きだしやがって

「どうせあの放送もおまエなンだ口ウ。報イヲうケロ！」

「ちょっと待て吉井！放送自体はそうだが内よ「やはリヲマえカー！」

おい！最後まで聞け！」

完全に入外じゃね？今のコイツ

「内容を指示したやつを知つていい。攻撃を止める」

「そンなウまいはナシがアルか」

「大体、あの放送の船越つて誰だよ？」

沈黙。ながーい沈黙。そりやも「ながーい沈黙

「そうだよね。水月がそこまで知るはず無いヨネ」

若干、壊れたままな気がする……

「で、内容を指示したやつは？」

「おそらく雄一だろ？」「う

「ありがとう水月。あと、僕のことは明久でいいよ」

「そうか。頑張れよ明久」

「うん。さてと、雄一はつと」

あたりを見回しているところ悪いが真後ろにいるぞ

「俺がどうした？」

「ちょうど良かった。雄一、あの放送…」「もちろん俺だが？」

「シャアアアアア！」

「あっ、船越先生」

雄一の言葉で即座に清掃用具入れに。あそこからじりじりして急停止できたのか謎だ

「馬鹿はまつといで行くぞ。もつそろそろ下校時刻だ」

「雄一のやつあれで止まれなかつたらどうするつもりだつたんだろつか…」

「参戦出来なかつた……」

鏡花も戻つてたのか。確かに理系か総合科目しか無かつたしな。

「今度はワシらも文系の先生と共に出陣じや。機会はあるじやねつ」

「……（「ク」）」

みんなやる気だしてゐねえ。

「おっしゃ。Dクラスの大将を討ち取るぞ」

『おつりー』

みんなが教室を出ていく中、まったく動かない奴が一人。

「明久、多分だがさつきの雄一の台詞は嘘だぞ」「マジで？」

超がつくせん小声で聞いてくる。そこまで脅威なのか？その船越と言つ先生は

「おそれくな。廊下を女の先生が通つたが多分それも違う。結構若かつたし」

ドバンツーとロッカーが内側から開く

「ありがとう水月！マツテテコウジ。スグいくかラ」

また吉井が壊れた。

「さてと、俺も行くか」

戦況を見つつ参戦しようと思つたら、とおへで姫路が召喚しているのが見えた

「あれ？ ゆづくつしそぎた？」

## 第五問（後書き）

明久壊しすぎたかな？でもこのくらいいきそつですよね…うん。 そ  
うに違いない（自画完結）

## 第六問

Dクラス代表 平賀源一 討死

「あー面白かった。初日から戦争を体験出来るのは…」

「おい水月、どこ行くつもりだ?」

「どこ行くつもりも何も帰るんだが…」

「まあそつ急がなくともいいだろう。明久、水月と教室で待つていってくれ」

「いいけど、雄一は?」

「平賀に伝える事を伝えたら行く」

「分かったよ。じゃあ後で

ちっ、まあいいか。

数分後、教室には明久、雄一、木下、土屋、島田さん、姫路さん、鏡花、俺が集まつた訳だが、

「まず最初に、なぜその点数でうちのクラスなんだ?」

「うーん、一言で言うならこっちの都合で転入時期をずらしてもらつたから強制的にFクラスつて訳」

「つまり、わがままを通す代わりにFクラスにする。って感じか」

わがままで……これにはちゃんとした理由があるんだがな

「まあ、そうとも言えるな

「じゃあ次が本題だ。戦争中に使つたあれはなんだ?」

「あれ?煙幕のことか?」

「とぼけるな。フィールドを壊したやつだ」

やはり流されないか。

「あれね。まだ試作段階だつたんだが……」

「こいつは特殊な電波を出す装置でな。フィールドを作ることはできないうが、崩すだけなら簡単だ」

「つまりどういう事なんだ？」

「分かりやすく言つとこいつは天秤に重りを載せるようなものだ」

みんな何となく分かつたって顔してるな。（例外として頭から煙だしてるやつ一知）

「つまり、つりあつてる天秤がフィールドじやとして……」

「重りが載るとバランスが崩れる。そうすると……」

「……フィールドの自壊」

「まあ、そんなもんだ。元々科学とオカルトのバランスが大事なシステムらしいからな。で、他に質問は？」

「質問ではないのじやが」

「ん？ 何だ木下？」

「その『木下』というのをやめてほしいのじや。ワシにも同学年に姉があつての」

「ああ。そういえばAクラスにいたな」

「なんじや。姉上に会つておつたのか」

「昼にちょつとな。じやあ秀吉でいいよな」

「つむ。よろしくじや」

「……オレも康太でいい」

「りょーかい。で、秀吉と康太以外は何かないのか？」

「じゃあウチいいかしら?」

「おう。何だ島田さん」

「さつきのやつ、自作したみたいに聞こえたけど、自作でいいの?」

「そうだぞ。趣味で作った」

「確か機械いじりって言つてたつけ」

明久にしてはよく覚えていたな。

「じゃあ、他にはどんなもの作ったの?」

「うーん、色々あるが分かりやすいのだと……警備ロボットかな」

『やけにハイレベル!?』

きれいにハモつたな。

「でも、自爆機能ついてなかつた……?」

『ええつー?』

「他には……ピッキングツール」

『犯罪だぞ!?!』

「これにも自爆機能が……」

『何故!?!』

「あとは携帯式充電器「自爆機能つき」……おいつー」

『自爆から離れろ!』

『しようがない。じゃあ……』

『長いよ!自爆禁止しただけじゃないか!』

「ああ、あれがあった。外付け式パンチ力強化マシン」

『なんか物騒な響きね』

「そうか?単純に腕につけた機械でパンチの勢いを強めるだけだ」

「一応聞くけど、自爆は?」

「しない。腕全体をマシンアームみたいに覆うからな。自爆なんかしたら大変だ」

『(それ以外も駄目じゃない?)』

「でもそれでパンチ打つと肩がムグツ」

「（おこ、ぱりかな鏡花…）」

鏡花の口を塞ぎつゝ囁く。

「『肩が』何…？『肩が』どうなるの…？」

ちひ、しょりつがない。

「脱臼」

『脱臼、じやん…』

そんなに一斉に叫わなくて…

「ちなみに水円は自分で試して脱きぬくグッ」

「（そこは）ぱらすなあああああ…」」

もつみんな察して一ヤ一ヤ顔でじつに見てるし…

「ねえ、『脱臼した』でここのはね？」

し、島田さん。それは…

「ノーノメンア…」

やつぱり煙玉の予備を発動。

「おこ水円…こんな感じで使つな…」

雄一の声がしたが構つてこいる暇はない。

先ほど出口の方向は確認済だ。

「ふう。いじめにあつた気分だぜ」

とつあえずもう帰るわ。

（side鏡花）

「窓開けてればすぐに消える……」

「分かつたのじゃ。確かにこの辺りじゃな」

秀吉君が窓を開ける音がする。

「風もあるようじゃし、」それでいいじゃらわ。「ひい

「しかし、アイツは何者だまったく。あんなもの作れるなら有名になつてもおかしくないぞ」

「やうだよね。その内召喚フィールドも発生させられるような気がする」

「そりじゃのう。趣味のレベルではなかつたぞい。水月は何故あそこまでの技術を?」

「それは……その……」

そこを聞かれると痛い。

「すまんのう。先ほど質問は撤回するのじゃ」

何も聞かないでいてくれた……ありがたいけど、つらい。

「まあ、人には大なり小なり秘密があるものじゃ。言いたくないなら言わんでいいのじゃ」

「ありがとう……」

「さて、水月は逃げたが聞くことは聞いたし俺達も帰るか」

もつ外薄暗くなつてこる。

「せういえば、鏡花は家はどこなのじや？」

「です……」

「それなら秀吉の家が近いね」

「そうだな。水月は先帰つちまつたし、送つていつてくれるか？」

「もちろんじや。鏡花さえ良ければじやが」

「えつと、じやあ……お願ひします」

そういうたらみんなそれぞれに帰つてこつた。

「それじゃあワシらも行くかの」

「うん……」

それからなんひとつない雑談をしながら校舎をでた。  
しばらく歩くと家の近くについた。

「家あれだから。ここでいいよ……」

「つむ。ではまた明日の」

そう言つて別れたけど、家の前で振り返ると別れた場所にまだ秀吉君が立つていて。私は嬉しくなつて秀吉君に見えるように手を振る。秀吉君も振り返してくれた。

こんな風に手を振るのは子供のとき以来だと思ひ返しながら家に入つていた。

## 第七問

翌日、遅刻しない程度の時間に教室に到着

「おう雄一。早いな」

「そうでもないだろ。お前が遅れぎみなんだ」

「遅刻さえしなきや大丈夫だろ。ところで、Dクラスとは結局どうなったんだ?」

「条件付き和平交渉で平和的解決となつた」

あんだけ派手にやつといて何が平和的だ

「条件付き? 設備以外にか?」

「いや、設備は交換しない。詳しいことは……今からみんなの前で言おつ」

周囲を見て大体揃つているのを確認して壇上に立つ雄一

「みんな聞いてくれ。昨日の戦争の事だが、設備は入れ替えない!」

『なんだつて!?』

『昨日の戦いは無駄になるのか!?』

「落ち着けみんな! あくまで昨日のはウォーミングアップだ! それに次への布石もあるから、断じて無駄ではない!」

そこまでは何となく予想がつくが、それ以降が分からん

「次はBクラス戦だ! Dクラスにはその作戦のため動いてもらひ! ただ、どこから漏れるか分からんから作戦中に隨時話す!」

結局教えないんかい！

「Bクラス戦が終われば次はAだ！ 気合い入れてテストを受ける！ 以上」

壇上からじつに向かつてくる雄一

「雄一、俺達にも教えないつもりか？」

「そんなことはない。後で話すさ。昼休みにでもな」

昼休み、だと？

「すまん、昼休みはまたAクラスに呼ばれてるんだ」

「そうか。かといってここで話すのもな……」

「じゃあ質問を変えよう。俺はその作戦に入っているのか？」

「大きな意味では入っているが、中心からはだいぶ遠い位置だな」

「そうか。ならみんなと同じく隨時聞くとしよう」

その時、明久が登校してきた。ギリギリだな

「そういえば雄一、一時間目はテストって何だつけ？」

「ちょっと水月、僕は無視なの！？さつきこっち見たよね

「ああ、いたのか明久。視界に入らなかつた

「眼中にない！？」

「水月、一時間目は数学だ」

「うわっ、こきなりかよ  
理数系は苦手なのにな……」

「雄一まで僕を無「監督は船越だつたな」「ゴメン、用事ができた」

災難だな明久。だが、雄一を殺ることより逃走とは……

## 昼休み

「 Side秀吉」

「 つあー……づがれだー」

午前中のテストや船越先生の事があつたのじゃ。そつなつてもおかしくないのう  
ちなみに、近所のお兄さんを紹介して事なきをえたらしいぞい

「 つむ。疲れたのう」

「 .....（ノクノク）」

「 よし、昼飯食いに行くぞー！ 今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

雄一は相変わらずすくい食欲じやのう

「 じゃあ俺はーーで抜けさせてもりおつ」

そつ言つて歩き去る水月。たしか友人に呼ばれておるのじやつたか

「 秀吉君……」

「 ん？ どつしたのじや 鏡花」

「 姫路さんのお弁当……」

「 おお、そついえばその様なことを言つておつたのう  
「 は、はい。迷惑じやなかつたらどつぞつ」

そつ言つて後ろからバッグをだしてくる姫路。明久の為に頑張つて

「迷惑なもんか！ね、雄一！」

「ああ、そうだな。ありがたい」

「そうですか？良かつたあ～」

明久も好意に気付かないものじやのづ

「むー……つ。瑞希つて、意外と積極的なのね……」

島田ももう少し優しくすればいいじやうづ……

「それでは、せっかくの」馳走じやし、こんな教室ではなくて屋上  
でも行くかのづ

「そうだね」

「そうか。それならお前らは先に行つてくれ

「ん？雄一はどこが行くの？」

「飲み物でも買つてくる。昨日頑張つてくれた礼も兼ねてな」

それはありがたいのづ

「あ、それならウチも行く！一人じゃ持ち切れないでしょ？」

「悪いな。それじゃ頼む

「おつけー」

島田よ、その気遣いは明久には向けられんのか？

「きつんと俺達の分をとつておけよ」

「大丈夫だつてば。あまり遅いとわからないけどね」

「そう遅くはならないはずだ。じや、行つてくる」

やつで教室を出る一人。おおかた一階の売店じやうひつ

屋上に出て姫路の用意したビニールシートにみんなで腰を下ろす

「あまり自信はないんですけど……」

姫路が重箱を開ける。なんとも美味しそうな弁当じや

「美味しそう……」

鏡花も同意見のようじやのう

「一部はレシピそのままになっちゃいましたけど」

「そんなこと気にしないよ。それじや、雄一には悪いけど先に……」

「…………（ヒヨイ）」

明久が食べようとした時にムツツリーが先制しあつた

「あ、ずるいぞムツツリー！」

「…………（パクッ）」

バタンッ

ガタガタガタガタ

なぬー？ムツツリーが倒れおつたぞい

「わわわ、土屋くん？」

ムクツ

「…………（グツ）」

美味しいと伝えているんじゅうが、明らかに演技じゅな

「じゅあ、私も……」

しまつたのじゅー・鏡花が氣付いておらぬよつじゅー・ちじゅう

「（ムグムグ）美味しいれす姫路じゅん

呂律がまわつておらんぞ？

まさか、ムツツリーーーとは違ひ精神が……

「あれつ？鏡花ちゃんどうしたんですか？」

「何か顔赤いよ。大丈夫？」

言われてみればそりかもしれんのう

「鏡花よ、大丈夫かの？少し横になつてしまひじゅー・」

「ひでよしぐんわたしにやららこじょーぶですよー」

『（キャララが崩壊した！？）』

「ればどみても『あれ』じゅうなあ

「もしかして鏡花、酔つた？」

「姫路、一つ聞いてよいかの」

「何でしようか？」

「先程鏡花が食した料理に酒類を使つたかのう？」

「えーと……やつです。使いました」

あの間から察するにあの料理はレシピがおつりこ。やつでなければ、ムッシュリーの「舞じやる」

「だつたらアルゴールが飛んでなかつたのかな?」

「その様じやの?。しかし」のままでは……「ひつ、鏡花、何をしておるの?」

後ろから抱きついておつたぞ

「ひでよこへんおはなししよう」

「待つのじや鏡花。お主何をしてくるかわかつておるのか?」

「うん…だきりゅうてる」

なこやう幼くなつておらとか!?

「もつとおはなししたいよー」

「それよりもまずこの後の事じやー」

「そうですね。」のままでは午後のテストが……

「それよりもクラスメイトの反応の方が……」

なんとも闇黙じやな

「わー。ひでよつまんつめたいです。」

「……」

「なんじやと…」

『な、ななな、何いいー!?』

明久も姫路も「いつを見るのでない」。ワシも混乱してゐるのじやー！

「秀吉、『いつ』となんだい？」

「むしろワシが知りたいのじやー」

「何か好かれるようなことありましたか？」

「わうじやのう……」「しちゅもんじゅめからたりゅけてくれたのー」

「うこえはわうじやったのう」

「恥ずかしがり屋な女子……むれこ男子からのお救出……むつれど

ストライクじやない？」

「じゃがわう特別な」とでもなこじやわう

「羨ましこですか……」

姫路もわうじた」とひ弱このじやわうか

「と、とにかくじや、今は」の後の事をじやな「酔つた時つて本音  
が出来やすこつて畜つよね？」あ、明久つむかごんじーー！」

「のままで弄られるだけ、じや。かくなる上は

「とつあえず保健室に運ぶぞー。よーな鏡花？」

……へ返事が……

「秀吉、じー」

「鏡花わうじや寝ちやつてしまふ」

なんじやじーー！」の体制のままじやと畜つか

「ひでよしへん」が元の「あらわせ」を「

111

「どうせだからそのまま保健室行ってきなよ」

「それでは、おまえの仕事は、おまえの仕事でいい。おまえの仕事は、おまえの仕事だ。おまえの仕事は、おまえの仕事だ。」

まあそんじゃなくては行かでくるのじゃ

その後保健室までに一、二度「好き」と言われ赤面したのはまた別の話

第七問（後書き）

すいません。酔っ払いイベントがやりたかったんです  
微妙だったかな？

## 第八問

少し遡つて昼休み開始時

～side水月～

何かみんなに申し訳ないなあと思いつつもAクラスの前まできた俺

「失礼しまーす。工藤愛子さんいますかー？」

「水月くんだつけ？今日は一人なんだね」

声をかけられ振り向くと木下さんと霧島さんが立っていた

「あ、木下さんに霧島さん。まあ鏡花はクラスのやつらとな  
「ふーん、そうなんだ。愛子ならあつちにいたわよ」

そう言って教室の奥を指差す木下さん

「てか、勝手に入つていつていいのかよ」

「……大丈夫。設備は違うけど基本的には『気にしないでいい』

まあ他クラス行くだけならここのモジモジしないんだが、いかんせん  
このクラスの設備が凄すぎて……

「そこまで気になるんだつたらこのクラスのみんなと話してみれば  
？みんなと知り合いなら気にせず入れるんじゃない？」

「まあ、それも一つの手だな。とりあえず今は愛子のところに行く  
わ」

「うん。それじゃあ私達はこれで」

「……また」

「おひ。サンキューな

さて、愛子が居るといつ方向へ

「えーと……あつ、いたいた」

愛子の後ろ姿を発見。来るのはわかつているはずなのになぜ背を向けて座っているんだ？

「よつ、愛子」

「わひやあー」

いや後ろから声かけたぐらいでそこまで驚かんでも……

「つて、水月か。まつたく驚かさないでよ」

「悪い悪い。ついな」

「まつたくもつ」

「そつ怒るなつて。驚いた顔も可愛かつたぜ」

「／＼／＼／＼」

顔を真つ赤にして俯こちました。

「（可愛いって言つてくれた……嬉しいけど、恥ずかしい）」

「……やっぱセリフがくさすぎたか？」

沈黙されて不安になつてきた

「いやいや、そんなことないよ。可愛かつたつて言われるのだつてう、嬉しかったし（あんなセリフを普通に言えるのに何でボクの気持ちには気付かないの？）」

モジモジといふ表現を表現しているかのよつな状態で言わると何か照れるな。

「……」

「……」

「えー、あー……やうだ。弁当食べようばば

流れを変えようと弁当を差し出す俺

「う、うん。そうだね」「ね

愛子の方も鞄から弁当を取り出す

「あんまり自信はないナビ……」

「どれどれ……お、うまそうじやん

弁当箱には厚焼き玉子をはじめとするオーソドックスな料理たちが

「じゃあこの玉子焼きから（パクッ）ムグムグ

「ど、どり~」

「うまいーだしの加減も俺好みだし

「そう?良かつた（鏡花に水月の好み聞いておいて良かった…）

「うまいつまご。ん?愛子は食べないのか?」

まだ蓋もとっていないし。

「そ、そうだね。えいっ

かけ声と共に蓋を開ける愛子。かけ声は必要なのか?  
「うわあ。ボクのより美味しいそつ

「もうか？俺は愛子のやつの方がつまんない見えるが……」「いやいやそんなことは……」

唐揚げを食べる愛子。そういうえば他人にはあまり食べさせたことがなかつたな

「ボクのより美味しい気がする……」

「ま、味の好みは人それぞれだからな。たまたま愛子の好みの味だつたんじゃないの？」

「そうかもしれないけど」

雑談しながら弁当をたいらげる

「いやー、皿がつた。サンキュー愛子」

「いやいやこっちこそ。……また、こいつ事やりたいな」「確かに。いつそ曜日を決めて毎週やつてもいいな」

「えつ、でも迷惑じや……」

「いやお互いに作つてくるなら迷惑でもないだろ。さすがに毎日は大変だろうし、週一一日なら火・木、週二日なら月・水・金みたいにしてさ。愛子はどうだ？」

「せ、せつかくだから週三日がいい……かな」

「俺もそれでオッケーだ。元々自分の分は作つてたからさして変わりはないし」

「じゃあ、そうこう」と

「おー。まだ時間あるし……」

《生徒の呼び出しをします》

校内放送が流れる

『2・F影隠水月、至急学園長室まで来てください。もう一度繰り返します。』

「ちょっと水月つてば何したの！？学園長室に呼び出しなんて……」「さあ？わかんない。でもまあ行つてみれば分かるだろ」「あーあ、もつとおしゃべりしたかったな。でも呼び出しなら仕方ないよね」

「すまん。また今度な」「うん。行つてらっしゃい」

そんな風に送り出されると何か変な感じが……

「行つてきまーす」

♪Aクラスside♪

「まるで新婚さんのようなやりとりだつたわね。主に最後が「な、なな何の事かな？優子」」「羨ましい」「だ、代表まで……」「でも大変そうね。彼無自覚つぽかつたし」「というか、二人とも何時から聞いてたのさ」「……一部始終」「だつて、彼に愛子の場所教えたのも私達だもの」「え！？じゃ、じゃあ」「『驚いた顔も可愛かつたぜ』とかも聞こえてたわよ。私も一度ぐらいい言られてみたいわ」「いや、あの、その……」「うわっ。そこまで赤くなる？顔真っ赤よ」「私も……雄一に言られてみたい……」

「（代表の驚いた顔……あんまり想像できない）」

## 第九問

学園長室前

「あー、嫌だな。多分昨日のあれだよなあ……」

フィールド崩すやつ、使つちまつたし。学園長にまで話がいったのか

「セイ、と」

「ン」

「先ほど呼び出された影隱水月です  
『入りな』

室内からの応答に「失礼します」と言つて入る。

『ば、化物！』とか言つてみたくなるような高齢者（学園長、藤堂  
カヲル）がいた

「なぜ呼び出されたかはわかっているだらう？」

「昨日の事、ですよね？」

「そうさね。ただの一生徒があんなこと出来るはずがない。そこで  
……」

やつて資料らしき紙束をこちらに放つてきた

「色々調べさせて貰つたよ。色々ね」

「その様ですね。両親の仕事内容まで調べてありますし」

「『両親』だけじゃないだろ？？」

「ええ。まさか『俺達』の方までバレてるとは……」

「そこで話を戻すが、昨日の事を不問にしてやつてもいいよ」

「……条件は何でしょう？」

「なあに簡単なことさね。アンタの技術を提供してもらいたいのさ」

「こんな若造の技術を、ですか？」

「最新技術に関しては若者の力を借りるのは良いことさね。それよりもうちの技術者に欠員が出ちまつてね。その穴を埋めるのにちょうど良いタイミングでアンタを見付けたのさ」

「理由は分かりました。ところで、それは学園長としての『命令』ですか？」

「いや、これはアンタ個人への『依頼』さね。『支援者』へのね

依頼、ですか……

「それでしたらまず、期間、報酬、その他注意点などを明示して頂きましょ」

「期間は卒業まで。報酬は昨日の事を不問にする事。諸注意としてはシステムの情報は部外秘だということぐらうさね」

「長っ！そして安っ！！ 失礼。さすがに約一年間でそれは無いでしょ」

「報酬に関してはさすがに冗談さね。じゃあ、どの程度追加すれば動くんかい？」

「そうですね……俺とせいぜい鏡花ぐらいですから、期間内において俺の個人的行動について黙認、または許可をしてください」

「つまりはよほどの事がない限り自由に生活せろ。ということか

い

「まあ、そうですね。クラスがクラスだけに問題はしょっちゅうでしょ」

「いいだらうその条件で。ただし、今後はシステムに影響のありそ

うな物は一度確認をとつてから使いな」

「もしかして、昨日も影響ありました？」

「当たり前さね。お陰でこっちは大忙しだったんだよ

「それはそれは。失礼しました」

まあ試作品だつたしょ「つがないわ。

「話は以上さね。つと、忘れるといふだつたよ」

そう言つて机の上の電話を操作する  
あ、携帯が……

「連絡は今かけた番号からするから、ちゃんと分かるよう元にしき  
な」

「分かりました。では、失礼します」

やつと化物から解放された。（実質首輪つけられたようなものだが  
……）

さて、まだ時間はあるが……雄一達のほう行くか。また屋上に行つ  
たようだつたし

屋上

「で……何？この状況」

簡潔に表すと死屍累々

「あ、水月。呼び出されてたけど大丈夫なの？」

「気にするな明久。昨日のやつをもう使つくなつて言われただけだ。  
(嘘だけど) ところでこの状況は？」

「話せば長いことながら……」

「略せ」

## 「お弁当型バイオ兵器の結果」

えらく小声だな。まあ、制作者（であろう人物）の前でバイオ兵器はないわな

「お弁当に酒を使っていたんですけど、アルコールがとんでもなかつたらしくて……」

姫路さんがそう言つてくるが既に明久から真実を聞いているし「そう。みんなお酒弱かつたのかな？鏡花とかスゴかつたし……」などと！？

「アイツは？」

「酔つ払つて幼児化して保健室にて熟睡中らしくよ」

やつぱりいつも通りか

「らしい？」

「秀吉が連れていったからね。僕達はここにいたし」

「まったく、大変だつたぞい。鏡花は抱きついて来る上にあのよくな言葉を……」

何なんだ？復活した秀吉が説明しようとしたが、なぜか赤面して俯いちまつた

「あのね水月。鏡花が秀吉に『好き』つて『いれ明久…言つでない…』」

ほつ。鏡花は秀吉が好きなのか。なぜ秀吉なのか今度聞いてみよう

「そつなのか。アイツは酔つと『心から思つてている事』が駄々漏れ

だからな

「心から思つてゐる事……」

秀吉がせりて真つ赤になつていぐ。もつ既にトマト状態だ

「さて、雄一達を起こすか」

「でも、そつ簡単に起きるかなあ？」

「荒療治になるがこれなら一発だ」

制服から取り出した物は

「万年筆？」

「それでどうするといつのじや？」

「これが実は小型スタンガンでな。ペン先から電氣が流れるんだ」

「それつて危なくないんですか？」

「まあ市販品だし。大丈夫だろ」

「でもやつぱりあぶないよ。せめて島田やさはやめておいつよ」

島田さんまで犠牲者だつたとは……どつち（マルホール。バイオ兵器）のせいなんだろうか

「わかつた。じゃあこれは雄一だけに使おつ。姫路さん、悪いけど康太を起こしてくれ

「わかりました」

数分後

「明久いつか殺す」

「雄一、理由は知らんがせめて心の中だけことじめり」

『ねえ、ウチさつきまでの記憶が無いんだけど……』

『アルコールが残つてたから酔つて寝ちゃつたし、そのせいじやな

い?  
『

上手いこと流したな。さすが明久

「ところで雄二、Bクラス戦はどうするんだ?」

「そうだな、宣戦布告は明久でいいとして……」

「よくないよ雄二! 今度は一人のびっちかが行つてよ

「断る!」

「即答するなよ! バカ雄二にバカ水月!」

「しようがないな。じゃあジャンケンにしよう

「心理戦ありでな」

「わかった。それなら僕はグーを出すよ」

かかつたな。

「「「そうか。それなら俺は」「」」

「何も出さない」

「えつ、そういうのありな「お前がグーを出さなかつたらブチ殺す」

ええつ! ? ちよつ、まつ

えげつないなあ雄二。便乗はするがな

「じゃ、いぐぞ。ジャンケン」

「わああつ

パー(雄二)、俺(グー) 明久(グー)

「決まりだ。行つて来い

「絶対に嫌だ!」

悪あがきをしあつて……

「敗者は勝者に従うべきだらうが」

「Dクラスの時みたいに殴られるのを心配してくるのか?」

「それもあるー。」

まあ、そうだらうな

「それなら今度こそ大丈夫だ。保証する」

いやに自信満々だな。といふか楽しそうだ

「なぜなら、Bクラスは美少年好きが多いからしき」

「そつか。それなら確かに大丈夫だねつ」

これで終わるとは思えんが……

「でも、お前不細工だしな……」

やつぱり。そうきたか

おい、それは……

「失礼なー。365度どからど見ても美少年じゃないかー。」

「5度多いぞ」  
「実質5度じゃな」  
「一部から見ると美少年……?」  
「9割以上不細工だがな」  
「みんななんて嫌いだつ」

俺も間違えたことあるがな。……小学生の時に

「とにかく、頼んだぞー」

「心の片隅で安全を祈つてない」

「祈つてないのかよーもつ、行けばいいんでしょ」

ズカズカと屋上を去つていく明久

「さて、午後もテストだ。それぞれベストを尽くそう」

ぶつちやけ俺達はほとんど必要無いんだが一応全教科受けている

「雄一こそ頑張れよ」

「代表が出陣なんて事態にはならないつもりだがな」

「しかし、相手はBクラスじやぞ。下手をすれば攻め込まれかねないのじや」

「わかっているわ。んじや、教室に戻つて悪あがきでもするかな」

雄一の言葉を合図にしたかのよつてみんな屋上をあとにする

放課後

「……言い訳を聞こつか

千切れかけた制服を押さえながら明久が聞いてくる

「何の事だ？」

わかつてはいるんだがな

「雄一なら分かるよね？」

「予想通りだ」

「くきいー！殺す！殺し切るーー！」

「落ち着け」

「ぐふあつ！」

綺麗にきまつたな。あれは鳩尾だな

「先に帰ってるぞ。明日も午前中はテストなんだから、あんまり寝てるんじゃないぞ」

そう言って颯爽と去っていく雄一。

「えっと、」愁傷さま？』

俺も帰る。後ろで何かわめいているが気にしない

第十問（前書き）

オリキヤラ三人目登場！

## 第十問

「さて皆、総合科目[テスト]」苦労だった

午前のテストも終わり昼飯を食つた後（今日はクラスで食つた）、雄一が教壇で話はじめた

「午後はBクラスとの試合戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

「セレード、前線一部隊は姫路瑞希と影隱鏡花に指揮を取つてもいいつ

なんでも、姫路さん率いる部隊（25名）が特攻して鏡花の部隊（15名）が状況に応じて攻めたり、撤退の援護をするらしい。俺？俺は近衛兵らしい（理系中心で攻めるらしいからな）

「が、頑張ります」

「頑張ります」

『つおおーっ！』

やつぱり数少ない女子と一緒に戦えるのは嬉しいんだろうか？

「指揮官補佐は姫路に明久を、鏡花には……誰がいい？」

親しいやつを選んでいるな？多分

「じゃあ、秀吉君で……」

「わかった。良いよな秀吉？」

「う、うむ。問題ないのじゃ

「じゃあ、秀吉君で……」

赤面してるけど本当に問題ないのだろうか？

恐らくは鏡花の気持ちを聞いて（しまつて）変に意識しかやつてゐるのかな？

「秀吉」 一つ教えてやるの

「？何じゃ水月？」

「アイツは酔つ払つと……記憶が飛ぶ」

「なんじやと！？」

声でかつ。演劇部で鍛えた力、フルに使つてただろ

「どうした秀吉、急に大声出して」

クラス中が視線を向けるなか、雄一が聞いてくる

「な、なな何でもないのじゃー本当に何でもないのじゃーーー」

「あ、ああ。了解した」

絶対に了解しないだろうが

「ねえ水月、何言つたの？」

「ああ、明久。単に鏡花が酔うと記憶が飛ぶと言つただけだ」

「……絶対面白がつてるよね？」

だつて、秘めた想いをはからずも知つてしまつたなんて小説みたい  
じゃん。

「小説の様に両想いになるかが見物だな」  
「やっぱり面白がつてるし。可哀想に秀吉」

## キーンゴーンカーンゴーン

「よし、行つてこい！田指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

前線部隊が出撃していった

（side鏡花）

前線指揮を任せられた私と瑞希ちゃんは、監に置いていかれそうにな  
りながらやつと前線にたどり着きました

「お、遅れ、まし、た……。」（め、んな、そこ……）

『来たぞ！姫路瑞希だ！』

『もう一人いるがそいつはどうする？』

『噂で聞くようなやつじゃない。何とでもなるだろ』

まだしばらくは撤退の援護は必要なさそうだし……

「長谷川先生、Bクラス吉下律子です。Fクラス姫路瑞希さんにて数  
学勝負を申し込みます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願ひします」

やつぱり瑞希ちゃんは先に倒したいのかな？

「じゃあ私はそっちの人申し込みます」

「えつと、影隠鏡花です。よろしくお願ひします……」

「「「試験召喚！」「」「」

魔方陣のようなところから小さな私が出てくる。  
黒いスーツに頭にはヘルメット型のモニターみたいな物？を被つて、  
両手にはまるで氷で出来た様な双剣を持っている。

「う、腕輪！？ちょっと嘘でしょ！？」

瑞希ちゃんと私の召喚獣はそれぞれ特殊能力の腕輪をしていた。

「じゃ、いきますね」

「いきます……」

瑞希ちゃんは光線を出す能力のようだった。私は能力で行動の速度  
を上げて敵を切りつける

Fクラス	姫路瑞希&amp;影隱鏡花	VS	B
クラス	岩下律子&amp;菊入真由美		
数学	412点	&amp;	530点
VS	189点	&amp;	151点

『い、岩下と菊入が戦死したぞ』

『姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！』

『もう一人は転入生らしい。そちらも気を付けろ！』

私達の戦いを見て相手も驚いているみたい

「み、皆さん、頑張ってください。」

「その調子……」

『『やつたるでえーつ。』』

皆も頑張っているみたい

「鏡花よ、少しよいかの?..」

「何? 秀吉君……」

「少し教室の様子を確認してきてこのじや」

確かに少し気になりけど……

「相手の代表が、大層卑怯なやつでな。何をしてくるかわからんのじや」

「……わかった。お願いしていい?..」

「無論。ワシから言い出したことじやしな」

秀吉君、行しちゃった……

少し前、教室にて

↓ side 水月へ

「おー雄一。俺は今すぐ暇なんだが……」

「どうせお前は理系は低いだろうが。それに、向こうは文系が多いらしいからな」

つまり、最終防衛ラインとしておかれている訳か

「まあ、いいや。廊下の様子でも見て暇潰しするわ」

そう言って廊下側の窓を開けると、見知らぬ顔が近づいてきた。

「えーと、どちら様で？」

「Bクラスの者がだが、代表は居るか？」

「何が目的で？」

「協定を結びたくな。我が代表が呼んできてくれと」

「少し待ってくれ。雄一！」

「どうした水月？」

「Bクラスが協定を結びたいそうだ」

「内容にもよるが……どんな内容なんだ？」

「詳しく述べ話し合いつつもりらしいが……特定の時間まで戦争が続く場合、翌日に持ち越しにしてよ。とのことらしい」

「ほひ。ならいいだろ？」

「姫路や鏡花のことを考えて、か？」

「まあな。こちらとしては願つてもない好条件だ」

「そうかもしぬないが出来すぎでないか？」

「まあいいや。一応この会話は録音させてもらった。代表に何かしらのものならこれを盾に抗議すればいいしな」

「ずいぶん用心深いな水月」

「うまい話の時にはとりあえず疑つよつこつこつむ」

「そうか。じゃあ、行ってくる」

「それなら近衛兵はいらないし、ちょっと前線の様子見てくるかな」

「雄一」と使者のやつと共に教室を出る。適当な場所で別れてすぐ教室へ

「なあにをやつてるのかなあ？」

教室にはBクラスと思われる生徒が数名、ペンや消しゴムなどを手

に硬直していた

『な、なぜここにー?』

『やつは前線を見に行つたんじゃないのかー?』

『落ち着け皆ー』

ん?何か聞き覚えが……

「紫ー?お前、何でー?」

「久しぶりだな」

そこには幼馴染で高校に入るときに離れた水明山 すいみょうざん 紫がいた。

「とりあえず全員、手に持つている物をもらしてもらおうか

「待て水月、少し取引しないか?」

「何だよ、」の状態でか?」

「頼む」

頭を下げる紫。その姿がやけに真剣で気になつた

「……話だけ聞かせてくれ」

「すまない、恩にきる」

「いいから話してくれ」

少なくとも中学の時はこんなことするようなやつじやなかつただろうが

「まず、この件を見逃して欲しい。条件はそっちが決めてくれてかまわない」

「何故だ?そこまでして実行する意味があるのか?」

「『』の面子の今後の為だ」

「？意味がわからんぞ」

「あまり良い話じやないんだが……俺達は脅されている」

「はあ！？お前もか！？」

「ああ、不覚としか言いようがない。それでこの戦争である程度協力しなくてはいけなくてな」

「戦争つてことはクラスのやつか？」

「代表だ」

「代表だと！？まあ、クラスによつては独裁的なクラスもあるのかも知れないが……」

「…………わかつた。ただし紫は少し残つてくれ。話がある」

「本当にすまない」

Bクラスのやつらはためらつても破壊活動を開始する。やはり気は進まないのだろう

「で、水月。話とは何だ？」

「どんな弱味を握られたんだ？お前ほどのやつが

「俺自身の弱味ではない、とだけしか言えんな」

「？自分のじやないのに従つてことは家族……な訳ないよな。あの『請負人』達が高校生ごとに遅れをとるとは思えん

紫の家は代々請負業をしていて、紫も次期社長だ。まあ、俺も似たようなものだが。

「さすがに教えてはくれないか？」

「…………彼女だ」

沈黙長つ！てか彼女出来たのかよ！

「それは詳しく聞いてみたいが……」

「そんなことはいい。さつさと条件を言え『支援者』」「まつたくせつかちな『請負人』だなあ。『うするよ雄一』？」

「！？」

ドアのほうに声をかける。しかし、紫も気付いて無かつたのか？

「何だ、ばれていたのか」

「まあな。で、どうする？」

「紫、といったか？」

「ああ。水明山紫だ」

「条件はできる範囲で『う』ついた作戦の情報をリークすることだ」

「それだけか？」

「あと、さつきの『請負人』とか『支援者』とかについて聞きたい」「いいだろう。『請負人』はうちの『光明社』の別名、『支援者』

は水月達の『影隠支援社』の別名だ」

「ちなみにやることは別名の読んで字の『』とく

「そうか。なら両者に依頼をしたい」

「ほう。どういうつもりだ？雄一」

「お前には……いや、お前たちには全力でこの戦争を『支援』しても  
らいたい。『全力で』『な』

「召喚獣だけでなく、物理的、頭脳的にもつてことか？」

「そうだ。んで、紫には

「……報酬は？」

「設備を入れ替えないこととそちらのクラスの状況を改善させる交  
渉、だ。不満か？」

「いや、いいだろう。しかし、報酬を聞いておいて何だが『請け負  
う』ことはできない。ただ『お願い』を聞くだけだ」

「『お願い』『どうしたことだ?』

「いろいろな色々あつてな」

「あくまで動くのは『水明山紫』ではないといいたいのか?『請負人』として動くならその名を使わないわけにはいかないからな」

紫は片手を上げて去つていった

「まったく。 そうだ雄一、俺達には?」  
「そうだなあ、何か一つ言つことを聞く。 これでどうだ?」  
「つよーかい。 んじゃ、わつやく……」  
「……うわ、こつや 酷い」  
「まさかこうくるとはのひ」  
「卑怯、だね」

明久と秀吉か。 様子を見に戻つてきたのか

「そのことはいい。 それより前線に戻つて欲しい」  
「どうこつことなのさ水月?」  
「なに。 僕達が本気を出すだけさ」

そう言いながら髪を後ろで束ねる。 仕事の時はこいつだないと

「雄一、鏡花を退かせていいか?」  
「いいだろ。 ただし依頼は忘れるなよ」  
「わかつてゐるわ」

よし。 じゃあ前線に行くか

水月が出ていったが、まだ状態がまったくわからぬのじゃ。

「雄一よ、いれはだじつことじや？」

「水月たちに全力を出すよつて依頼した」

「依頼？ そつとも言つてたよね？」

「ああ。水月たちは」

「なるほどのう。じやからあのよつな物を持つておつたんじやな」

「ただいま」

誰じゃ？ 瞳が水色で水月のよつじやが…… も、もしや

「もしかしてお主、鏡花か？」

「うん」

ヘアバンドで前髪をあげていていつも隠れていた田元が出ておつたのか。

それにしても綺麗な瞳じやのう

「これ、水月が」

いつもよつぱつき喋る鏡花が取り出したのはシャープや消しゴムの入つたビニール袋じやつた

「じやつたうるさなに早く用意出来るのね」

「またぐじや。ありがたいがのう」

「まあ敵じやなくてよかつたつてとこだな。われよつ、いつちまいいから前線に戻れ」

「了解じや」

「う、うん」

さて、この戦いはいつたいたいどうなるのじゃろつか

（side水月）

「さて、じゃあ後ろから攻めさせていただこうか」

俺の現在地 3F 校舎外（というか壁）

「やっぱBクラスの辺りは文系の先生がいるな。好都合だ」

ゆっくりとBクラス前を通過し、Bクラス前へ

「先生、Fクラス 影隱水月、」こちらのBクラスに現代文で勝負を挑みます

『なつ！？』

『どこから来やがった！』

『どこからつて…外から？』

『ふざけやがつて！試験召喚！』

「試験召喚」

Fクラス	影隱水月	VS	Bクラス	十数名
現代文	620点	VS	平均161点	

『ば、化物か！？』

『一斉に行くぞ！』

『腕輪、発動。大津波』

召喚獣の腕輪が光り、召喚獣にとっての大津波（人から見たら腰く

らここまで）が発生した

「300点分はちがうねえ。全員瀕死かよ」

まだまだ行けるがな

《連絡します》

放送？何だひつ

《協定による戦争中止時刻になりました。一年B、Fクラスはただちに戦争を中止してください》

お預けかよ。まあいいや

## 第十問（後書き）

鏡花の召喚獣の元ネタは『氷結鏡界のエデン』のショルティスの武器に華宮の頭のやつのイメージです  
『請負人』はもちろん戯言シリーズなどに出てる赤い人からきます

## 第十一問

「ただいまーっと」

教室には主要メンバーが勢揃いしていた。んー、何か忘れてるよう  
な……

「おひ、いいタイミングだな。ちょうど今みんなに説明し終わつた  
ところだ」

「『支援者』とかも含めて?」

「ああ。全てな」

「…………（トントン）」

「お、ムツツリーーーか。何か変わつたことはあつたか?」

ああー、そうか。さつきまで康太が居なかつたのか

「ん? こクラスの様子が怪しいだと?」

「…………（コクリ）」

「雄一、どうするの?」

「んー、やうだなー」

時間を確認する雄一。この時間ならまだ大丈夫かな?

「じクラスと協定でも結ぶか。Dクラス使って攻め込ませるが、と

か言つて脅してやれば俺達に攻め込む気もなくなるだろ」

「それに、僕らが勝つなんて思つてもいいだろ? しね」

「ちょっと待つて」

鏡花か。パソコンで情報を集めてくるようだ

「罷の可能性が高い」

「罷じやとー?」

「おそらくBクラスの人達がCクラスで待ち構えている」「そうか。水月、紫に連絡をとつてみてくれ。で鏡花、そう思つた

理由は?」

「Bクラス代表の根本はCクラス代表の小山さんと付き合つていて、根本の知的なところがいいと言つている」

「知的、ねえ」

「卑怯の間違いじやない?」

「雄一! 紫もそんな話を聞いたらしい」

「限りなく怪しいな」

「どうするのじや雄一? 放置しようのなら終戦直後に攻められてしまつぞい」

「どうすつかな……よし。今日はもう帰るか」

「ええつ! ? 雄一! 何もしなくて大丈夫なの?」

「明日の朝、ある作戦を決行する。それまでは放置するのも面白い」

「どうう」

「じゃ、俺も鏡花も普通にしていいんだな?」

「ああ。また明日頑張つてもらつ。それまでしつかり休め」

許しをもらつて俺は髪をほぐく。隣では鏡花も髪を下ろしてい

「もつたひないのう。鏡花も綺麗な水色の瞳なのじやから出しておればよいのに……」

「えつ……(ボンッ)」

ああつ、鏡花がフリーズした!

「秀吉、狙つて言つてないか?」

「い、いや。そんなつもりは……」

天然ですか？むしろ天然記念物ですか？

「でも秀吉、あれは僕でもどうかと思つよ」  
「つてか、これじゃあ帰れないじゃねーか！」

「ス、スマンのじゃ」

「じゃあさ水月、」

なるほど。お前も結構悪だな明久

「さて、じゃあ鏡花はフリーズさせちまつた秀吉にお願いするか  
「なー？ななななな」

！いかん。秀吉までフリーズしそうだ

ポフン

「あ、フリーズした」

「おい！明久のせいで増えたじゃねーか！」

「なー？やると決めたのは水月じゃないか！」

「そういえばそうでした

「…………はあ。じゃあこの二人は俺が見とくから皆帰つていいぜ」

「そつか？じゃあ先に帰るがあまり遅くまで残るなよ

「…………また明日」

「それじゃあお先に失礼しますね」

「ウチらも帰るわよ吉井」

「じゃ、後よろしくね水月」

「おひ。また明日なー。」

わへ、と

「秀吉ー。起きるー。朝だよー（謎）」

「…………はつーワシは何をしておつたのじや？」

これ言つたらまたフリーーズするかな？

「鏡花をおんぶして帰るーとしていた筈だが？」

「えつ、あの、その…………やらねばいかんのかの「ひへ」」

「ここまで完全にフリーズしちまつと運ぶのも大変だし。責任をとつてもらおうじやないか。秀吉君」

「無駄に言い方を変えるでない。しかし…………」

「あーもー、うつとおしい。んじや、お先にー。」

教室の外にダッシュ！

「あつ、こら待たぬか水月ー。」

その後秀吉が鏡花をおぶつて帰るのを影から見守り、俺も帰路についた

○クラス教室

（side紫）

「ちつ、全員帰りやがつたか。なぜこちらの計画がバレた？」  
「誰かが転校生の女子が情報を集めてるって言つてたわ」

小口をなんとかやり、意外に耳が早いな

「おこ紫、どうなんだ？」

「…………」

「おこ、何とか言つたらどうなんだ？」四季みつのあの『写真しゃしん

が流出りゅうしゆしても

いいのか？」

くせりー！

「…………あいつはパソコンとか、情報じょうほうに関する」とは得意うきだつた。今の立ち位置立ちまではわからない

すまん。鏡花、水月

「せうか。じゃあ四季みつでも使って拉致らぢするか」

何だと！？

「まで、待つてくれ。その役目なら俺がやる。詠々ひたよみにやらせる必要はない！」

「駄目だなあ紫。彼女の事になるとすぐ荒てる。その癖、直したほうがいいぞ」

俺のことなどビリでもいい！

「頼む！あいつを外してくれ！」

「これは代表の決定だ。それにあいつはまだあまりクラスに貢献こうげんしていないからな」

くそつー詠々の分まで俺が働いたのが仇になつた…

第十一問（後書き）

本日最後の更新かと  
…

## 過去問 I (前書き)

数日間パソコンの不調と勉強と見てなかつたら、いつの間にか1000コニークだそうな。PVもあと少しで10000のようすで、記念に過去話（水月と鏡花が愛子に会つ場面）をどうぞ！ ちなみに、愛子の転校時期が一月に設定されてるのでそのつまりで読んでください

当初の予定ではコレ、プロローグだったんですね…（汗

～12月半ばのとある日～

「いやー、編入試験とかめんどくさいなあ。」

と滋きながら歩いてくる俺

「転入するんだから、しょうがなことと思ひ……」

鏡花も若干嫌そうだ

「まあ、しょうがないか……とにかく、編入試験も『あの』方式だけ?」

「うん……」

俺達がこれから編入試験を受けに行く文円学園は試験召喚システム  
だったかの試験校で、上限の無い時間制限のテスト方式が使われて  
いる。

「あんな方式のテストなんてやったこと無いからなあ、何点ぐらい  
とれるものなんだろう?」  
「やったことある方が珍しい……」  
「そりや言ってる。おつ、あれだ……よ、な?」  
「大きい……」

鏡花も若干嫌そうだ

「あの、ちゅうとこいですか?」

ん？背後から声が…

振り返るとそこには、色の薄い少し縁っぽい髪をショートカットにした一言で言づならボーアイッシュな女子がいた。

「えっと、僕達に何か用ですか？」

こんな言葉をすぐに返せるのは周りに誰も居ないからだ。（何でも、俺達が緊張しないように学園側が気をつかつたようだ）

「ボク、編入試験をうけに来たんですけど職員室が分からなくて…もしかしたらと思って声をかけたんですけど」

「ああ、そうでしたか。でも残念ながら僕達もまったく同じ状態ですから……」

「あつ、そうなんですか？」

「どうせ年上に見られてくるようだ……」

「うん、僕達は1月から一年に転入予定なんです。」

「えつー!? 同学年だつたんですねー!？」

彼女も一年らしい。なら敬語まで必要ないか。

「なんだ、同学年だったのか。俺は影隱 水月、こつちは鏡花。よろしく」

いつの間にか俺の後ろに居た鏡花を横に促して言づ。

「影隱 鏡花です……よろしくお願ひします」

「えつと、ボクは工藤 愛子。よろしくね」

「おう。じゃあ、時間もあんまり無いしそろそろ行くか。」

「そうだね。えーと、案内板とか無いのかな?」

「…あれ…」

鏡花が指差した方向にはなにやら掲示板のような物が…

「あれっぽいね。行つてみよ水月、鏡花」

「その日の夕方~

「いやー、意外と怖いなあのテスト。」

「最後の方で焦つてくるよね」

「……(「クリ」)」

あの後、編入試験を受け、今現在、俺達三人は揃つて帰宅中である

「一緒にクラスになれるといいね。」

「そうだな。鏡花なんて特にそう思つてるだろ」

「うん…」

「あははっ。最初にボクが声かけたら水月の後ろに隠れちゃつたらいいだしね。」

鏡花は赤面して、俯いてしまった。

「まあ、転入先に友達がいるのは誰でもありがたいもんだ。」

ちゃつかり連絡先も交換したしな。

「うん。そうだね」

その後も雑談しながら歩く  
しばらく行くと公園があった

「ねえ、まだ時間あるんだつたら少しあしゃべつしていいかな  
い？」

「藤さんが提案してくれる

「いいねえ。じゃあ自販機でなんか買ってくるよ。藤さんは何が  
いい？」

「じゃあお煎葉に甘いのを買ってきて、アップルジュースとかお願  
いできる？」

「つよーかい。鏡花は紅茶だろ？」

「うん……」

「えじや、つよつよ歩いてくる。」

（Side愛子）

近くにあつたベンチに並んで腰を下ろした

「ねえ、鏡花つて好きな人つている？」

やつぱり女の子じつじだと気になるんだよね

「い、いないよ……藤さんは？」

「ボク？ボクもいないかな。」

「そう……なんだ」

『じゃあ俺達と遊びに行かない？』

『俺達が楽しい所に連れていくてあげるよ。』

不意にかけられた声に顔を上げるといかにも不良っぽいキャラキャララした奴達がいた

「いえ、ボク達もうそろそろ帰るので……」

『ううつた輩のあしらい方は知らないが、逃げるべきだう

『そんな冷たいこと言つなよ。楽しいぜ』

相手は五人、愛子と鏡花に一人ずつと数歩後ろに一人。やけに慣れた感じだ。

『ほら、早く行こうぜ』

そう言いながら一人が肩に手を置いた。全身にザワリと悪寒がはしる。

隣では鏡花が同じようにされて震えていた。自分も気を抜くと震えてしまいそうだが、必死に打開策を練つてみる

『ほら、とつととしゃがぐはあ』

苛立つてきたのか強引に腕を引っ張ろうとした不良が突如吹っ飛んだ。

側水月～

自販機を見つけるのに手間取ったため少し遅くなった…

「やれやれ、公園の周り約一周とは……ん?」

ベンチの所に一人を発見したが、様子がおかしい。  
つてかやばい雰囲気だな、何とかせねば……

「助走をつけてつと」

Let's ライダー キック!

『ほら、とつとしやがぐはあ』

きゅうしょにあたつた。こうかはばつぐんだ  
うーん、うまい具合にセリフが切れたねえ。  
後ろからの強襲は成功。で、問題は……

「お前だあああ！」

工藤さんの横のもう一人を蹴り飛ばす。

『ぐあああ』

おっ、あつちも殺つたな。（死んでないけど）

鏡花の手元を見ると小型スタンガン（作、水月）が握られていて、  
足元には一人の不良が転がっている。

「工藤さん大丈夫だつた？」

「う、うん」

口ではそう言つてはいるが、力なくベンチに座つてはいる。

「まあもう少し休んじた方が良いよ。」

『俺を無視すんじゃねえ！』

あつ、一人忘れてた。

「せいやー（棒読み）」

ふざけたかけ声と共に後ろ蹴りを入れる。

『ぐふう』

「もうこいつちよー（棒読み）」

引いた足でそのまま後ろ回し蹴りを放つ。

「今度こそ大丈夫かな？」

（s.i.d.e 愛子）

「工藤さん……大丈夫？」

いつの間にか近づいていた鏡花が聞く。

「大丈夫だよ、ちょっと怖かっただけど。」

「ちょっとじゃないだろ。」

不良をわきによせて縛り上げていた水月も言つてくる。

「いや、そんな」「お前泣いてるじゃん」「えつ？」

驚いて頬に手をやる。すると、涙が流れている。

(色々あつて混乱しかけたかな?..)

と、考えるが一番の理由はおそらく『安心』だな。

「side水月~

十数分後、工藤さんが泣き止んだところで駅に向かう。工藤さんは電車で帰るらしい。(ちなみに俺達はホテルで一泊だ)しばらく歩くと駅に着いたので、そろそろお別れだ。

「今日は色々あつたけど楽しかった。またね、工藤さん。」

「また今度……」

「その前にひとつといい?」

?なんだろう改まって、

「ボクは一人を名前で呼ぶんだから、一人にも名前で呼んでほしいな。」

数秒の沈黙の後、

「もうだね……愛子、一緒にクラスになれるといいね。」

「うん。そしたらもつとおしゃべりしようつー。」

「ははは。やうなることを祈つとくわ、愛子!」

「う、うん」

?何だか知らんが俯いてしまった……

俺が首を傾げてみると、不意に工藤……愛子が鏡花に近づいて小声で何やら話して

ている。

しばらくすると鏡花が俺の隣にやつて來た。

「それじゃあ今度こそ……またね

「またな。氣をつけて帰れよ。」

鏡花の挨拶に俺も続ぐ。

「水月、ありがとね。かつこよかつたよーじゃあまた。」

満面の笑みで言われて、一瞬見蕩れてしまつた。  
その間に愛子は駅構内へ消えていった。

「少し遡つて side 鏡花」

水月の言葉を聞いたと思ったら、ちょっととして愛子が近づいてきた。

「一人で居たときの質問の答え変わっちゃつた。」

小声でそつ言われた。

(質問?……もしかして、好きな人の事?)

「水月つて誰かと付き合つてる?」

予想が的中した。相手に關してもほほー日中一緒にいたから、予想  
はついた。

「誰とも付き合って無いはず……」

「水月が気にしてる子とかいる?」

「それもいなーいはず。」

それを聞いて胸に手をあてて「良かつた。」と呟く愛子。  
これ以上は必要無いだろうから、水月の隣に立ち別れを告げる。

## 過去問 I (後書き)

いかがだったでしょうか? 書き始めた当初の感じでうまく表現できていなこといろいろあるでしょうが、読んでくださった方々に感謝を。

『さやうにあたつた』のくだりはポケモンより。  
このときの俺はライダーキックを水月にさせてみたかったようだ

## 第十一問

翌日、俺は朝紫から一本の電話を受けていた

「で、頼みつて何だ?」

『実は

「おいおい、そこまで出来るかわからんぞ」

『嘘つくな。学園長と契約しているんだろ?』

「はあー、わかったよ…………いいんだな?」

『もちろんだ。アイツの命令なんかに従いたくない』

紫こじこじまで言わせるなんて……

「わかった。朝のうちに直々に頼みに行つてくる

『すまない』

『んじや、切るぞ』

『ああ。すまない、本当にすまない』

あんなに言われると嫌な予感がしてくる…………アイツがそう簡単に追い詰められるとは思えないが

「ま、学校行つてから聞いてみるか。鏡花ー、用事できたから先行

くなー」

「分かった……」

またあの化物と対面か……

がくえんちょつ

水月も出発して十数分がたつた。準備も出来たし、家を出よ

「あのー」

家を出でししばらく歩いていると、後ろから声をかけられた

「影隱鏡花さん…… ですよね？」

「そう…… だけど」

「あの私、紫くんの彼女の四季詠々と言います」

やつこえは水月が「紫のやつ、彼女いるひじこ」とか言つたよつた

「昨日、紫くんが昔からの友達に久々に会つたつて言つてて、会つてみたかったから」

昨日会つたのは水月なのに…… 私の事も話題に出たのかな？

「やつこ、なんだ」

「で、つこでに昔の事も聞こちやおうかなーとか

それからしばらく、昔の事を少し話していると少し人通りの少ない道にせしかかったあたりで

「ゴメンね、鏡花ちゃん」

「? 何が?」

「1)めん、本物アリめん」

目に涙まで浮かべて……

「どうしたの？大丈夫？」

「「めんなさい」、「めんなさい」」

「「う……」」

「これは……スタン、ガン？」

泣いて謝りながらスタンガンを押し付ける詠々さやんの姿が田代の

「だい、じょ……ぶ。気にしな……で」

おそらく彼女も根本に酔われているんだろう。でなければこんな顔  
は出来ないはずだ

「 もう、いや……「んな」と……」

遠くから歩いてくる根本とBクラスの姿が見えたが耐えきれず、ついに意識が落ちていく  
皆は無事なんだろうか、それだけが気になった

→ side水用

「昨日言っていた作戦を実行する」

雄一が堂々と宣言する

「雄一、考えてみたがまさか作戦つて秀吉を優子さんに変装させる  
気が？」

「ほう、よくわかったな。そういうえばお前は木下優子に会つたこと  
があるんだつたか」

そのとおり。違うところなんてバツと見髪の分け方ぐらうじゃね？

バンツ

急に教室の扉が勢い良く開く

「康太？どうしたんだそんなんに慌てて」

「……鏡花がBクラスに誘拐された」

「なつー？」

「なんじゃとー？」

秀吉、声でかい。腹式呼吸で叫ぶな

「ムツツリーー、確かか？」

「……間違いない」

「なんて卑怯なんだ」

「どこに居るかわかるか？」

「……一階の空き教室」

「一年のエリアか。確かに一年なら設備が全クラス同じで少し余裕があるし、旧校舎ならバレにくい」

「どうするの雄ー？」

「勿論助けるさ。だが、誰が行くか……」

「雄ー、ワシに行かせてもらえんか？」

「駄目だ。秀吉にはCクラスを騙してもらいつ必要がある」

「しかし雄ー！「待った秀吉」水月、止めるでない」

「雄ー、要是Cクラスさえ騙せれば問題無いんだろう？」

「そのとおりだ。まさか、お前がやるつもりか？」

「おうよ。変装も声真似もお手のものってな」

声真似に関しては小型変声機をつけるだけだが……

「鏡花の救出に関しても全力をもつて『支援』させてもいいわ」

「いいだろ。じゃあ秀吉は鏡花の救出に、水月はAクラスのやつに変装してBクラスへ。それぞれ準備しろ」

「了解じや。すまないのう水月」

「いえいえ。つと秀吉、これ持つていきな」

武器は無いときついだろ。包みを開けたら本物と見間違うほどの薙刀が出現した

「これは、薙刀かの？」

「ああ、刃は切れないよつになつてるがな。紫に習つてゐるそつじやないか」

「えつ、そつだつたの？」

「なんじや、知つておつたのか？」

「昨日聞いた。理由は召喚獣を劇に使いたいからその武器の扱い方を学びたい、だつたか？」

「その通りじや」

「秀吉らしい理由だね」

「そつだな」

「じゃが、このよつな事態で大切な人を救い出すことが出来るなら、躊躇う事なく力を振るおつぞ」

「じゃつ、お互い全力でいこつか」

秀吉が頷いて、教室から出ていった

「大切な人、ねえ。案外早くくつつきそつだな」

「帰つてきたらもうくつついてたりして」

「俺は戦争に支障が無いなら祝福するがな」

「雄一は羨ましくないのか？」

「羨ましいことは羨ましいが、友人に彼女が出来たなら祝つてやるんとな」

「そうだよね……よりによつてあんなに可愛い秀吉に先に彼女が出来たなんて」

「なんだ明久、複雑な思いだとでも言つのか？」

「否定はしないよ。僕も彼女ぐらい欲しいし」

「（お前ならその気になれば簡単だろ？）……」

姫路さんや島田さん（今朝来たら呼び方が親密になつてたし）から好意を受けてることだしな

「ま、あとは当人たちの頑張りしだいってことで……俺達も動きますか」

## 第十一問（後書き）

秀吉に薙刀を習わせてみました。劇で召喚獣を使うのも考えられるし、秀吉ならそれくらいやつても不自然っぽいじゃないと思つのですが、

## 第十二問

「どうでもいいことかもしかんが、明久」「なに？水月」

「島田さんとの間に何かあつたのか？」

呼び方変わつてるし何もないとは思えないが

「あー、いや、その……」

「アキが昨日、少し新校舎を覗いていこうつて言つて  
見に行つたらBクラスに追いかかけられた次第です……」  
「アホか明久。で、それがどう繋がるんだ？」  
「逃げる時に煙幕がわりに消火器を美波に使ってもらおうとしたら、  
クレープを奢ると呼び方を変えるようにつて」

島田さん、明久に好意を持つてるのは分かつたがそんなやり方でいいのか？

「そ、そんなことより水月。アンタ本当に大丈夫なの？」  
「何が？」

「Cクラスの事よ。根本と組んでいるみたいだし、もし失敗したら  
……」

「最終的には間違いなく俺達の負けだろうな。頼むぞ水月」  
「大丈夫だつて。んー、身長からいつてギリギリ久保になれるかな  
？」

学年次席らしいし、ある程度言葉遣いも聞いたことがある

「んじゃ、ひょっとトイレで変装していく」

「なんだ、ここじゃ無理なのか？」

「大きめの鏡もほしいし、技術は門外不出ってね」

「そうか。終わったら一度戻つてこいよ。当然だが「周りに気をつけて、だろ?」そうだ」

鞄も持つたし、ちょっとくら変身タイムつてね

数分後

「水月、大丈夫かなあ?」

「どうしたのよアキ、いきなりそんなこと」

「だつてさあ見たことあるわけじゃないし、ばれないかな?」

『やあ吉井君』

「あつ、久保君。どうしたの?」

「なに、少し用事があつてね。ついでに吉井君の顔を見ていいこうと思つただけだよ」

「そ、なんだ(悪寒が...)」

「ちょっと久保、アンタどういつつもり!?」

「どうもこつも、だからかつてるだけだぜ」

「からかつてるだけ『だぜ』?」

「あつ.....」

しまつた.....痛恨のミスだ

「あ、あんた水月ね!驚かさないでよ!」

「すまない島田さん。しかし吉井君と話したかつたんだ」

「や、やつぱりアンタはウチの敵よ!」

「水月、今は久保君のマネしなくていいから。なんか身の危険を感じるし.....」

「へいへい。んじゃ、作戦を開始するかな」「余興は終わったのか？なら出発するぞ」

雄一が会話の止まるのを待つて話しかけてきた

「やつさんの見てると不安になるんだけど…」

「ほら行くぞ明久、水月。卑くしないと戦争が再開しちまう」

Cクラス前廊下

「さて、ここからは済まないが一人で頼むぞ、水月」「何をいつてるんだい坂本君。僕は水月ではなく、久保利光だよ」

もう成りきつてゐるよ水月の奴。確かにわからないぐらい変装は上手

レーベル

「 そ う だ つ た な。 じ ゃ あ 久 保、 よ ろ し く 頼 む 」  
「 気 に し な い で い よ。 で は、 行 つ て く る 」

久保君（水月）がCクラスに入つていつた

『少し静かにしてくれないかい?』

『あんたは確か学年次席の久保よね？何の用？』

この声は多分代表の小山さん（だつけ？）だね。

『僕達のクラスも戦争を考えていってね。いわゆる下見というやつさ』

『学年次席が下見ねえ。それになんでトップのクラスが戦争なんて……』

『簡潔に言つならFクラスの最終的な目標がAクラスらしくてね。未経験だと苦戦までいかなくとも手傷ぐらい負わされかねないからね』

水月、Fクラスを下げすぎじゃない？

『とはいいうものの、練習になりそうなBクラスは今戦争中だし、仕方がないからCクラスならどうかなと思つたんだが……はあ』

『何よ！ 私達が弱いって言うのー？』

『そう言つて事は自覚はあつたのかな？ 確かに今Fクラスと戦争しているのがCクラスだつたらもう攻め落とされてただろうけれど』  
『なつ！ あんなカスどもに私達が負けるわけ『無い』と言い切れるのかい？』 そ、そうよ…』

カスどもつていぐらなんでも酷くない？

『全く、何もわかつてないようだね。じゃあ、失礼させてもひつよ。宣戦布告もしないし、のんきに過ごすといい』

『ま、待ちなさいよ！ 何もわかつていないうつてビツつことよー？』

あー、小山さん、凄い怒つてるなあ

『その程度、自分で考えてみたらどうだい？ 足りない脳味噌でもフルに使えば何かわかるかもしないからね』

あ、久保君（水月）が出てきた

「こんなもんでいいか？雄一」

『何よあいつ、少し頭が良いからってーもつDクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラスを意地でも倒してやるわよー。』

「成果は上々のようだな。よくやった」

小山さん、可哀想に……

「水月、小山さんに言つたわかつてないって？」

「なんだ明久、お前もわかつてなかつたのか」

「吉井君、つまりは『DクラスはなぜFクラスに負けたのか』ってことさ」

「（なんで久保君口調なんだろ？）えーと、つまり油断してるからってこと？」

「そのとおりだよ吉井君、僕の見込んだとおりだ。『負けるわけ無い』その考え方が敗因ということさ」

「水月、それはいいけど久保君の真似をやめてくれるかな？僕の腕がもげる前に……」

「そうか、すまなかつたね吉井君。じゃあ僕は少しトイレに行つてくれるよ」

「（やつと開放された……）」

「（水月のやつ……あきらかにウチをからかつてたわね。今に見てなさい……）」

「（美波のほうから殺氣が……少し離れておいつ）秀吉はうまく助け出せたのかな？」

## 第十二問（後書き）

実は十三問と十四問は順番じゃなくともいいようにがんばってみたんですけど、いかがでしょうか？

久保君の口調あつてるかな…

## 第十四問

（side秀吉）

「どうしたものかの、……」

勢いで大役をかつてでたはいいものの、ござになると問題もある

「いかに早く鏡花を取り戻すかが問題じゃな」

でないと人質にされかねんしの、つと、あそここの教室じゃな

『さて、せつかくだし少し遊ばせてもらおうかな

『んー！んー！』

鏡花であろう声が聞こえた。

『「つるせえんだよー」』

バシッといつ音と何かの倒れる音。そして

「止めんか！」

自分でなかが切れた。おそらく、堪忍袋の緒か何かであろう  
驚く相手を横目に一蹴りで鏡花の下へ  
ものすごい勢いに相手が数歩下がる

「大丈夫かの鏡花？ もう心配せんでよい」

猿ぐつわを取りながら優しく声をかける

改めて見ると制服が少しほだけていて、それにいつも見えていた  
箒の両目がはつきりとあらわになっていた。どうやら鍔か何かで切  
られたよつじや

「お主らに問う。なぜこのようなことを？」

「ああ？ 勝つために決まってんだ。それとも、ソイツにやつたこ  
とのほう聞いてんのか？」

「両方じゃ。あと、なぜ鏡花じやつたのかものう？」

「ソイツにやつたことは退屈しのぎだよ、珍妙な目をしてたしな。  
なぜソイツかって聞かれると、ソイツが俺らの脅威だそだからな  
「その程度の事でここまでしたのか？」

「ああ。アイツの立てる計画は結構良質だからな」

「そうか、別に脅された訳では無いのじやな。なら 手加減  
は出来んぞい」

そう言って水月に借りた薙刀を出し、右側に構える。流石に驚き、  
皆さうに数歩下がる

「安心するのじや。刃は無いからの……叩くよつなものじや

「舐めんじやねえ！」

右からの突撃。後ろに飛ばす訳にはいかないので柄で殴る

「お主らには少し炎を据えてやらねばのつ」

真正面から鉄パイプを持って降り下ろしていく

「他人の大切な人を傷付けるどうなるか、身を持って学んで貰お  
うぞ」

流れるように攻撃を横に流し、柄で鋭く突く  
それからも幾人も迫つては倒され、複数で掛かると流されて相討ち  
にされ、遂に全員が地に伏した

「鏡花よ、怪我は無いかの？」

「大丈夫……」

でも微かに震えておるじゃないか

「済まぬ。もう少し早く助け出せれば……」

「そんな……秀吉君のせいじゃないよ」

「このよつな事があつて初めて気が付いたのじゃ」

「何に？」

「鏡花の事が何より大事じやと。想い始めたら止まらないのじゃ

「えつ？」

「鏡花よ、ワシとつ、付き合つてくれぬか？」

「……うん……」

目に涙をためて、でも満面の笑顔で答えてくれた。  
そして、どちらからともなく抱き合つた

「さて、みんなも心配しておるじやうつし、帰るかの」「うん」

そつ言つて手をつないで帰つていった

（side誘拐犯）

「なあ、俺達つてただの引き立て役じやね？」

## 第十四問（後書き）

実は十三問と十四問は順番じゃなくともいいようにがんばってみた  
んですが、いかがでしょうか？

短い、かな？

ウチの秀吉はあくまで男子です

## 第十五問

「さて、一つ聞いていいか秀吉?」

「なんじゃ?」

「進展はあつたようだが、どうなつた?」

「救出時の事よりそつちなのかの!?」

何を言つてこるのやら。手をつないで帰つてきた時点で決定済みだ

「秀吉ならやると思つてたからな。で、どうなんだ?」

「どうでもよいじゃらうが」

「やつかー、告白したのかー」

「なぜ分かるのじやー!?」

「えつー? マジで?」

適当に言つて反応を見よつと思つたのに……

「デタラメだつたのかの!?」

「やつかー、明久の予想大当たりだな。おめでとつ、秀吉、鏡花」

「おめでとう。秀吉に先を越されるなんて……」

「おめでとう!」ざこます、鏡花ちゃん（私も頑張らなこと……）

「おめでとう鏡花（ウチも頑張らなきや……）」

「……おめでとつ」

「おめでとう。それじゃあ今日は一人セツトで動いて貰おつ」

「もうそろそろ戦争の時間じやからの。しかし良いのかのう雄!?

「構わんぞ。作戦の根幹は姫路とムツツリーーだ。あとはその他大勢と言つていい」

「で、具体的にはどう動けばいい?」

「姫路の部隊は敵を教室に閉じ込める事、水月は様子を見て援護に

回れ。時が来たら攻める。鏡花と秀吉は鏡花を中心にBクラスの連中の弱味を潰してもらいたい

「わかった……」

「りょーかいしました。それでは仕事モードとこきますか

髪を束ねる。今日は気合を入れていくぜ

「そりいえば、髪どうしよう…………」

Bクラスの奴に切られたらしいその髪は見事に前髪直線状態だった

「上げとけばわからないんじゃないか？今日はそこまで遅くはなんだろうし、それから美容院でもどこでも行けばいいや」

「雄一が言つてるのでよいかの鏡花？」

「うん……大丈夫」

「ならば精一杯頑張るわ」

秀吉と鏡花もやる気充分みたいだし、俺も昨日の位置に戻るか

#### 開戦時刻

「ただいまー」

「なんだ水月、元の位置に戻れ。もう開戦だぞ」

「それが

「

「認められない？」

「どうやらBクラスが『水月は参戦していなかつた』とか言つてゐらしい。昨日の教師も今日は出張らしく確認がとれないみたいだ

「そうか……まあいい。なら今からすぐに前線に向かえ

「わかった」

Fクラスを出て新校舎へ

「ドアと壁をうまく使えー袋叩きにするつもりでいけー！」

ついて早々指示を出さねばならんとは……どうやら姫路さんの様子が可笑しいようだ

「影隠水月、そこのBクラスに古典勝負を挑む！試獣召喚ー！」

押し戻されかけている方の入り口で戦闘にはいり、点数が表示される間もなく切り捨てる

「明久ー！」

明久が呼ばれて反応したといひで視線を姫路さんの方へ。どうやら通じたらしく、頷いて姫路さんに駆け寄る

「こちらはしばらく引き受ける。点数の減つた奴は人数を気にしながら交代で補給に行けー！」

召喚獣の鎧鎗の分銅をぶんまわし、牽制する。召喚獣だと武器の性質じゃなく点数で強さが決まるから分銅でも鎧でも当たれば充分ダメージになる

「水月、ちょっと雄一のところに行つてくれる」

明久か

「どうした？」

「詳しく述べられない。察してくれるとうれしい」

「わかつた。じゃあついでに鏡花の状況も聞いてきてくれ」

頷いて去つていいく明久。姫路さんを下げるのを忘れない所が明久らしい

「あとは計画変更が無い」とを祈るか

鏡花側記

根本のパソコンにハッキングしていると、吉井君が戻ってきた

?

何やら坂本君と話しているみたいだけど、少し距離もあるし聞き取れない

「どうしたのじゃ明久？」

秀吉君が吉井君に聞きに行つてくれた

「あんまり大きな声では言えないけど、姫路さんの様子がおかしくて作戦から外してもらつたんだ」

「……………」  
「そうじやつたか。ふむ、また根本が何か仕掛けてきたのかの？」

何か言いづらそうな顔をしてしまつた……

「パソコンの方にはBクラスの人達の情報が入つていただけだつた

けど……

「えっ、もう終わったの？」

「うん。全部消去してつこでに消去したファイル名でウイルスを置いておいた

もう一度見ようとしたらパソコン自体がフォーマットされる筈だ

「凄いのう鏡花は

そう言つて頭を撫でる秀吉君

「そつ……かな？」

「（鏡花、すごく赤くなつてゐるのに秀吉は気付かないのかな？）

プシュー

「ん？ どうしたの、じや？」

「秀吉、君は天然だつたんだね……」

「あ、いや、そのじやな……」

「とつあえず僕は前線に戻るけど、ちゃんと鏡花を起つておいてね

## 第十六問

明久が教室から戻ってきた

「水月、雄二から『水月は入り口で現状維持しろ』だつて。あと、保険としていざとなつたら紫に『お前がマクダフ（だつけ？）だつて』

「ほう。つてか『マクベス』かよ、雄二つてそんなの読むのか？

「紫がマクダフねえ……あながち間違つちゃいないかも知れんが」「?よく分からぬけど伝えたよ」

明久は分からなくて当然だな。つてか分かつたら怖い

「おー。明久はどうするんだ?」

「……ちょっとテロもどきを…」

「何があつたんだ！？」

「あつ、もうそろそろ行かなきや」

行つてしまつた……向かうのは…Dクラス？

「まあいいか。悩んでも仕方ない」

「その通りだな」

「つおつ！？何だ、雄二か」

本隊まで出陣とは……

「そこまでピンチじゃあないが、敵を油断させる為にも、な

「そつかい。で、どうするんだ？」

「時間を稼いで明久に横から攻めをせん。次にムツツリーーーが外から来る。それで駄目なら紫に頼る」

「そつか。さては明久、壁を壊すつもりだな。だからテロもどきだ、と」

「どううな

言いつつドアのすぐ前、というより少し入ったところまで進む

「お前、いい加減諦めろよな。昨日から教室の出入口に人が集まりやがつて。暑苦しいことこの上ないっての」

「どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

「はア？ギブアップするのはそつちだろ？」

「どうかな？俺のことも止められないのに、そんなこと言えるのか？」

「なに、そつちの代表が来たなら止める必要をえないだろ？？」

「……態勢を立て直す！一旦下がるぞ！」

もつそろそろだ。うまくやれよ、明久

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

その油断が命取りだ、根本

『だああーーーしゃあーーー』

ド「オッ」という豪快な音とともに壁が崩れる

「ンなつ！？」

「くたばれ、根本恭一ーーー！」

「遠藤先生！Fクラス島田が」

「Bクラス山本が受けます！試験召喚！」

「くつ！近衛部隊か！」

怒濤の攻めに紙一重で対応するBクラス

「詰めが甘いんだよ！」

根本が勝ち誇っているがまだまだこれからだ  
ダンッ！という着地音が2つ

「……Fクラス、土屋康太」

「くつ」

「……Bクラス根本恭一に、Bクラス四季が受けます！」

「くそつ」

明久が悔しがっている。まあ、あの伝言が意味分からなかつたらし  
いからな

「は、ははっ！驚かせやがつて！残念だつたな！お前らの奇襲は失  
敗」「おい」「あ？」

根本の話を無理矢理切つて紫の方を向く

「ある奴からの伝言だ』お前がマクダフだ』  
「なつ！？」

根本が驚いて紫を振り向く

「そつか……あいつは俺達の秘密を知つてゐるのか？」

「そんなはずはない。ただの偶然だ」

「おい、紫！お前ふざけるなよー！」の『眞をぱりまつていいのか？』

根本が簡素な茶封筒を取り出す。愚かな

「水月……」

「おつむー……」

俺はその場で指先を動かす

「なにい！？」

封筒は根本の手を離れ、紫の下へ

「『指鋼糸』って言つてな。読んで字の『』とく『鋼糸の指』って訳よ

「なつ……紫……」こつらに負けると設備が悪く「少しいいか」は？

「さつきから『紫』『紫』って、誰と話しているつもりだ？」

「はあ？お前に決まつてゐだらうが」

まあ、普通そうだよな

「今、ここに『水明山紫』といつ人物は存在しない。先生、Bクラス代表の根本に勝負を申し込みます。試験召喚……」

「紫ー何のつもりだ！俺がマクベスだとでも言つつもりか」

充分暴君やつてたと思うが……

先生も流れに呑まれて承認しているようだ

その声を聞きつつ、紫が手で田元を覆つ

「何度も言わせるな。俺は『紫』じゃない。俺は 」

白いステッジに棒術に使つよつた棒を持つた召喚獣が現れる。そして『名前』と点数が表示される

「俺は『影隠』かげかくれ 淡雪』あわゆき だ」

手をどけた淡雪の目は澄んだ水色になつてゐる。手を見るとカラーコンタクトを持っている

Bクラス	影隠淡雪	VS	Bクラス	根本
恭一				
保健体育	324点	VS	203点	

淡雪の召喚獣が根本の召喚獣の脳天に棒を降り下ろす。

これにより、文月学園始まつて以来の『謀反』による終戦が訪れた

## 第十六問（後書き）

爆弾発言ー的な設定を出してみました。実は紫を登場させたところ  
で描写がまったく無かつたのもそのためだつたり…（書いたら失敗  
しそうだったので）

水月の『指鐗糸』は戯言の『曲弦糸』をベースに汎用性を高めてみ  
ました

## 第十七問

「明久、隨分と思い切つた行動に出たの?」「うう……。痛いよう、痛いよう……」

「大丈夫?」

秀吉と鏡花が明久に声をかける

「なんとも……お主らしい作戦じゃつたな」「で、でしょ? もつと褒めてもいいと思うよ?」「とてもまつすぐで吉井君らしいと思つよ」「じゃな。後のこと何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」  
「……一人揃つて遠まわしに馬鹿つて言つてない?」

どこか似た者同士みたいだからな。考えることも似ているんだろう

「まつたぐ、明久らしい馬鹿な作戦だつたな」「水月! 直接的に言えつていう意味じゃない!」「何か相談してくれれば『支援』ぐらいしたのに……」「自分から『手伝おうか?』ぐらい聞いてくれてもいいじゃないか!」

「その直前に『そこ』にいる」という意味の伝言を聞いていたし、『依頼』は来るまで待つのがうちの流儀みたいなものだからな

まあ明久は放つておいて、問題は雄一のほうだ

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といふか。な、負け組代表?」

「……」

「残念ながらこのマクベスは負け＝死じやないからな。むしろむかうに苦痛だらうな

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

クラスを問わずざわめきが起こる

「落ち着け、皆。前にも言つたが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「つむ。確かに」

「ここはあくまで通過点だ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるつかと思つ」

Fクラスの連中だけでなくBクラスの連中まで鎮まつた。ほんの少し話しただけでここまで鎮めるとは

……

「……条件はなんだ」

「まず、お前にはクラスにおける権限を全て放棄してもらう

「元々、代表つて言つても権限なんてほとんど無い筈なんだがな……」

……

「つまり、代表とは名ばかりになる。ここつことか？」

「そうだ。その代わりは紫……と、今は淡雪だつたか？を『代表代理』とでもして任せよう」

「皆が良いなら喜んで拼命するが……」

『あいつなら安心して任せられる』

『落ち着いて、根本より代表っぽいし  
『ぜひやつてくれ!』

人望あるなあ。根本とは天と地ほどの差だ

「じゃあ決まりだ。それでは淡雪、もつひとつ条件だ」

もう代表代理として扱つてやがる

「Aクラスとの交渉を有利にする作戦か?」

「そうだ。戦争の意思と準備があると言つてきてもらいたい。使者はそうだな……一応代表の根本に行つてもらおうか」

間が空いたが、絶対に前から決めてたな

「それだけでいいのか?」

「甘いわ!俺はそれだけじゃ不満だ!」

「まあ落ち着け水月。地獄はこれからだ」

地獄?……ならいいだろう

「な、なにを……」

「これを見て行つてもらう

バーナン

文月学園の制服(女子)

「雄」待つた。もつと悲惨なやつを用意してやる。少し待つてくれ

れ

数分後

「根本くーん、 ふれぜんとふおーゆー 」

取り出したのはハーヒの制服

「待て！ それはいーくら向でも……」

「そーかあ、 お氣に召さなかつたかあ……じゃあ、 好きな選べ

ハンガーラックで登場した数々の衣装（A11コスフレ）

「ねえ水月、 こんなのがよく集めたね…… あんな短時間で

「まあ色々あつてな

「ラインナップも何があれだし……」

制服中心で持つてきただけだが？ 断じて俺の趣味では無い！

「盤台中学の制服なんてどうだ？」

「この学園の制服にさせて下さい！」

恥も外聞も気にしない域に入つたらしい

「やだ

真っ白に燃え尽きちやつたよ、 根本のやつ

「んじや、 Bクラスの皆様、 どうか宜しく

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて！ 必ずやりせるから…』

変わり身早つ！

Bクラスの連中が着付けに入った。結局 ルヒの制服になつたようだ。……ん？

雄一が明久に根本の制服を渡した？

「なんだ？」

『……あつたあつた』

取り出したのは封筒のようだ。あれはまさか姫路さんの物か？

「ま、覗くような野暮な真似はしないでおいつ

教室に入る明久を黙つて見送った。さて、変化は訪れるかな？

## 第十七問（後書き）

『常盤台中学』は禁書目録や超電磁砲より。  
ハルヒのほうも学校名にしようかと思ったのですが、わかりづらい  
と思い、この形にしました

## 第十八問（前書き）

キャラの設定を投稿しようつと思つのですが、初期の設定（現在と違  
う）しかなくて……  
そのうちちゃんとして更新しようつと思ひます

## 第十八問

終戦後、Bクラスの一角にて  
～s.i.d.e鏡花～

「ふう」

少し意識が飛んでたらしく、急いで来たが一歩遅かったようだ

「…………」

（気まずい）俯いて近寄つて来た詠々ちゃん

「えつと、その…………」「めんなさい！謝つて許してもいいやのよ」  
事じやないけど、本当にめんなさい」

「いいよ。もう気にしないで」

望んでやつた訳ではない事はわかつていいつもりだ

「えつ？」

「さすがにちよつとも恥まない自信は無かつたが……」

「けど？」

「おかげで秀吉君に告白して貰えたから、その点では感謝したいぐ  
らいだから。それでプラスマイナスの事にじよつと思つの」

「…………ありが、と」

「もしよかつたらこれからも仲良くじよつへ。」

「いいの？こんな私なのに……」

「そんなに自分を落としてしまわないで。これからは対等な友達で  
いたいもの。それとも、私と友達は嫌？」

「そんなこと無い！でも……」

「……じゃあ今度、クレープでも奢つてもうつかな。そしたら少しは樂になると想つ」

「一、ひん。じゃあ改めて、これから宜しくお願ひします鏡花ちゃん」

「（まだ固い氣もするけど）ようしきね詠々ちゃん」

「……鏡花は髪を上げておると、本当にしつかつ蝶の「ひ

秀吉君が近寄つて來たよつだ

「自分ではあんまりわからないけど」

「やうじゅつたのか。どれ……」

「あつ、へアバンド……」

「えつと……返してもうられないかな……」

「（ひむ。すまんのう、少し反応が見たくての」

「（ひわー、鏡花ちゃんと彼氏君す「じく熱々だ）えーと、やうじゅつを少し話に出た彼氏君でいいのかな？」

「ひ、ひむ。そちらは？」

「紫ぐんの彼女の四季詠々です。あと……今回のゆーぐっ」

「（詠々ちゃん、今はその話を出れないで。私から言いたいから）

「（でも……）」

「（お願い。私のワガママだけど聞いてくれるといわれっこ）

「（……わかつた。お願ひね）」

「ちよつといいかそこの二人」

坂本君が水月や吉井君と共にひらひらに來た

「色々聞きたいこともあるし、紫が『なら詠々も』とか言ってたんでな。こ、こじやあなんだし、屋上でも行ひにひむ」

「わかつた……行こ、詠々ちゃん」

「わかつた……行こ、詠々ちゃん」

「うん」

屋上

「side水田」

「おっし、全員揃つたな。じゃあ話してもらおうか」

「いいぜ。ただし、誰にも言つなよ」

「わかつてゐるさ」

他の皆もそれに頷く

「影隠の家と水明山の家は繋がりが深いんだが、あるとき水明山の跡取りが出来ずに困つていてな」

「そこで影隠の三つ子の一人を情報操作で『実子』として養子にした」

「それが俺だ」

「両親は隠そうとしたが俺達はちょっとした事で知つてしまつた。」

「まだにこの事は両親にしらせてない」

「気付いてからもただの幼馴染みとして接してきたからな」

「まあ、そんなどろだ。何か質問は?」

けつこう異質な話だつたせいか皆黙つてしまつた

「一ついいか?」  
「なんだ雄一?」  
「結局誰が上で誰が下なんだ?」  
「ああ、それもあつたな。答えは簡単だ。全員同時、だ  
「は?」

「俺達はどうも母親の胎内で寄り添つてくつつてて、自然には無理だと判断されて帝王切開でひとまとめに出てきた。故に全員

同時つてことだ

「帝王切開ねえ……」

「だから雄一が紫を『マクダフ』としたとき驚いたぜ」

「まさしくマクベスを倒す役に最適な人材だったと言つことか

「どうこいつ」と?」

明久は知らないんだつたな

「ショイクスピアの『マクベス』ぐらいは聞いたことあるよな?」

「名前ぐらいなら」

「オーケー。その中でマクベスという人物は魔女に『女の股から生まれたものには殺されることはない』みたいな予言をうけるんだ」「しかし、マクダフという男は『母の腹を破つて産まれた』つまり『股』ではなく『腹』から産まれ出たのでマクベスを倒せた、といふ話だ」

俺と紫で明久にあらすじを教える

「なるほど。だからあのとき、『あながち間違つてない』みたいなこと言つてたのか」

「そういうことだ」

「なるほど、話はわかつた。じゃあ次は△クラスとのことだな」

「では俺達は席を外そう」

四季さんを呼んで屋上を去るのとする

「いや、やつする必要はない。ここに居てもうつてかまわん

「……なら、まだここに居させてもらおう」

「さて、今更ではあるが水月」

「ん? 何だ雄一」

「Aクラスの友人ってのは誰だ?」

「ああ、そういえば言つてなかつたな。工藤愛子だが?」

「記憶にないな。ムツツリーーならわかるか?」

「……転入生」

「転入生? いつ頃転入したんだ?」

「去年の終わり、というか実質1月からの筈だぜ。本当なら俺達もその時期だったんだがな」

「家の事情で予定変更、だつたか?」

「まあ、ぶつちやけ依頼の関係でな」

「そうか。ひとまずその話は置いておいて、やいつは『交渉』に閑わりそうか?」

「どうだらうな。クラス代表の霧島さんとも一緒に居たけど……ん?」

何か霧島さんの名を出したとたん、雄一が少し硬くなつた

「どうした雄一、霧島さんと知り合つたのか?」

「ま、まあ少しな」

明らかに嘘っぽいんですけど……

「なら直接霧島さんと交渉すれば……」

「それはない」

即答かよー

「ワガママ言つたよ雄一。つとやつと言えば雄一、俺達の報酬まだもらつてなかつたな」

「言つることを一つ聞くところやつか。言つておぐが俺に出来ることだけだぞ」

「わかつてゐるよ。それは……『俺達一人のAクラス戦不参加』だ」「そうきたか……一騎討ちに持ち込めれば問題は無いが……」

何やらブツブツと一人で考えにひたつてゐるようだ

「いいだろう。ただし、交渉には参加してもらひや」

「それぐらいなら勿論いいぞ。だが、愛子が交渉に参加しないのならあまり意味無いかもな」

「他の奴らとも少しは面識があるだろ?。その程度でいいさ」

「わかつた。それなら協力しよう」

「ちょっとといいかな水月?」

「何だ明久」

「何でAクラス戦に出たくないの?やつぱりその友達の為?」

「ああ、愛子と編入試験の時に会つて、仲良くなつて、それだけで転入するとき気が楽になつたんだ。そんな恩人とも言える人を倒すのに参加は出来ない」

「……そつか」

「まあ、皆の力だけで勝つた時は仕方無いけどな」

「勝つや。んじや、今日はこれで解散にするか。交渉は補給の具合を見て行う」

雄二の言葉で各自荷物を持ち、歩き出す

《吉井明久！至急職員室に来い！》

「げつ、鉄人……」

「頑張れよ明久」

「雄二！他人事だと思つて！」

「報酬出すなら、早く終わるよつこぐらーなら『支援』できるが？」

「……報酬つて？」

「んー、明久じゃお金も無むかつだし、かといって雄一の時みたい  
な条件は微妙だしなあ」

「じゃあ僕の自慢のゲームを『いらない』じ、じゃあ工口本を『帰  
れ、いや説教受けて来い』酷い！」

「明久、発言には注意したほうがいい。島田から異様な気配を感じ  
るぞ」

「職員室行かなきゃ……」

明久猛ダッシュ。島田さんも追いかけようとしてやめた

「（……ずいぶん個性的なクラスだな水月）」  
「（だろう？おかげで退屈だけはしなさそうだ）」  
「（でも問題起こすと大変だよ……）」  
「（気にしなくて大丈夫そうだがな。罰されても動じないやつらだ  
し）」

## 第十八問（後書き）

Bクラス戦しゅうじょーつー次の更新はいつになるやうに……

マクベスのくだり、実は自信なかつたり……なにぶん前に一度読んだ程度でして……違つっていたらご指摘ください

## 第十九問

「その問題は『大化の改新』」

「はい？」

遅刻して教室に入るなりこのセリフだ。俺の反応はそこまでもおかしくもないだろう

補給試験も終わつたBクラス戦終了一日後。今日にでもAクラスに向かうだらうとは思つていたが

「話が読めん。明久、なんなんだこれは？」

「あ、水月遅かつたね。雄一が霧島さんの弱点？を説明していたんだ」

その他にも、純粹な点数勝負だとかも教えてくれた

「で、大化の改新か？ある程度掘り下げたところで学年首席が間違えるようには思えんが」

「いや、掘り下げた問題じやない。もつと単純な問いだ

「単純」というと何年に起きた、とかかのう？」

「おつ。bingoだ秀吉。お前の言つ通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

雄一がミスしなければ、の話だがな

「雄一、何でそんな情報を持つている？本人から聞いたのか？」

「少し違うな。アイツとは幼馴染みだからだ」

「総員、狙ええつ！」

「なつ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

それはいわゆる嫉妬の成せる技だらつ

「黙れ、男の敵！Aクラスの前にキサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

「多分、綺麗な女子と幼馴染みだといつ立場がまずいんだ」

「そ、それなら秀吉はどうなる？しつかり鏡花とくつついてゐるじやないか」

髪を切られた鏡花はあのあと短く切り揃えて、目を隠そうとしたりもしない。おかげで雰囲気が明るくなつた気がする

『なにいいつ！？』

俺達の中でしか言つてなかつたからそつなるよな

『標的を変更。目標、木下秀吉』

うおつ！完全に感情が排除されてゐる。凄まじく平淡で機械的な声だ

「なんじや？かかつてぐるならしばし寝てもらひやー

そう言いながら薙刀を構える秀吉

「秀吉君、やめよつよ……」

「じゃが、あちらが『秀吉君……』分かつたのじや。鏡花がそつ言うのならそつしようかの」

『駄目だ！入り込める隙が無い』

『仕方がない……標的を変更。目標、坂本雄一』

「くつ……なら水月はどうだ？Aクラスの工藤と仲が良いらしきぞ

『仲が良いぐらいなひ……第一標的、影隱水月』

『坂本雄一に制裁をくわえた後、裁判を行つ』

「なんでも、水月と工藤は弁当を互いに作つてくれる関係らしこぞ』

ちい、雄一め余計な」とを……

『影隱水月を第一標的に変更。排除します』

「つてか雄一はなぜその事を……」

「翔子が言つていたんだ。『羨ましい』とな

「くつ……」

「まあまあ。落ち着くのじや皆の衆」

「む。秀吉は雄一たちが憎……」苦無いよね

「当然じや。ワシは鏡花一筋じやからの」

うわっ、真顔で恥ずかしい事を……向こうで鏡花がトマトになつて  
るし

「それに相手はあの霧島翔子じやぞ?男である雄一に興味があると  
は思えんじやろうが

「確かに……じやあ、」

「まずい!標的が減るだけだつた!」

「サラバだ!」

煙幕使いすぎだな最近……

「酷い目にあつた……」

あのあと、しばらく様子見をして帰つたがすぐに囮まれて、結局大半を氣絶させてやつと終つた

「一騎討ち?」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

雄一が木下さんと交渉している。俺達はその後ろに並んでいる

「うーん、何が狙いなの水月くん?」

俺かよ!確かに知り合いの方が話し易いのかも知れんが……なら秀吉で良くない?

「とりあえず勝利、かな?」

「愛子がFクラス設備の教室になつても良いの?」

「皆の希望も大事だからな。俺達は出ないし、そのFクラスに負けたら……しょうがないさ」

実際は嫌だけどな

「そつか。でも、手早く終わる代わりにリスクを犯す必要も無いかな」

「だよなあ。ところでCクラスとの戦争はどうだつた?」

「時間は取られたけど、それだけだつたよ?」

「Bクラスとやりあう気つてある?」

「Bクラスつて……前に来てたあの……」

「あのコスプレ野郎が代表のクラス。まあ他の人達はマトモだけど」

「でも、BクラスはFクラスに負けたから宣戦布告出来ないんじゃ

• • • •  
L

「残念。あれは『和平交渉により終結』になつてゐし勿論Dクラスもそだ。戦争に問題は無い」

「いい性格してるね水月くん。それとも代表かな?」

いい性格しているのは全面的に代表です

「うーん……わかつたよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」

「さすがに信頼されてるな。霧島さんは」

でもさすかに一本勝負しや万が一ってこともあるから五回や二回勝つた方が勝ちでござつ? 一

「どうだが？ どうする雄一

いたNIIへたたか  
教科の選択権はいかに豊かいか

さつきの弱点を突く作戦の為か

二二

受けてもいい」

卷之三

明久の声に驚いてしまった

「……雄一の提案を受けてもいい」

若干の気配は感じていたが、普通だと気が付かんぞ……

心中で霧島さんにそいつて霧島の方を向く

「あれ？ 代表。いいの？」

「……その代わり、条件がある」

## 「条件？」

「うん」

「して、その条件とは？」

「……負けた方は何でも一つ言うことを聞く上

俺達がBクラス戦の時に言つたのと同じだな

「もがれたり」からの出来の範囲内で常識的な事、だよな?」

こくりと頷く霧島さん。 そじだわつ 今まで考え方をしていの風だつ  
た木下さんが言つた

「じゃ、いつよつ？勝負内容せぬつのままついで決めねむ？」  
あげる。「いつよつで決めねむ。」

「交渉成り」「異議あり！！」「

「た」?

「仮にも最上位と最下位の決戦だぜ？その条件、じゃあAとか、F

と口ぐらこのハンデじゃないか?」

「うーん、そうとも考えられるナビ……」

「とにかく、選択権を全て「こちら」に譲りてくれないか?」

「でもそつちはBクラスを倒す位だし……」

一。アーティストの個性を尊重するため、アーティストの意見を尊重する。

「でもまあがいれ部お

「なら四つだ。それならいいか？」

「代表、どうする?」

「……それでいい」

「話の分かる人達で助かつた。じゃあ今度こそ交渉成立つて」と。

良いよな雄一?」

良くない訳がないんだがな

「ああ。上出来と言つていい」

「……勝負はいつ?」

「そうだな。十時からでいいか?」

「……わかつた」

話し方だけなら康太に似てゐるが大分イメージが違うな

「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「……水月」

「ん?どうした霧島さん」

「……落とし所は最初から決めてた?」

さすがにバレてますか……

「仰る通りです。それでは私は舞台を降りさせて戴きます故、失礼いたします」

芝居掛かつた口調で恭しく礼をして立ち去る  
そして、どうなることやら……

## 第十九問（後書き）

交渉に水月を出すのが不自然じゃなかつたかとちょっと心配なので  
すが…

某裁判ゲーム…大抵の人はお分かりかと思いますが『逆転裁判』で  
す

## 第一十問

「では、両名共準備は良いですか?」

学年主任の高橋先生が雄一と霧島さん[問う]

「ああ」

「……問題ない」

代表一人の返答も実に落ち着いたものだ

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよ!」

「ワシがやる!」

おっと、こきなり姉弟対決ですか。これは下剋上に期待だな

「頑張つてね……秀吉君」

「つむ。行つてくるのじや」

両者が中央に出てくる

「彼女が出来て良かつたわね秀吉」

「そうじやな。告白されることも減れば良いのじやが……」

そんなんにもてるのか?秀吉つて

「アンタ告白とかされてるの?」

「困つたことじやがな……男子からじやしの」

そんな音がこの空間に響く（気がしただけ）

「…………秀吉、ちよつといつち来てくれる?」

あつ、秀吉が廊下に連れ出された

『何でアンタにばつかりそういうことがあるのよー。』

『きつと姉上の本性を無意識に感じ取つて　あ、姉上つーちがつ  
…………その関節はそつちには曲がらなつ…………』

木下さんだけが帰つてきた

「秀吉は急用ができたから帰るつてさつ。代わりの人を出してくれ  
る?」

「い、いや……。ウチの不戦敗で良い……」

返り血を拭きながら言わればそつちこたくもなるを

「そつ?教科選択権はどつする?」

「唯一の選択権をここで使つたことにして後でどひつゝ言われても  
困る。こつちが選んだことにじよつ」

「そうですか。それではまずAクラスが一勝、と」

Aクラス

木下優子

VS

Fクラス

木下秀吉

生命活動

WIN

DEAD

「秀吉君……」

鏡花が秀吉の様子を見に行つた。さすがに死んではいないと思いま  
すけど……

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

「ここで使つてきたか。流れを作つて俺達のやる気を挫くつもりか?」

「よし。頼んだぞ、明久」

おめでとう佐藤さん。きみの勝ちは確定だ  
まあ、ここはカットでいいか。実況する気にならない

結論：明久、死亡

「死んでないからね！」

心を読むな

「そうだな。死んだのは召喚獣だけだつたな……（ちつ）」

「今舌打ちしたよね！？」

「そんな細かいことは気にするなよ明久。先生、バカは放つておいて次どうぞ」

「わかりました。では、三人目の方どうぞ」

「…………（スック）」

康太か。なら勝てるな

「じゃ、ボクが行こうかな」

相手は愛子か……

「やつほー水月ー参加はしないんだって?」

「ああ。愛子のクラスを落とす可能性がある戦いに参加したくはないからな」

「(雄二)、水月のあれば無自覚だよね?」

「(どううな)、ま、どうでも良いがな)」

「教科は何にしますか?」

「…………保健体育」

愛子の方は知らんがまづ無理そつだな

「土屋君だけ?随分と保健体育が得意みたいだね?」

まあ、俺だって前の戦闘で一瞬見ただけだったから知らなくとも無理はない

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ?…………キミとは違つて、実技で、ね」

…………ああこいつ方面ではありますよう……

「水月にも保健体育なら教えてあげよつか?もちろんじ、実技で……」

明らかにそつち方面ですかねえ!?

「（心うする……下手な返答は愛子を傷付けることになるし……）」「……まあ、その話はまた今度にしようか」

ありがたい。質問を取り下げてくれるとは

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「はーい。試獣召喚つと」

「…………試獣召喚」

康太は小太刀を一本、愛子は巨大な斧を装備している。

が、決着は一瞬だった

「……………加速」

「……………えつ？」

「……………加速、終了」

康太の召喚獣が消えたかと思うと、次の瞬間には愛子の召喚獣を切り裂いていた

Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス 土屋康太

保健体育

446点

VS

572点

強つー愛子も凄い筈なのになんか霞む……

「そ、そんな……一このボクが……！」

そこまで落ち込む事なんですか？愛子さん

「これで一対一ですね。次の方は？」

冷静だな。次で決まると思つていいのかな？

「あ、は、はい。私ですっ」

姫路さんが出る。相手は多分……

「それなら僕が相手をしよう」

やはり久保くんか。外見を借りた時を思い出すぜ

「ところで、Fクラスの人達に聞きたいんだが……」

「どうした学年次席？」

「Cクラスで僕が挑発的な行動をとつたらしいんだが、記憶になくな  
てね。何か知らないかな」

「さあな。そんな態度が挑発に見えたんじゃないか？」

「Cクラスに行つたことも無いんだが？」

「それじゃあ知らないな。ただのいちゃもんか、または個人的理由  
だろ」

「……まあいい。ところで姫路さん、ものは相談なんだが……教科  
は総合科目にしないかい？」

「ちょっと待つたあ！それは」

「構いません」

「姫路さん？」

明久の制止ももつともだったが、姫路さんは提案を受けるようだ

「それでは……」

高橋先生がパソコンを操作する

Aクラス	久保利光	VS	Fクラス	姫路瑞希
総合科目	3997点			
4409点				

『マ、マジか！？』

『いつの間にこんな実力を！？』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！』

軽く一教科分は差があるぞ！？

「ぐつ……！姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……？」

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

姫路さんが勝つたので勝ち数が並んだ

「これで一対一です」

高橋先生も少しは驚いているようだ

「最後の一人、どうぞ」

「俺の出番だな」

Aクラスからは霧島さん、Jリチャードは雄一で代表対決になつた

「教科はどうしますか?」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ!」

ざわ……！

ウチのクラスには伝えてあつたが、Aクラスは予想外の様でざわめきだした

「水月、そつちの代表は何を企んでるのかな?」

「愛子か。雄一のやつが霧島さんと幼馴染みらしくてな、間違える問題を知つているらしい」

「……聞いておいてなんだけど、言って良かつたの?」

「いいだろ。どうせ今から言いには行けないからな」

つこわつせー一人は出ていったからな。今は『ディスプレイのみだ

『不正行為等は即失格になります。いいですね?』

日本史担当の……何だつけるかな?まあいいや。日本史の先生が確認する

『……はい』

『わかつてゐるさ』

『では、始めてください』

ついに始まつた最終決戦。なのだが……

「嫌な予感がひしひしと……」

「その問題が出なかつたりして

簡単に言つてくれるな

『システムテスクに！』

クラスのやつらから歓声があがる

『最下位に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！』

『うおおおおっ！』

「何か違う感じだな…………当たり前の問題を間違えるような、そんな感じだ」

『日本史勝負 限定テスト 100点満点』  
『Aクラス 霧島翔子 97点』  
『Fクラス 坂本雄一 53点』

俺の勘はバカにできないらしい。

おかげで卓袱台はみかん箱になつた……

## 第一十問（後書き）

これを書いてて思った。「木下姉弟戦どつじゆつ」と……  
で、この結果なのですがいかがだったでしょうか？

## ヒューローク

「三対一でAクラスの勝利です」

現在地、視聴覚室。人波に流されて流れ着きました

「……雄一、私の勝ち」

内面的ダメージで膝をつく雄一に霧島さんが声をかける

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやるー歯を食い縛れー」

「吉井君、落ち着いてくださいー」

姫路さんが明久に抱きついて止めている。自覚はないようだが……

「姫路さんの言つ通りだぞ明久。お前なり……一桁くらいだらうへー」

「そこまで酷くないよー」

「でもアキだつたら30点も取れないでしょーつがー」

「それについては否定しないー」

お願ひだから否定してくれ……

姫路さんも大変そうだから少し手伝うか

「姫路さん、1、2の3で明久を放してくれるかな?」

「えつ?で、でも……」

「1、2の……」

「わわつー」

「さんつー」

無理矢理カウントしたら放してくれた。やつぱり優しいな

「明久、動くと首が飛ぶぞ」

「はいっ！？今、何と！？」

「今のお前は操り人形だ。マリオネット根本の時と同じく鋼糸だから下手に動くと切れるぜ」

実際は首を飛ばすほどの技能はまだ習得していないがな。だがそんなことを知らない明久はとたんに大人しくなる

「……とこひで、約束」

霧島さんが雄一に言った。さて、何を頼むのやら……

「…………！（カチヤカチヤカチヤ！）」

康太は何をしているんだ？カメラを構えて……予測がついてるのか？

「わかつている。何でも言え」

おとこ漢だねえ。さすが代表

「……それじゃ」

この部屋全体の空気が張りつめる

「……雄一、私とデートして」

..... はい？

「やつぱりな。お前、まだ諦めてなかつたのか」

「.....私は諦めない。ずっと、雄一のことが好き」

わあ、雄一も隅に置けないねえ

「しかし、意外だな。お前のことだから『付き合ひ』とくるんじやないかと思つていたんだが.....」

「.....嫌々付き合ひぐらいなら、今までいい。でも諦めたくないから.....必ず雄一を振り向かせてみせる」

乙女モード全開ですね霧島さん。さあて、雄一の反応は？

「.....そうか。だが期待に答えることは出来んと思つた？」

「.....大丈夫。雄一は友達と遊びに行く感覺でいい」

「まあ、それくらいなら付き合ひてやるよ。約束だしな」

「.....じゃあ今から計画をたてる」

雄一の首根っこを掴んで引きずつて行つてしまつた

『し、翔子、逃げたりしないからその手を放せ』

『.....これは私の気分』

『氣分で引っ張られてたまるかー』

..... 大変そうだな、雄一

「いやー、代表も大胆だね。またか皆の前で言つなんてね

「ん？ 愛子は知つてたのか？」  
「もちろん。だつて友達だし」

まあ そ う だ な。 も し か し た ら 相 談 さ れ た こ と と か も あ る の か も 知 れ  
な い な

「あつ、西村先生だ」

愛子が ち ょ う ど 入 つ て き た 先 生 を 見 つ け た よ う だ

「本 当 だ。 し か も 明 久 の 方 に 向 か つ て い つ た ぞ」  
『ああ。今から 我が F クラス に 補習 に つ い て の 説 明 を し よ う と 思 つ  
て な』

明 久 の 声 は 聞 こ え な か つ た が 西 村 先 生 の 声 は 聞 こ え た

「……えーと？」

『我 が』 つ て？ 嫌 な 予 感 し か し な い ん で す が ……

『お め で と う。 お 前 ら は 戰 爭 に 負 け た お か げ で、 福 原 先 生 か ら 俺 に  
担 任 が 変 わ る そ う だ。 こ れ か ら 一 年、 死 に 物 狂 い で 勉 強 で き る ぞ』  
『な あ 愛 子、 あ の 先 生 つ て 補 習 の 担 当 だ つ た 先 生 だ よ な？』

「う、うん。 そ う だ よ」

例 の 『趣 味 が 勉 強、 尊 敬 す る の は 『富 金 次 郎』 に な る や つ だ ろ う？  
出 来 れ ば 遠 慮 し た イ も の だ

「俺 が 出 てい れ ば ……」

「後 悔 し て る の ？」

「い ん や。 愛 子 の ク ラ ス を 落 と す の も 嫌 だ つ た か ら な。 後 悔 は し て  
な い さ」

「せつか……ありがとね、水月」

「さてと、じゃあ帰るかな。一緒に帰るか？」

「いいのー?」

な、何をそんなに驚いてるんだ?

「まあ、雄一はアレだし、明久はせつか姫路さんと島田さんに連れて行かれてたし、秀吉と鏡花は楽しそうで入る余地無いし……親しい面子が残つてないからな。気にするこじともない」

「せつか。じゃあ行こつか」

満面の笑みで俺の手を引っ張り、歩きだす

「おー、そんな急ぐなつてー!」

引っ張られながらも、これはこれで良かつたと思えた

試召戦争 結果

対Aクラス戦 憐敗

## Hプローグ（後書き）

本日最後の更新（かな？）

次回から清涼祭編にはいります

## オリキャラ設定（前書き）

校内推薦通つたあ！

試験はまだ先なんですね…

もし受かつたら12月からは更新速度上がるかもしれません

## オリキャラ設定

・影隱 鏡花（かげかくれ きょうか）

性別：女

身長：美波と同じくらい

外見：黒髪で長さは肩ぐらいまでで目元が隠れていて、仕事のときだけヘアバンドで上げる。瞳は水色

性格：極度の恥ずかしがり屋

趣味：パソコン（主に情報収集や情報操作）

成績：理系Aクラス級、文系E～Fクラス級

召喚獣：顔の上半分を覆うヘルメットのようなもの（華宮みたいな）を被っていてスーツを着ている武器は双剣（氷結鏡界の蒼氷コートイングみたいな）

腕輪：高速化（ムツツリーのとは違い、各動作の速度が上昇）

クラス…Fクラス

・影隱 水月（かげかくれ すいげつ）

性別：男

身長：雄二ぐらい

外見：黒髪で腰辺りまでのびていておろしている。仕事のときだけ後ろで束ねている。瞳は水色

身長もあって、実年齢より高く見られる

事もしばしば

性格：明るく、面白い事が好き

趣味：機械いじり、身体を動かすこと（空手を少々やっている）

成績：文系Aクラス級、理系E～Fクラス級

召喚獣…スーシ姿で武器は鎖鎌

腕輪…水操る。点数によつて量が変わる（召喚獣から見た津波サイズぐらいまで）

クラス…Fクラス

・水明山 紫（すいみょうざん むらさき）・影隠淡雪（かげかく れ あわゆき）

性別…男

身長…水月と同じくらい

外見…黒髪で肩ぐらい。瞳は水色だが、カラー「コンタクト」で黒くしている

性格…冷静（といつか冷徹）だが根は面白いこと好き  
成績…全教科Aクラス並（が、一教科名前を忘れBクラスに）

召喚獣…白いスーシ姿で武器は棒術の棒

クラス…Bクラス

三つ子設定

・水月と紫は一卵性、鏡花とは一卵性の三つ子

・あることがきっかけで眞実の一端を知り、そこから鏡花が調べて全てが判明した

・幼稚園から中学三年までずっと一緒に高校で紫が離れるまで大抵一緒にクラスだった

・四季 詠々（よつのき うたよみ）

身長…168cmぐらい

外見…色素が抜けた透き通るよつな白髪をショートカ

ツトにして紫の力チユーシャをしている。瞳は黒

性格：明るく元気でムードメーカー

成績：平均的なBクラス成績

召喚獣：要所要所にサポーターのついた胴着のような  
ガントレット

格好。武器は肘まで覆う手甲

腕輪：強化（周囲の味方の能力アップ）

クラス：Bクラス

諸設定：紫に（仕事で）助けられて惚れた。その為、  
紫の仕事について一通り聞いている

### 名前の由来

- ・鏡花、水月
- ・まんま四字熟語「鏡花水月」から
- ・紫
- ・四字熟語「山紫水明」を半分で切り、並べ替えた
- ・淡雪

三つ子で「雪月花」を完成させたかったため。淡雪である必要は無かつたりする

・詠々

「黄昏色の詠使い」を読んで「詠」の字がなんか気に入つたた  
め

## オリキャラ設定（後書き）

キャラ設定ってこんな感じでいいんだろうか？  
そんなことを考えながら作業する作者でした

## 第一問

桜の色も消え、代わりに緑が増える頃、俺達は……

「明久ー！」いやつー

「勝負だ、水月ー！」

野球をしています

「（明久よりも問題なのは雄一だな。どのベースに来るか……）  
「それ反則じゃないのー？」

「どんなベースを指定したんだー？」雄一のやつー。  
まさか直撃ベースかー？……本気で投げてくる」とはなさそうだが、  
狙いは頭か？なら……

「貴様ら、学園祭の準備をサボつて何をしているかー？」

「ヤバい！鉄人だ！」

おつとまづいな。じゃあ、名前の通り影に隠れるように逃げさせた  
貰おう

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃ  
いけない時期が来たんだが

「

すいふんとやる気無いな雄一

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

「オイオイ、トップが役目を放棄するなよ  
その後、島田さんが副実行委員つきでやることになったんだが……」

候補？……吉井

候補？……明久

「わーすゞい。明久が副実行委員だつて  
議論はつまらなそだから省略させていただこつ

「皆、清涼祭の出し物は決まつたか？」

西村先生が来た……特に何も言つてないが俺も野球やつてたのバレ  
てるのかな？

「今のところ、候補は黒板に書いてある二つです

島田さんが言つが、あれだとまずくないか？

【候補？  
写真館『秘密の覗き部屋』】  
【候補？  
ウェディング喫茶『人生の墓場』】  
【候補？  
中華喫茶『ローロピアン』】

「……補習の時間を倍にした方が良いかもしけんな」

ですよね。中華喫茶とかだけなり『まだ』マシだろ？……

『せ、先生！それは違うんです！』

『そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！』

『僕らがバカなわけじゃありません！』

『馬鹿者！みつともない言い訳をするな！』

西村先生が一喝する。この先生ならおそらく……

「そうだぞ皆。鉄人先生がおっしゃっているのは、明久を選んだのがバカだ、ということだ」

「その通りだ。稼ぎをだしてクラスの設備を向上させるつもりは無いのか？」

鉄人の一言で教室が騒がしくなる。そんな方法ありだつたんだ……このぶんだと勝手に決まりそつだから放つておくか内側でそんな風に考えていると鉄人が近寄ってきた

「水月、先生に対しても敬語なのは良いが『鉄人』と呼ぶんじゃない」「あつ、すいません鉄人先生。どうも最近、影響されてきていまして」

このクラスは珍じゅ……ユニークな人が多いからな

「はあ、せめてこれ以上影響を受けない様に心掛けろよ」「努力します」

ふと周りを見ると、島田さんが皆をまとめようとしているがまとめられていな様子が見えた

それにしても五月蠅い。出来るはずのない意見とかまででこるよ  
うだし…

スウッ

ビクッ！――！

『　』…………『　』『　』

ちょっと田を細めて殺氣を放つたら静かになつた  
あ、もちろん女子や関係の無い秀吉、雄一、明久には放つてないぞ

「す、水月、今は何なの？」

「ああ、ただの殺氣だよ明久」

『　』（ただのつてレベルじゃ無かつたぞ！？）『　』『　』

「さて島田さん。面倒だろうからその三つから決めるつてのはどう  
かな？」

「そうね。じゃあ、一人一回手を擧げる」と――まず「写真館の人！  
はい、次はウエディング喫茶！」

最後、中華喫茶！

パツと見た感じだとよく分からないな……せめて中華喫茶であるこ  
とを祈るが

「Fクラスの出し物は中華喫茶にします！全員、協力するよつ」――

良かった。祈りが通じたのか？

「それなら、お茶と飲茶は俺が引き受けよ」

須川か……確かにこの意見を出したのも須川だったな。ならおかしくもない

「…………（スクツ）」

康太が立ち上がった。料理出来たのか……なにか嫌な予感がしたと思つたら、周りの話では『チャイナドレス見たさに中華料理店に通つてるうちに見様見真似で出来るよ』になつた』といつ説が有力らしい。確かに否定できない（汗）

「じゃあ俺も厨房にしようかな」

「分かつたわ。じゃあ厨房班希望はさつきの三人の方、ホール班はアキの方に集まつて」

明久がホールで大丈夫なんだろうか……客に『頑張つて』とか言われそうなんだがなあ

厨房希望の人達をまとめていて知らなかつたが、この時バイオ兵器の作者（姫路さん）も厨房を希望していたらしい

「水月、ちょっといい？」

放課後、帰る支度をしていたら島田さんが声をかけてきた

「どうした？島田さん」

「喫茶店が成功するように『支援』して貰いたいの」「つまり依頼つて事？……そこまでするような事か？」「実は

「どうやら姫路さんが『学校の状況』を理由に転校するおそれがあるらしい

「なるほど。ではその依頼、受けさせてもらいましょう」「ありがとうございます。で、報酬なんだけど……」

「それなら今度何か奢ってくれればそれでいいぜ」「えつ？ それだけで良いの？」

「半分は俺の意思だからな。むしろ、もっと少なくてもいい。例えばジュース一本とか」「じゃあ最初の条件でお願い」

文句は言わないけど最初の条件でいいのかな？

「了解。で、何からするべきかな……まず雄一を何とかするか」「あ、それはアキに頼んでおいたから多分大丈夫よ」

わお。行動が早いねえ

「なら学園長室の前で待つてるか

「？ 何で学園長室の前なの？」

「姫路さんの転校の理由の中で厄介なのが『教室のボロさ』だからな。雄一ならおそらく学園長に直訴する筈だ」

「ふーん。じゃ、任せていい？」

「勿論。友人の依頼を疎かにはしないよ」

それだけ言って学園長室へ向かって歩く

……雄一が来なかつたらどうじょうか……

## 第一問（後書き）

水月に鉄人と呼ばせてみました。  
今はまだ「鉄人先生」とか言つてますが、最終的には「鉄人」だけ  
にしようと思つてます

## 第一問

「遅かつたな雄一」

現在地：学園長室前

雄一と明久が連れだつてやつて来たところだ

「やはり雄一もこの結論を出したのかな？」

「当然だ。学校に許可無く出来る事じゃない」

「水月、学園長は中に居るの？」

「ああ、今は教頭とお話し中だ」

「それは好都合じゃないか。さつやと行くぞ」

「失礼しまーす！」

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

ガキどもとは「挨拶だな。文句の言える立場ではないが……

「やれやれ。取り込み中だといつのに、とんだ来客ですね。これは話を続けることもできません。……まさか、貴女の差し金ですか？」

「いえいえ、これは私の計画ですよ竹原教頭

「は？」

全員田が点になつてゐるなあ。まあ、こせなりこんなどと云つて出したらな

「竹原教頭は私達の事を」「存知でしょうか？」

「『支援者』だつたか……誰の差し金だ？」

やはり知つてゐるか……

「 」で言つてしまつては信用がた落ちでしょうから言えませんね  
……まあ、学園長ではないとだけ言つておきましょ。 」は退い  
て下さいませんかねえ？」

「 」いいだろ。 それでは、この場は失礼させて頂きます」

学園長に挨拶を忘れないあたり冷静だな

「 行つたか……で、水月。 そつちのガキどもは？」

「 我がクラスの代表とキングオブバカです」

明久が何か喚いてるが気にしない

「 一年F組代表の坂本雄一です」

「 ほう……。 そうかい。 アンタたちがFクラスの坂本と吉井かい」

雄一の自己紹介を聞き、 学園長が言つた  
明久の事は共通認識らしい…… 哀れ明久

「 で、 アンタは誰に雇われているつて？」

「 ああ、 あれはハッタリですよ。 我々の交渉に邪魔だったので」

自分の意思だから言つたこともあながち間違つてないしな

「 そりゃ。 そりゃとなら話くらいは聞こりじやないか」

「 ありがとうござります。 その事は代表から」

視線で雄一を促す。 こういったことは代表者が言つからいいものだ

「 Fクラスの設備について改善を要求しました」

「もうかい。それは暇そつで羨ましい」とだね

「今のFクラスの教室は、まるで学園長の脳みそのように六だらけで、隙間風が吹き込んでくるよつたな酷い状態です」

敬語使つてゐから感心したの、もうこつもの雄一のようだ

「要するに、隙間風の吹き込むよつた教室のせいで体調を崩す生徒が出てくるから、さつさと直せクソババア、とこうワケです」

完全にいつもの雄一だな。最後に『です』がついていふぐらしさか違いが分からん

「あの、学園長……？」

明久が恐る恐るといつた感じで話しかけている。さすがにヤバいと思つてゐるのだろう

「（……ふむ、丁度いいタイミングさね……）」

何か言つたか？よく聞こえなかつた

「よしよし。お前たちの言つたいことはよくわかつた

「え？ それじゃ、直してもらえるんですね！」

それで済むとは思えな……

「却下だね」

「雄一、このババアをコンクリに詰めて捨ててよ」

「……明久。もう少し態度には気を遣え」

「雄一もだがな」

予想した通りだがナチュラルに暴言ばくなよ

「では、『うううのはぢうでしょ、う?』

「ん? なんだい、藪から棒に」

本当は『うううのは嫌なんだけな……

「この三人に何か『依頼』をして、その報酬という事にするといふのはどうでしょうか?」

おそらく学園長はこれに近い提案を考えている筈だ。これなら体面的にも『生徒が必死に頼んできたので断れなかつた』ということに出来るしな

「……いいだろ? その提案、受けようじやないか?」

「ありがとうございます」

「その内容だけ……清涼祭の召喚大会、その賞品は知ってるかい?」

「優勝は……如月ハイラングのブレオーブンブレミアムペアチケット一枚と田金の腕輪……だつけ? 雄!」

「ああ。んで、準優勝はブレオーブンのペアチケット一枚……ブレミアムじゃないやつな」

「最後に第三位はブレオーブンのペアチケット一枚と銅の指輪、でしたよね?」

「そうさ。でもちょっと問題があつてね

「どの賞品ですか?」

「ブレミアムペアチケットだ。アレに関して良からぬ噂を聞いてね。回収したいのさ」

「回収? 出さなければいいだけじゃないんですか?」

「明久、これは多分正式な契約になつてゐるんだ。」おひるの都合で  
変更は出来ないんだわ」

変更すればただでさえ目立つてゐるこの学園だ、周囲に叩かれるこ  
と間違ひなしだしな

「その通りだ。相変わらず頭の回転は早いねえ」

「で、ババア。その良からぬ噂つてのはどんな噂なんだ？」

「あるジンクスをつくる為に無理矢理に事を進めるらしいんだよ。  
そのジンクスは『ここを訪れたカップルは幸せになる』といつもの  
らしくてね」

「？それのどこが悪い噂なんですか？良い話じゃないですか」

確かに無理矢理といつのは気に食わんが、概ね明久に同意だ

「それが『結婚までを』『一ディナート』でもかい？」

「な、なんだと！？」

「あ？どうした雄二」

「い、いや……翔子に『デートに誘われて、『プレオープンのチケッ  
トが手に入つたらな』って言つたんだ。アイツならきっと優勝を狙  
つてくる。そしたら……（ダラダラ）」

さすがに結婚はな……

「そこで、だ。そのチケットの回収を吉井と坂本に頼みたいのさ」

「なつ！？なぜ俺では駄目なんですか？」

「アンタには別の依頼があるんだよ」

「……どういった依頼でしょう？」

「まあそう焦るでないよ。そっちの一人はそれでいいかい？」

「わかりました。この話、引き受けます。ただ……」

雄一の目が変わった。何かを試すような、そんな感覚だ

「『ただ』何だい？」

「トーナメントの組み合わせが決まつたら科目の指定をさせていただきたい」

「ふむ……。いいだろ？ 点数の水増しとかだつたら一蹴していたけど、それくらいなら協力しようじゃないか」

「……ありがとうございます」

今度は何かを確信したような表情になつたな……

「あひ。そこまでしてやつて優勝出来なかつた、なんてのはなしだよ」

「無論だ」

「じゃあそつちの話は終わりだ。席を外してもうおつかね」

「……分かりました。失礼します」

雄一が何か喚いている明久を連れて出ていった

「……さて、じゃあ本題に入ろうかね」

「本題？ 教頭の事でしょ？ ？」

「そうさね。アタシの失脚を狙つていろいろじくてね、白金の腕輪の暴走はうつてつけらしくてね」

学園長の言つた『白金の腕輪の暴走』だが、どうやら高得点の人を使つと暴走するらしい

「ちやんと調整してくださつよ。俺の『銅の指輪』は完璧なんですから」

「馬鹿言つたじやなこよ。そつちの機能は観察処分者の応用じやないか。こつちとは訳が違つよ」

銅の指輪の効果は『物理干渉能力（フイードバック無し）』だ。ちなみに俺の作だが自爆機能は無い

「まあそこは置いておいてだね、アンタ達には竹原を追い詰める手伝いをして欲しいんだよ」

「分かりました。報酬は先程言つたことですよね？」

「ああ、よろしく頼むよ。本格的に動くのは清涼祭当日でいいから下準備を忘れるんじゃないよ」

「承知しました。ああ、あと俺も誰かと召喚大会に出場しても平気ですね？」

「大丈夫だけど、それがどうかしたのかい？」

「強敵でも倒しておこうと思いまして……といつことで紫たひとやらせててくれませんか？」

「いいだろ。ただしこれは報酬の前払い分とこいつとこいつをせてもらうよ」

「了解しました。それでは……あ、そつそつ」

学園長室を出ようとして、ふと思いついた

「我等が代表は何か感づいたようですがよ？」

「…………そつかい」

「以上です。では今度こそ失礼します」

## 第二問

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね」

「ホント、いつもはただのバカなのにね」

「そうか？勉強以外ならそこそこ頭いいと思つぞ」

「なんと書つことでしょう、教室がまるで喫茶店のような空間に変わつてゐるじゃあありませんか」

「スマンな、出来るだけ教室設備を使えという規則さえ無ければ……」

「いいわよ別に。」このテーブルなんて、パツと見は本物と区別つかないんだから」

「それは木下君と鏡花ちゃんが作つてくれたんですよ。一人で楽しそうに、でもしっかりと作業してました」

秀吉が演劇部の小道具からテーブルクロスを借りてきたらしい

「ま、見かけはそれなりのものになつたがの。その分、クロスを捲るとここの通りじゃ」

「さすがにこれ以上は……」

捲られたクロスの下にはみかん箱が覗いている

「これを見られたら店の評判はガタ落ちね」

「その時は俺が何とかするわ」

外部から持ち込んでも、使い始めてしまえばこっちのものだ

ただ、気になるのは竹原教頭だ。人を使って明久達、もしくは店を

妨害していくかも知れない

「…………飲茶も完璧」

「おわっ」

「明久五月蠅い」

「酷い！」

康太が手に皿とティーセットを持つてきた

が、何だこの嫌な感じは…………ととりあえず、様子を見よつ

「ふむふむ。表面は「ゴリ」「ゴリ」でありながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎる味わいがとつても んゴパつ」

緊急警報発令！バイオ兵器が紛れ込んだ模様！即刻退避せよ！

「お、俺も厨房だし、様子みて手伝つてくるわ」

あくまで自然に、でも早急に撤退する。明久の死体もじきは無視

♪少し遡り side 鏡花♪

土屋君が味見用の胡麻団子を持ってきてくれた

「わあ…………。美味しいそつ…………」

「土屋、これウチらが食べちゃつていいの？」

「…………（「クリ」）」

「では、遠慮なく頂こうかの。ほれ鏡花」

楊枝が無いせいか、秀吉君が胡麻団子を口元に持つてくる

「えつ、あ、その……」

「ん? どうしたのじゃ?」

「(ねえ瑞希、あれってわざとだと思つ?)」

「(いえ、多分わかつていなかと……)」

「(木下って案外天然だったのね)」

「(そうですね)」

「なんじゃ、食べんのか? 鏡花よ」

「た、食べる……」

口を開けたら秀吉君が胡麻団子を入れてくれた

「ムグムグ……」

「どうじゃ? 美味しいじゃん」

「美味しい……」

その後も同じことをして、周りから『いい加減にしろー』と言われるまで秀吉君は気付かせませんでした

↓ side 水月↓

「もうこんな時間か……須川、ちょっと召喚大会行ってくるわ

「わかった」

料理中のせいか、少し返事が素つ『気ない

「えつ、水月もやつぱり出るの?」

明久がちゅうぶん近くに来ていたらしく

「ああ（依頼では無いがな）」

「（なんだ）水月は何で出ようと思つたの？」

「（銅の指輪の回収だ）なんとなく面白そうだつたしな」

「ふーん。なんだ（何で回収？）」

「（俺の作品なので手元に置いておきたいからだ）んじゃ、行って  
くわ」

まずはAクラスだな

Aクラス、メイド喫茶『』主人様とお呼びー。』

「……お帰りなさいませ』主人様

「似合つてゐるね霧島さん。悪いけど愛子借りていいかな？」

「……わかつた。待つてて」

とりあえず外に出て待つ。あの様子を見るに、少し時間がかかりそうだったしな

「お待たせ！」

早つーってか早つーーきちんと制服着てるし……

「……早かつたな」

「そうかな？」

「まあ、早いにこしたことはない。んじゃ、行くか

「うん。楽しみだな」

特設ステージ前

「「不戦勝おー!?」」

「どうも風邪を引いて寝込んでいるらしいへ、辞退すると……」

風邪か……食中毒だつたらウチの外れを引いたやつかと想つたが違うらしい

ところが、あれは食中毒のレベルでは無い氣もするがな

「それじゃあ仕方ないか。あーあ、ボク結構楽しみだつたのに……」「まあ次があるって。それまでの我慢だろ」「……そうだよね。前向きに考えなきゃね」「やつそつ、楽しみは後に取つておくもんだ」

一回戦はおそらくライジングだらう。俺も楽しみだなあ

中華喫茶『ヨーロピアン』

「ただいま、つとむじつた?」

やけに騒々しいな

「あ、水月。それが……」

「営業妨害が出たのじゅ。テーブルの事での……今から雄一達を呼びに行くところじゅ」

あーそりだ、開催しちゃつたら外から持つてくるの無理だつてこと  
忘れてた……仕方ない

「ちょっと待った。秀吉は演劇部から有るだけテーブルを持つて欲しい。鏡花は使つてない机のある場所を調べてくれ。あと、あの二人組も」

「了解じゃ」

「わかつた……」

さてと、あのソフトモヒカンと坊主だな。どう料理してやろうか……

『まつたく、責任者はいないのか！』

やれやれ、せつかちなお客様だ

「失礼ですが、今代表は外しております……代理ではありますが私、影隠と申します。何かご不満な点がございましたでしょうか？」「ご不満も何も、このテーブルは何だよ！」

五月蠅いなあ。もっと落ち着いてくれよ

「それに関してはこちらのミスでして、テーブルが届いていなかつたので代用にと。あと、少し声を控えて頂けませんか？周りに迷惑ですでので」

「んな事知るか！」

顔面に向かつて拳が飛んでくる

ガツ

右からのパンチは俺の左頬に直撃した

「声を控えて頂けませんか?」

まだ拳が当たったまま、殺氣と共に轟つ  
途端、硬直する二人組

「あ、ああ……」

「分かつて頂けて何よりです。それで、用件のほうですが……」  
「いや、やっぱり止めておいた。邪魔したな」

本当にね

去っていく二人組を見送ると、入れ替わりに秀吉がやつてきた

「おお、いいタイミングだ!そこ」に置いてくれ。あとは俺の『指鋼  
糸』でシヨーに見立てる

「やうかの。では、頼むぞい」

鋼糸で持ち上げる。パツと見は浮いている様にしか見えない

「申し訳ありませんでした。只今からテーブルを入れ替えさせて頂  
きます」

一人で入つてくるようで、実は後ろにテーブルが浮いている(鋼糸  
で持つているが)

『何だあれ?』

『シヨーでもあるのかな?』

『どうやって浮いているんだ?』

『申し訳ありませんが、お客様は一度このお集まつてここで

そう言つて教室の隅にあつめ、鋼糸でクロスを持ち上げる。もちろん、こちちは傾いたりしないように細かい網目状に組んである

『おお！』

『完全に浮いてる！』

『念動力か！？』

違います

『あのクロス……生物だったのか……』

そんな事はありません

持ち上げたクロスの下にテーブルを滑り込ませる

「テーブルの到着が遅れておりますので、窮屈でしうがしばしこちらでおくつろぎ下さい。到着し次第、隨時入れ替えをいたしますので」

何とか一件落着、かな？

「さすがだな水月」

「うおつと、何時から居た？雄一」

「シヨーの開幕あたりからだ」

「水月、あれも綱糸つてやつ？」

「ああ、結構便利だぜ。つと、テーブル調達に行くか」

「そうだな。二回戦まであまり時間が無い、急ぐぞ」

「雄一」と明久が使つてないテーブルを隠して俺が回収・入れ替えを担当して、何とか必要数を集めた

第二問（後書き）

水月の技、応用しすぎた気がしてなりません…  
あと、鏡花と秀吉の絡ませかたがイマイチわかりません。強引過ぎ  
たかな？

## 第四問

「やつぱつこじやくのペアか」

会場で相手ペアと対面した訳だが……

「どうした水月、不満なのか？」

「こやこや、どうせ紫とやるならもうと上のほうでやりたかっただけだ」

そり、対戦相手は紫と四季さんだ。どうせなら一般公開のあるあたりでやりたかった

「科目は英語だらう？お前は大丈夫なのか？」

ステージに向かいつつ、紫が聞いてくる

俺は文型だが英語はBクラス下位レベルが常だ。鏡花もそのぐらいらしく、本当に平等（？）な学力っぽくなつてゐ

「今回は結構いけたんだよ。退屈させるような点数じゃない」

「そうか。で、そっちが……」

「俺のペアでAクラスの上藤愛子だ。愛子、コイツは水明山紫、俺の親友であり三つ子の内の一人。で、隣がその彼女の四季詠々さん」

愛子にもBクラス戦後に事情は説明済みだ

「はじめまして、上藤愛子です」

「はじめまして、四季詠々つてこいます。よろしくね」

「水明山紫だ。よろしく」

モードにしている間にステージに到着した

「さあて、やりますか！」

「それでは一回戦、英語の試合を始めてください」

「――試験召喚――」

四人のデフォルメされた姿が現れる

「手甲？」  
ガントレット

四季さんの召喚獣は各部にサポーターを着けた道着のような姿に、手には頑丈そうな手甲を着けていた

Fクラス	影隱水月	&amp;	Aクラス	工藤愛子	VS
Bクラス	水明山紫	&amp;	Bクラス	四季詠々	
英語	401点	&amp;		440点	
VS	453点	&amp;		425点	

皆400点オーバーかよ！でも、思つたより差が小さい……

「いくぞ、水月」

「かかってこいや、紫」

紫の棒術での攻撃を鎖で流しつつ、分銅で攻撃をはかる。向こうでは愛子と四季さんが戦っている

「大分扱いに慣れてるな紫」

「「うやめればあとは簡単だ。お前だつてわづだらう。」

「まあな」

攻め辛い……棒の両端を使って多角的に、攻めては守つてを繰り返しているためだらう

「……詠々、アレをやうひ」

「わかつた！ちゃんと守つてよ？」

「当たり前だ」

ん？何をするつもりだ？

思つが早いが、四季さんの召喚獣の腕輪が光を放つ。しかし、召喚獣は……

「動きが止まつた？」

そう、両拳をあわせて動きを止めてしまった。それ以外に変化は無い……

Fクラス	影隱水用	&amp;	Aクラス	工藤愛子	VS	B
クラス	水明山紫	&amp;	Bクラス	四季詠々		
英語	321点	&amp;		358点	VS	
	371点	&amp;		343点		

戦闘で減つてはいるが、特に点数にも変化は無い

「考え方してゐる暇は無いぞ」

紫の召喚獣が愛子の召喚獣を叩く。だがまだ平氣なはず……

「えつー?」

「何つー?」

愛子の召喚獣が戦死した

「な、何が……」

「詠々の腕輪は範囲内を一定時間のみ点数＝攻撃力に出来る」

待て待て、普通は点数の何割かだらうが！

何だそのチートもどきはー！……待てよ、範囲内って事はこいつもか  
でも、攻撃は全部避けろと？

ピンチだ。四季さんは動けないよう助かつたが……

「くつ、腕輪発動！」

20点分で出して上手く使う！

「くっけー！」

小さな円盤状にして飛び回らせる。水自体も超回転させてるので  
切れ味が発生する

「まだまだー！」

右から左から飛んでくる円盤に対応しようとする紫に分銅による追  
撃を加える

やはりあの効果は「」もありもあるらしいへ、分銅をよける為に円盤こ  
掠めることも出てきた

「隙あり！」

ほんの少し軸がぶれたのを見て一步で近づき、首に一閃。これなら点数で負けようが一撃だからな

「ちつ、詠々ースマン！」

Fクラス	影隱水月	&amp;	Aクラス	工藤愛子	VS	B
クラス	水明山紫	&amp;	Bクラス	四季詠々		
英語	301点	&amp;	0点			
	0点	&amp;	343点			

腕輪は解除した様で接近してきた

「おりやあー！」

鎖を振つて分銅で横から叩く

「甘こよー！」

体制を下げ、さらに加速して避けきつた

「くわい！」

先ほどの水をレールにして即刻撤退

「凄いね四季さん。まさかこままでとは……」

また円盤状にして牽制する

「まあね。最近自分も鍛えてるし、召喚獣の扱いも練習したから」「鍛えてる？格闘技か何か……なぜ？」

「いつか紫くんのお仕事を手伝えるようになるためだよ」

「凄いな愛の力。紫は若干呆れ気味だが……どうせ『危ない目に会わせたくないんだが……』とか思ってるんだろう

「さて、仕込みは終わった。俺の勝ちだ

「えつ！？」

唐突に四季さんの召喚獣の首が切れた。……首狙ってばっかりだな、俺

「『指鋼糸』の応用で、名前は……『指水糸』ってところか

そう、トドメをさしたのは糸状になつた水だ。糸のまま仕込んで一気に引いた（引いたなんてレベルでは無いのだが）ので切れた、といつ訳だ

「上藤さん、影隠くんペアの勝利です」

勝ち名乗りを受けてステージから降りる

「まさかあそこまで操れるとはな水月」

「いやいや、ただの苦し紛れが成功しただけだ。マトモにやつてたら負けてたよ」

「そんなこと無いですよーあの分銅を避けられたのもマグレみたい

なもので……」

「じゃあ、今日は水戸の運がよかつたってことかな?」「そんなところだ。つと、そつだ。三人にプレゼントだ」

そつ置いてチケットを渡す

「ウチの中華喫茶の一品無料券だ。是非とも」来店を  
「そつが。悪いな水戸」  
「やつた! 紫くんと行かせて頂きまーす」

紫が無料券を受け取り、去つていった

「ほり、愛子も」  
「あ、うん。じゃあボクからも…はい」「…」  
「何々…スペシャルチケット? 何が起ころんんだ?」  
「一品無料か、または特別メニューとかかな?」

「メイド一人と保健体育の実習ができます」「  
「そこ…? あえてのそこですか! ?」「…  
…と、このは冗談でスペシャルメニューが食べられるんだよ」

〔冗談じゃなかつたら責任者の頭は大層狂つていいだらうつわ

「そ、そつか。暇が出来たら行かせてもらひつよ」  
「うん。じゃあボクはここで」  
「おひ。じゃあな」

さて、クラスに戻るか

#### 第四問（後書き）

いつかやりたかった対戦を実現させてみました！

物語の展開上、いつしましたが実際にやるかどうか…

本日の更新はこれにて終了、かな？

出来れば推薦入試までにもう一度更新したいのですが…できるかな

？

## 第五問（前書き）

何かすつゝじく間に空いてしまった……

本当は合格発表の後には更新するつもりだったんですけど（汗  
大学入ってからもあんまり更新速度は上がらないなそう……なのでその  
お詫び（？）に今回は一巻の最後までいっぺんに更新します！

## 第五問

「さつ きぶつ……」

「早かつたね、水月。暇はできたの?」

「まあ、そんなところだ」

俺達は今、Aクラスのメイド喫茶に来ていた。  
そんな理由は少し前……

Fクラスにて

「勝つってきたぜ」

「あ、お帰り水月。遅かつたね」

明久が反応してくれた。小さな女の子をくつつけた状態で……

「明久、それは犯さ「ちょっとーそれは誤解だよー」。そつなのかな  
雄二?」

「ああ、島田の妹らしくてな。何やら前に会つたことがあってなつ  
いているらしい」

そうか。それはすまなかつたな明久

「謝罪は声に出してよー」

「お前はときたま心を読むのをやめろよ。俺は影隠水月つていうん  
だ、キミは?」

「島田葉月です。よろしくですー」

葉月ちやんは元気いいなあ。何か良いことでもあったのかい?

「水月！僕に謝罪してよ！」

「はいはい、すいませんでしたあ

「また声に出してないよ！」

「だから心を読むなと言つてるだろ」「そんなバカは放つておいて、行くぞ」

「どうか出かけるのか？」

「どうも外部で悪評が流されていようつでの……何とかしなければいけんのじや」

「悪評？まさかあのバカそうな一人組か？」

「かもしれない。じやから確認しに行つてもいいのじや」

「ついでに飯も食つておくれつもりだ。もし常夏コンビだつたらそつちが優先だがな」

「常夏？」

「あの二人組、3・Aの常村勇作と夏川俊平を坂本君が略した（？）の……」

そんな名前だったのか……常夏コンビね、ナイスなネーミングだ

「と、言つわけで行くぞ」

「おひ」

Aクラス前

「明久、水月、ここはやめよ！」

「ここまで来て何を言つているのぞー早く中に入るよー」

「俺は行つてみたいんだが、……」

「頼むー！」だけは、Aクラスだけは勘弁してくれー。」

「無理」

「水月、貴様……」

そんなに懇々しげに睨まれても……

「確認しない訳にもいかないだろ？ だつたら早く済ませやつせ」

「ん、それも一理あるが……」

「あーもつーつとおしご。行くがー。」

島田さん達はもう入つてしまつている  
雄一を半ば蹴り入れると、そこには霧島さんが

「……おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン」

大分段階をすつ飛ばしたな。雄一の話じや、まだ付き合つていないと  
はずだが

「おかえりなさいませーつてあれ？ 水月？」

と、まあこんな感じで畠頭に繋がつた訳だ

「さつときは見れなかつたが愛子も似合つてるな」

「ありがと 何なら保健体育の実じゅ「何でもそこには繋げるなー。」

あははつ、「冗談だよ冗談」

「まつたく……」

いちいちピッククつさせやがつて

「お席にい」案内いたします

霧島さんの案内で席につく。ちなみに愛子は誰かに呼ばれて行つた

「……では、メニューをどうぞ」

「凄つ！普通の店みたいなメニューとは……」

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー！」

女子は仲良く同じメニューか

「僕は『水』で。付け合わせに塩があると嬉しい」

「ここまで来てそれなのか明久！？…………まあ、いい。それよりも

「霧島さん、これってどうすればいいの？」

無料券を見せながら聞いてみた

「……それはまずメイドを1人指名する」

「ふむふむ。それで？」

「そのメイドの料理が出される。はい雄一、私の分のチケットあげる」

「これって皆持つてるのか？」

「……大半が持つてる。あげる人は家族だつたり恋人だつたり親しい友人だつたり、人それぞれだけど」

じゃあ俺は親しい友人だな。雄一はさしづめ意中の人つてところだ

「じゃあ俺は愛子を指名で」

「俺は翔子以が」

「……」注文を繰り返します

気配で察したのか雄一が汗だくなつて「

「……』ふわふわシフォンケーキ』を三つ、『水』を一つ、スペシャルメニューの『上藤愛子』と『霧島翔子』指名が一つずつ。以上でよろしいですか?」

「全然よろしくねえぞつーつ」

雄一が動搖している様は愉快だな。いつもがアレなだけになおのことな

「……では食器を」用意致します

女子三人にはフォークが、明久の前には塙(食器…なのか?)が、俺の前には箸、雄一の前には

「しょ、翔子!」コレいつの実印だぞ!さやつて手に入れたんだ!

?

説明が不要になつたな。しかし凄いな、恋する乙女達は……(断じて食器ではないがな)

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ち下さい」  
「ちょっと待て翔子!まだ付き合つてもいのにいきなり結婚な  
のかー?」

「…………電撃結婚」

「電撃なんてレベルじゃないなあ オイ！」

「工藤愛子特製スペシャルメニューをお持ちいたしました！」

「早いなオイ！」

「入店直後に作り始めたからね」

上から霧島さん 雄一 霧島さん 雄一 愛子 僕 愛子の順だ。  
念の為。

メニューは肉じゃがにワカメと豆腐の味噌汁、白飯と漬物のようだ。  
明らかに時間を超越している気がするが……

「もし俺が別の奴を選んでたらどうするつもりだつたんだ？」

「えつ…………考えてなかつた。といつか、その可能性もあつたの  
？」

「いや、なわけですな」

「よかつたあー。ビックリしちやつたよ」

「悪い悪い。んじや、いただきます」

きちんと手をあわせてから食べ始める

「んー美味いつー前にも思つたが愛子つて料理上手いな」

「あ、ありがとうーーーーー（鏡花、水月の好物教えてくれてありが  
とうーーー）」

箸が進んで、瞬く間に平らげてしまった

「あー美味かつたー！」ちかづきも

ん？島田さんに姫路わん、なぜ俺の方を見ている？

「（……さつきのセリフも無意識よね？）」

「（おそれくは……）」

「（ああいうセリフって無意識に出るもののかしら？）」

「（まあ……でも、羨ましいです）」

？よく分からんが、気にしないことにしよう

『おかえりなさいませ、ご主人様』

『おう。一人だ。中央付近の席は空いてるか？』

標的を視認。一時様子を見る……

『それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな！』

『そうだな。さつきいった2-Fの中華喫茶は酷かったからな！』

殺つていいかな？

「待て、明久」

タツチの差で早く動いた明久に制止がかかる

「雄一、どうして止めるのさ！あの連中を早く止めないと」

「落ち着け。こんなところで殴り倒せば、悪評はさらに広まるだけだ」

一理あるどころか全面的に正しいんだが……

そう考えていると雄一が霧島さんを呼んだ

話を聞くかぎり、あの二人は何度も来ているらしい

「そうか……よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ」

「……わかった」

凄いなあ。」んな要求、普通なら却下だらう。あれつ？視界が急に……

「水月は見ちゃダメー」

あ、愛子？何が起つているんだ？

「え、霧島さん！？」んなところで脱ぎ始めちゃダメですつー。」

「もうよー。ここにはケダモノが沢山いるのよー。」

「わあー。お姉さん、胸あつきーですー」

霧島さんに何が起つた！？

その後、メイド服（予備）を借りられたようだ

「着るのはお前だ」

「愁傷さま明久。お前の事は3日は忘れない

「で、もう一着は水月だ」

「何いー？」

「おれ雄一め……

「じゃあ水月、お願ひできるへ。」（れも支援の内よ）

やつくるか島田わこ

「……こいだらう。ただし、変装はある程度をせてもいいはず

「そうか。だが、他人の姿は使つなよ  
「わかつてゐるつて」

明久は渋つてゐるが、ビッグセセ雄二が丸め込むだらう

数分後

「これでよろしいでしようか？」

俺は変装を終えた。明久も似合つてゐるじゃないか  
俺の格好は長い黒髪は高めの位置で一つに縛つて（いわゆるポニー  
テールつてやつだ）メイド服を着ている

「二人ともずいぶん似合つてゐるな。それなら大丈夫だらうから行つ  
てこい」

「かし」まりました

常夏に近づいていく…………この言い方だと夏真つ盛りな感じだな

「お客様、掃除をいたしますので、少々よろしいでしようか？」

「おつ！えらく綺麗なメイドだな。手早く頼むぜ」

視線がキモい！お望み通り手早く始末してやるよ

「あつ……」

ドスツ

「ウグッ」

よろけたフリして肘鉄を鳩尾に叩き込んでやつたぜ

「も、申し訳ありません！お怪我は『ヤセ』ませんか？」

「あ、ああ。（大人っぽいのに）デジツナ……）」

一瞬ブルッとしたぞ……次の一撃で仕留める！

『さて、痴漢行為の取調べの為、ちょっと来てもらおうが』

「くつ、行くぞ夏川！」

モヒカン頭が逃げ……えつ！？

「！」これ、外れねえじやねえか！畜生！覚えてろ変態めつ！

何も見てない。何も見てない。俺は何も見てない。

アレは幻覚。アレは幻覚。アレは幻覚だ。そうに違いない……

「逃がすか！追うぞアキちゃん、おい、フローズしてんじやねえス  
イちゃん！」

だつて、ねえ……あれは反則だらつ。変態にもほどがあるわ

「了解！でもその呼び方は勘弁して！」

「私は水蓮です」

女装するときは「つむ」の名だ。……変な趣味とかじゃないぞ！仕事でだからな！

「明久！水蓮！奴らは四階に逃げたぞ！」

「「「めん…やつぱりアキちゃんでお願い！なんだか周囲の視線が刺  
れねんだ…」

ふつ、馬鹿め。つと、電話？しかも選手だと？

「もしもし？」

『三回戦まで時間がないよ？』

しまった！時間気にするの忘れてた！

「何とかする。会場で会おう。 雄一すまん…三回戦の時間

だ！」

「わかった。そつとと行け水蓮」

ありがたい。まだ変装をとく時間はあるな

## 第六問

「いらっしゃいませーー！」

四回戦である実験を終えたり、皆が四回戦で戦つて雄一の一人勝ちになつたり、チャイナ服を着ることになつたり、まあ色々あつた。おかげで密も増えたし、文句は無い

次は準決勝なんだが、先にあるのは俺達の方だ。なんでも常夏が相手だとか……

「水月、もうそろそろだから呼びに来たよー」

「おう。今いく」

お盆を厨房に戻す。チャイナ服を着ることになつた時、俺までホルにまわされてしまつた（あくまで男物を、である）

「よし。じゃあ行くか」

「それにしても水月似合つてるね。今回はこのまま行くの？」

前回は「ひつそり着替えて行つていた。だが準決勝となると見る密も多い、アピールになるだろ」

「愛子、前にも話したがこの試合」

「わかつてゐるつて。負けるんでしょ？」

「ああ。銅の指輪が目的だからな。でも、ある程度の戦いは演出しないとな」

「だね だとすると……ボクは召喚獣の扱いに慣れてない感じにした方がいいかな？」

あれだけの高得点だからな。それしか無さそうだ

「じゃあそれで、マグレで 一体べりに倒しても良いがな」

「りよーかい」

## 特設ステージ

『お待たせいたしました！これより準決勝第一試合を開始したいと  
思います！』

会場もだいぶ盛り上がりつつあるようだな

『それでは選手の入場です！』

俺達、常夏の順に入場する

「よう、センパイ？ここまで勝ち上がれたんだな」  
「抜かせ！どうせお前はパートナーの力だろ？」  
「否定はしないよ。事実、理系は全滅だしな」  
「なんだ？ いまから負けた時の言い訳づくりか？」  
『『負けた時』？ちがう。俺達は『負け』に来たんだ。なあ、愛子

「 そうだね。でも、ある程度は動かなきやね 」

『それでは始めてください』

「試獸召喚！」

保健体育	Aクラス	影隱水月	& amp;	Aクラス	工藤愛子	VS
333点	夏川俊平	& amp;	Aクラス	常村勇作		
474点	& amp;	474点		V		

さすが最上級生のAクラス。主要科目以外もずいぶん高いな

「前より点数上がってるな愛子」

「もちろん！次は負けないよ！」

まだ康太に負けたこと根に持つてるのか

「先輩も中々じゃないですか。これじゃあ負けるかもなあ」「棒読みしてんじゃねえ！」

愛子は斧を横薙ぎに振るつ。運悪く（？）モヒカン頭が吹き飛ぶ（頭だけ）

「あつ……」

「避けるよモヒカン……」

大変グロテスクな死に方になつたな……

「くつ、どうせマグレだろつ！俺はそつはいかない！」

相棒が殺られてキレたようだ

とは言え、相手は俺達より一年近く経験に差がある（俺達が転校生なのもあるのだが）

「くつー！」

相手はオーソドックスな鎧と剣だが、扱いが上手い（明久ほどでは

ないが）

俺の召喚獣も首を斬られて戦死。これで一対一だ

『点数の高さで一人を撃破した工藤・影隱ペア！しかし夏川・常村ペアも一人撃破！これにより個人戦となつてきました！』

斧を上から降り下ろす。しかし横に避けられ、反撃を受ける。慌てて後退した演技のところに追撃を受けて愛子も戦死

『工藤選手が奮闘するも、経験の差を見せつけて夏川・常村ペアの勝利！』

敗者はとつとと去らうかな

「うう、また負けかあ……」

「うやら負けたのが嫌みたいだ。科目が保健体育だから特にか

「すまんな愛子。こんなことさせて……」

「い、いや、ボクだつて了承した訳だし、水月が悪いわけでは……」

「うーん……そうだ。この後俺が何か作つてやるよ。ウチのクラスで」

「いや、でも……」

「食べたくない、か？」

「そんなことない！あつ……」

「じゃ、決定な ちょっと先に行つてくれ。雄一たちのほうを覗いてくる」

「えつ、あ、うん……」

よし。行きますか

（side愛子）

勢いにおされて返事しちゃつたけど……

「もう言えば水月の普通の料理を食べるのは初めてだよね？」

いつもお弁当なら交換してるけど、いつこうとは無かつたし

「せっかくだし、精一杯楽しもつかな」

（side水月）

「明久。今日という今日はお前をコロス」

「あはは。やだなあ雄一。目が怖いよ？」

俺がついた頃には戦闘は終了していたが、作戦の結果雄一お持ち帰り事件が発生するところだった

「まったく、作戦を考えるときは5・6個考えるものだぜ？」

「それが出来たら苦労しない」

そりゃしちもつとも

「…………雄一」

「ムツツリー二か。何かあったのか？」

教室前で康太が駆け寄ってきた

「…………ウエイトレスが連れて行かれた」

「ええっ！？姫路さんたちが！？」

嫌な予感がする……

「愛子は居るか？」

「…………（フルフル）」

首を横に振る康太。やっぱりか…………おおかた鏡花あたりと話していたんだろう

「俺が誘つたから…………」

「落ち込む暇があつたら助けに行くぞ」

雄一がそう言つた。その通りじやないか

「だな。殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す」

「水月、某池袋最強みたいになつてるよ？？」

「残念ながら自販機は投げられないぜ？」

「当たり前だよ…………」

まあそりや そりだ

「…………行き先はわかる」

康太がある機械を出す

「盗聴の受信機？」

「…………（「ク）」

「ムツツリーは何で持つてて、水月は何でわかるのを……  
だが、それじゃあ不充分だな。鏡花も連れて行かれたんだろう？」

「…………（「ク）」

「ならこれで大丈夫だ」

取り出すのは発信器の受信機である

「俺達は有事の際はこれを起動することになってる」

「いつもは仕事中とかなんだがな…………

GPSとリンクするタイプなので一発でわかる

「近くのカラオケボックスみたいだな…………よし。行くか！」「うん！」

「…………こうして、姫を助け出すための冒険が、今始まる……」

「康太、そのナレーションはいらない

「…………すまない」

## 第七問

「…………」「…………」

パーティールームの一つ、誘拐犯と選手たちのいる部屋の前

『さてどうする？坂本と吉井だつたか？そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？』

呼ばれる前に来ますか……

『待て。吉井つてのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。今はあまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしてたらしいからな』

『坂本つて、あの坂本か？』

『ああ。できれば事を構えたくないんだが……』

『気持ちはわかるがそういうものないだろ？依頼はその一人を動かなくすることなんだから』

依頼ねえ…………そういうことなら遠くに逃げれば、もし失敗しても俺達が戻れる可能性は下がるのに

『お、お姉ちゃん……』

『アンタたち！いい加減葉月を放しなさいよー』

島田シスターーズの声だ。葉月ちゃんが捕まってるから抵抗出来ないのか

『…………』野郎共が

『お姉ちゃん、だつてさーかっわいいーー』

『ギャははははー。』

声からすると最低でも七人ぐらいか  
明久が雄一に止められたようだ。康太がバイトの格好をしている

『……灰皿をお取り替え致します』

『おひ。で、このオネーチャンたひびつするへ・ヤツちやつていいの  
?』

『だつたら俺はコツチの巨乳チャンがいいなー。』

『なら俺はこっちの活発そうな子もーらー。』

ピシッ

まずいな……我慢の限界が近い。だが今入ればさらに大変なことになりかねない……

『あ、あのつー葉月ちゃんを放して、私たちを帰らせて下さー！  
『だつてさー。どうする?』

『それはオネーチャンたちの頑張り次第だよな?』

『やつーさ、触らないで』

『ちょっと、やめなさいよー。』

『そりだよー。こんなことして恥ずかしくないの?』

『あーもー。うつせえ女だな！』

『強気のやつって従わせてみたいよねえ』

『『わやあつー。』』

突き飛ばす音に島田わんと愛子の悲鳴、何かの倒れる音に破れるよ  
うな音……

ガシャン

俺の中で何かが切り替わった

「「おじやましまーす！」」

同じくキレたであろう明久と一緒にに入る  
最初に目にはいったのは愛子だった……服の右肩の辺りが破れています

「死にくされやああつ！」

隣で明久が相手を蹴りあげた

「ここで問題です！貴様らはチケットを手に入れました！さて、そのチケットは次のうちどれでしょう？

- ？天国への片道切符
- ？地獄への片道切符
- ？地獄への無限往復切符

さあ、どれ！

「んなもん知るかよ！」

右のハイキックがくる。だが遅い  
軸足を払い転ばせて踵落とし

「がつ……」

「不正解でーす。まつたく…… 一つ聞く、彼女に手を出したのはどうれだ？」

「愛子を示しながら問う。男は指を指して一人を示す

「ありがとう。しばらく死んでろ」

鳩尾に蹴りをかまして氣絶させる

「最終勧告だ！ 依頼主と依頼内容その他を言えー。そうすれば俺個人としてはアレ以外なら加減してやる」

愛子に手を出したところを指されすが、返答はない

「仕方ない…… 『貴様らは金縛りにあつ』

そのまま言つた瞬間、チソピラ共の動きは止まつた

「なあつー？」  
「どうなつてんだー？」  
「『彼女から手を放す』」

葉用ちやんを示してチソピラに冷たく言へ。すると男は手を放した

「これで安全だから先に戻つてろ。あと、この上着使え

自分の上着を愛子に渡す

「あ、ありがとう。でも、無茶しちゃ駄目だからね

「おつよーまだ料理作ってやつてないしな。怪我はしない」「つよ。じゃあボクは先に戻つてるねー」

部屋から出てこへ愛子たちを見送つゝ言つ

「明久、気がすんだらあつちにつけ。康太や秀吉がいるが多いに越したことはない」

「わかつた。後は頼んだよ」

手をひきひきわせて送り出す

「次は『お前がこいつを殴る』」

指さしながら言つと、まるで操り人形の様にその通りに動く

「おー、水月。半分よこせ」

「雄一、何をいきなり……ああ

霧島さんのことで追い詰められ氣味だったからストレスたまつたのね

「わかつたよ。相手は動いた方がいい?」

「当たり前だ。だからさつわと糸をどかせ

おつと、気付かれてたか。まあ田を凝らせば見えるしなつまつ、俺は『指鋼糸』でチンピラ達を操つていたわけだ

「じゃあ、あの辺りを解放するぜ」

「くははははーそれにしても丁度良いストレス発散の相手が出来たなー生まれてきたことを後悔させてやるぜええつー！」

「では俺は死の恐怖を深く深く、ビームでも深く植え付けて差し上げよう」

その後犯人たちは生まれたことを後悔しつつも死ぬのは怖いと  
いう地獄を味わったとか……

### Fクラス教室

「すまんな愛弓子、もっちょつと待つてくれ」

あの後、後始末で時間をとられてしまい、すぐに学園長がくるらしい

「ボクは別に明日でも構わないんだよ?でもまあ、待たせてもらひう  
けど……それにしても、学園長と取引してたなんてね」  
「はつはつはつ。誰にでも秘密の一つや一つ、あるものだ」  
『あ、あのババア!僕らに何か隠してたのか…』

明久、確かにその通りだがもう少し言い方つてもんを考えろ

「……やれやれ。わざわざ来てやつたのに随分とご挨拶だねえ、ガ  
キどもが」「  
「来たかババア」「  
「出たな諸悪の根源め!」  
「わざわざ足労いただき、ありがとうございます学園長」

一応依頼人だし、目上だし、敬語は忘れない

「まったく、アンタらも水月を見習つたらどうだい?」

「そんなことは今はいい。話を聞かせろ

「はあ……。アタシの無能を晒すような話だから、できれば伏せておきたかったんだけどね……」

「簡潔に言つと『白金の腕輪』は高得点だと暴走する」

「なるほど。俺達なら暴走しない、という訳か」

「暴走しないような点数の生徒なら他にも居るんだけどね……」

「勝てる見込みが無かった、と？」

「そうさね。だからアンタたちしかいなかつたのさ」

「雄一、これは褒められているんだよね？」

違うと思うぞ明久

「いや、『戦略だけのズルいバカ』だと言われているようなものだ」

「なんだとババア！」

「バカは否定出来んと思うがな」

その通りだな

「ところで水月、情報は集まつたのかい？」

「勿論です。結論を言いますと、やはり竹原のようですね」

「そうかい。じゃあ引き続き証拠でも集めてもらおうじゃないか」

「了解しました。それでは四方八方囮み尽くしてさしあげましょう」

「おい水月、ということは常夏コンビも教頭が？」

「もちろん。ついでに言つなら三回戦後の明久の会つたチンピラも、さつきの『ミミ』どももそうだ」

「ねえ水月、一つ聞いていい？」

「なんだ明久改まつて」

「これってかなりマズい話じゃない？」

「そうだなあ。下手すりやこの学園終わるぜ？それに、次の相手は常夏だ。話し合いで解決は不可能だ」

考え込む明久。何か考えがあるのか？

「学園長、質問です」

「なんかい？」

「腕輪の暴走って総合科目で平均点にいかなければ起こらないんですか？」

なんとなく明久の考えはわかつてきた……

「そうや。一つや二つの科目が高得点でも、その程度なら暴走は起きないよ」

「そうですか。それは良かった」

「明久、どうせ苦戦ぐらいはするだろ」だから、白金の腕輪の披露ではあまり問題ないぞ？」

「そうかもしれないけど……一応、ね」

「そうかい……愛子、すまんがさつきの約束明日でいいか？」

「ボクはいつでも構わないよ？吉井君たちを手伝つてあげて」「ありがとう」

その後、二人に勉強を教えて時を過ごした

## 第八問

「ただいまー」

学園祭一日目の朝、俺は教室に到着した

「水月くん、どうしてただいまなんですか？」

あ、姫路さんも島田さんも来てたのか

「ああ、それはだな。朝早くにここでテストを受けた後に愛子を迎えて行つてたんだよ」

「そ、そなんですか？」

「スゴいよね水月。徹夜明けなのにいつもとまつたく変わらないなんて」

「ま、一日なら何の問題も無い。依頼の場合、下手すれば四、五日徹夜もあるしな」

仕事以外だとあまり徹夜はしないがな

「じゃあ水月、後は頼むぞ。俺達は寝るからな」

「おう。二人の分も働いてやるよ」

その後、明久が島田さんと少し話してから屋上に向かつたようだ

「水月、本当は11時に起きてつて言われたんだけど、少し遅らせてても良い?」

「?なぜ俺に聞く?」

「だってアンタ、二人の分まで働くって」

ああ、そつか。俺に負担がかかるのを考えてか

「別に問題無いぜ。何なら直前まで寝かせておいてもいい。あ、で  
もそれだと頭が冴えないか」

「じゃあ三十分くらい前に起こすから、それまで頑張って  
「りょーかい。では、準備を始めるとしようか」

数時間後

「すまん、もうそろそろ三位決定戦だから抜けていいか？」  
「今アキたちを起こしに行つてもらつてから大丈夫よ  
「頑張つて下さいね水月くん」  
「おひ。頑張つて魅せてやるぜ」

まずはAクラスだな

Aクラス内

「相変わらず客多そうだな」

本格的だつたしなあ。無理もない

「お待たせ！じゃあ行こつか」

「ああ。相手は俺達の試合は見てないんだろ？」

「うん。代表に『お互いに当たるか負けるまで、相手の試合は見な  
いよつにじよつ』って言つておいたし

「そつか。なら行くか

少し前の試合でやつた実験を見られると計画が狂つてたからな

### 特設ステージ

『それでは、三位決定戦を開始したいとおもいます。まず、選手の入場です』

俺達の反対側には霧島さんと木下さんが立つている

「さて、悪いが勝たせてもらひつぜ」

「……負けない」

「雄一」と「テート」がしたいなら優勝する明久に言えばなんとかなるぜ？

「……それは最後」

あくまで自分で用意したいといふことか

『それでは始めてください』

「「「試獣召喚！」「」」

幾何学的な模様の陣から四人の召喚獣が出現する

「先手必勝！」

腕輪で水の鞭を作つて攻撃する。しばらくは避けられたが何とか二人の腕に巻き付けた

「愛子ー…やつちまえー！」

水の鞭の持ち手を愛子に放る

「りょーかい ポメンね代表、優子」

愛子は持ち手を斧で受ける…………腕輪の発動した斧で

バチャイイイ！

鞭を通り、一人の元に電撃が走る

「なつ！？」

「……くつ」

さすがに一撃じゃあ無理か……だが結構なダメージは『えた

『これは凄い！召喚獣同士の能力でのコンビネーションがきまりましたつー』

「まだまだあー！」

点数の大部分を消費して大きな龍をつくる

『龍です！水で出来た龍が現れましたー』

「何よー！それくらい……」

迫る龍を睨む木下さん。何かするつもりなのかもしけんが甘いな

「見た目は龍でも水なんだぜ？形を変えるなんて簡単だ」

そういうて龍を崩す。ただの大津波になつた水に木下さんが戸惑い、のまれる

「えいっ！」

再び轟く電撃の音。ついに木下さんが戦死した

『な、なんと工藤・影隱ペア、反撃さえ許さず一人を撃破つー。』

「さて、あとは代表だけだね」

「いや、もう勝つた」

水のレールを高速移動して斬りつけた

「……私たちの負け？」

「すまんな。手早く終わしちまつて」

「……構わない。これも勝負の結果」

『な、なんと圧倒的な勝利！三位決定戦は工藤・影隱ペアの勝利です！』

さて、これで俺達の大会は終わりだ

「じゃ、俺は店に戻らせてもらつぜ。決勝組や応援組で人数足りないんでな」

「あははっ、大変そうだね。じゃ、頑張つてね！」

「おう！」

～side 愛子～

行つちやつた……学園祭、一緒にまわりたかつたな

「愛子、後夜祭の事だけど、参加する?」

優子がそんなことを聞いてきた。そうだ……後夜祭でも水月とは別になつちやうんだ……

「その様子じゃ不参加ね。Fクラスにでも混ぜてもうえば?」

「そつ……だね。うん。ありがとう優子!」

じゃあ鏡花に聞いてみよう。もちろん水月には内緒で

## 第九問

「いらっしゃいませ！」

先程の三位決定戦以降、客が増えてきている。さつき出ていった明久達が勝てばより一層増えることだろう

「ちょっと手が離せんな……仕方ない。アイツに依頼するか」

ちょっと裏方に行って電話をかける

「おう、ちょっと請け負つてもらいたいことがあるんだが、今大丈夫か？」

『かまわない。何だ』

「教頭を追い詰める事、もしくはウチの中華喫茶の手伝いのじぢらかだ」

『資料は？』

「全て入手済。鏡花のおかげだがな……あと、手段は任せる」

『そうか。報酬は？』

「如月ハイランドのフレオープンフレミングチケット」

明久達と交渉して一枚確保させてもらつたものだ

『わかった。前者で請け負わせてもらおう』

ま、あの一人なら『幸せになる』為の強行手段も大丈夫だろう

『じゃ、頼んだぜ。失敗するなよ？』

『無論だ』ブツツ

あ、切れたか

「さてと、資料を届けなければ……」

鞄以外に持つてきておいた袋からあるものを出す

「コマンド 配達。ターゲット 水明山紫」

『了解。行動を開始します』

明らかな人工音声を話したのはカラスの様なものだ

「やつと完成して、動作確認その他も終わって初実戦がこれとはな

見た目はカラスだが、音声入力で動く偵察用のロボットだ。ちなみに電源は太陽光だ

「やつとこっちに専念出来るな」

アーツなら上手くやるはずだ

（side紫）

「やれやれだ」

「どうしたの？依頼？」

隣に居る詠々が聞いてくる

「やつだ。水戸からなの」

「やうなんだ……」

「どつした詠々？」

迷つてこぬよつた霧囲氣だな

「えつと、あの…………つこつこちやダメ?」

やつぱつとか……

「何が起じぬかわからぬぞ?」

頷く

「怪我じやあ済まんかもしれんぞ?」

また、頷く

「…………本当に、いいんだな?」

静かに、だが力強く頷く

「…………わかつた。一緒に行つ」

「やつたあ」

「今日はそれほど危険でもなさそつだしな」

「えつ? ジやあさつきの質問は?」

「齧し、みたいなものだな。あれで駄目なら来ない方がいい

ホツと胸を撫で下りす詠々。一つ釘でも刺しておぐか

「だからといって油断は禁物だからな。気を引き締めりよ  
「わつかりましたあ！」

……テンションがおかしくなつてないか？

「はあ、少し落ち着け」

十分後

「「めんなさい紫くん」  
「気にするな。もつそろそろ資料を持ってくるだろ？  
「資料？」  
「なんでも、教頭が何か企んでいるらしい」  
「教頭先生が？」  
「ああ。つとあれか？」

カラスが紙束を持って飛んでくる

「これは水月の作か。相変わらずふざけた技術だ」

触つてみると中が固くなつている。しかし外側は柔らかく、あまり熱くもなつていない

「こんなのは作れるんだねえ水月君つて  
「の、わりには理系が駄目なんだがな」

工学は理系の分野だるうが……

「ふむふむ…… アイツもふざけた依頼を回してきたもんだな  
「何で？」

「Jの依頼の失敗は学園の崩壊に繋がる。社会的な意味の崩壊だ」「えつ？ええええええええ！」？」

驚きすぎだ……物理的崩壊でないだけマシな方だぞ

「という訳だ。早く行くぞ

「ま、待つてよ」

あたふたしながら追いついてくる詠々を見て、こんな状況にもかかわらず笑つてしまつた

### 教頭室

「……と、言つわけで貴方のやつたことは全て挙がっています。おとなしく降参して頂きたい」

水月のまとめた資料を淡々と読み上げてから言つた

「それを私がやつたという証拠はあるのかな？」

「会談、この場合は裏取引と言つべきか……の写真があります。詠々

「はい。こちらになります」

詠々が「Pマーク」を教頭に渡す

「なつー？…………Jれでは内容まではわからないだろう？？」

バレバレなのにまだ足搔くか……愚かな

「なら動画をお見せしましょうか？それとも、証言者を呼びましょうか？」

「そちらの用意した証拠では情報が操作された可能性がある。私は認めない」

往生際の悪い奴だ

「諦める。お前の協力者も全員手を引いたぞ」

「そ、そんな馬鹿な！確実に利益のある取引だ！降りる筈が無い！」

「前提が崩れてもか？」

「は？」

「要するに、欠陥は直つてました。つてことですよ教頭先生？」

「どうやら技術のある支援者を雇つたようでな。意味が無ければ皆降りる」

「これは半分嘘らしい。なぜなら、平均点より少し高い… Cクラス程度までなら大丈

夫だが、A・Bクラスだとやはり暴走するらしい

「くつ……」こつらを捕まえろ！」

教頭の声と同時に飛び出す幾人かの影。どうやら用心棒らしい

「詠々、教頭を頼む。やつは武道に疎い筈だ。いざとなつたらフオ

ローする

「わかった。お願ひね」

のんきなものだ。敵は……七人か

「用心棒というより、寄せ集めだな」

よく見るとチンピラばかりで、殺氣も無いに等しい

一人目が正面から来た。もちろん突きを避けて壁まで蹴り飛ばす

二つ四人目は鉄パイプというオーソドックスなチンピラ装備だった。

一本もぎ取り、雜ぎ払う

五、六人目はナイフで斬りかかってきたがパイプで刃を折り、叩き

伏せる

そのとき七人目が……

「銃、か」

リボルバータイプの拳銃をこちらに向けてきた

「仕方がないな」

制服の内ポケットから大振りなナイフを取り出す

「銃にナイフで対抗するつもりかあ？バカにしやがって！」

バンッ

カキンッ

「は？」

「どうした？もう終わりか？」

「ふざけんな！」

バンッ

カキンッ

バンッ

カキンッ

バンッバンッ

カキンッカキンッ

バンッ

カキンッ

「終わりだな」

「な、何で防げるんだよ…？」

「答える筋合」は無い

一撃で倒れるチンピラ

「レッヂも終わったよ~」

言われてそちらを見ると詠々とノノムシ（教頭）が田口はーの

「さて、これで依頼終了だな」

「じゃあまた一緒に回る？」

「ああ。詠々が活躍したから、何か奢つてやるわ」

「やつたあ！じゃあ綿あめがいいな」

その後、学園長に連絡をしてから学園祭へと戻った

## 第十問

『ただいまの時刻をもって、清涼祭の一般公開を終了しました。各生徒は速やかに撤収作業を行つてください』

「お、終わった……」

「さすがに疲れたのう……」

「…………（ノクノク）」

「大丈夫？秀吉君……」

「何だもうへばつたのか？俺はあと一回はいけねば」

「単位がおかしい……」

ふむ、確かに少しばかり疲れたが……

「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだろう？」

「ん？お義父さんが気になるのか？」

「なつ！？べ、べつにそういうわけじゃなくて！」

「明久お前、雄二の言葉が『義理の父』だと思つべからには気になつてるんだな」

「そ、それは……」

「後夜祭の後で話をしに行くと言つておつたのう。結論はその時じやな」

「きっと、大丈夫……」

まあ、Fクラス二人組が優勝し、契約を果たしたし、喫茶店も成功と言える。これなら何とかなるだろ？

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

あ、俺もだ

「ええっ！？ どうして！？」

「どうして、って言われても……恥ずかしいからに決まってるでしょ？」

「すいません。すぐ戻りますので」

「私も……」

鏡花も顔を赤くしている。忙しい時は気にならなかつたんだがつ

「なんじゃ似合つておるのに……」

文物のチャイナ服をばつちり着こなしている状態の秀吉に言われても……ねえ？

「そ、そつかな……？」

「そう言つ秀吉は着替えてこないのか？」

「おお、そうじゃつた。では――」

「させるかつ！せめて二人だけは着替えさせない！」

「なつ！？何をするのじや明久！」

「おい明久。遊んでないで学園長室に行くぞ」

俺も行かなくては……まあ俺は男物だし、そこまで気にしないが

「学園長室じやと？――一人とも学園長に何が用でもあるのか？」

「俺もだ。鏡花は……まあ、好きな様にすればいい」

「じゃあ……行く」

「ならワシもついていって構わんかの？」

「大丈夫だろ。多分」

その後、康太も加わり大人數で学園長室へと向かつた

学園長室

「失礼しまーす」

「邪魔するぞ」

明久達がノックをして、間髪いれずに扉を開く

「失礼します」

「水月以外に敬意を感じられんのじゃが……」

「そうだね……」

秀吉、アイツらには常識は一部通用しないから無駄だ

「依頼完了の報告に来ました」

「竹原の事は聞いたよ。優勝の方は……ね」

賞品その他を授けたのが学園長だからな

「依頼? 何のことじや?」

「ああ、『白金の腕輪』に欠陥があつてな。少しは改善させたが完全じゃない」

「だから、教室の改修と交換条件で僕と雄一がこれをゲットするつていう取引を学園長と」

「待て明久! その話はマズい!」

何を……くつ、油断した!

「………… 盗聴の気配」

「やられたか…」

くわつ…気配からすると常夏だ。アイツらにも教頭の事は伝達したはず……

「あのバカ共！ヤケおこしやがったか！」  
「どういうこと？」

「盗聴されていたんだ。録音された可能性もある  
「失礼します。雄二、明久、先に行く」

全力で廊下を駆ける

↓ side 明久

「水月待つ……って早…！」

「鏡花、奴らの行きそうな場所は分かるか？」

「すぐに事を起こすとは考えづらい。とすると……教室ぐらいしか

……

ピリリリリツ

携帯を耳に当てる

「あ、僕の携帯だ」

『すまん！逃がした！』

「えつ、逃がした？今どこ？」

『昇降口付近だ。外に出たのかも分からん』

『ついでに聞くけど、何で逃げられたの？』

『看板の撤収作業にぶち当たった』

『そつか。じゃあ僕達も探すよ』

『頼む』

電話をきつてポケットこしまつ

「逃げられたみたい」

「そうか。じゃあ一ついに分けるか」

横を見ると鏡花が秀吉とマッチローに常夏コンビの写真を見せてる

「では、ワシとマッチローは外を探そう。鏡花はここで情報を集めて指示をしてほしいのじゃ」

「わかった……」

前髪をあげる鏡花。今はさほど外見に変わりはない

「…………明久」

「ん？ 双眼鏡？」

「…………予備」

普通なら必要ないのでは？

「田標を見つけたら携帯に連絡を入れてくれー。」

「つむー。」

さて、じゃあ僕達は屋内だから……

「明久！まずはこの階の放送室を押さえなさい。それから二年の教室だ！」

「Side水月」

「どこに行つた？」

考えられる場所は大体探した。とすると、今はどこかに隠れている可能性があるな

「飲食店なら厨房、その他の店でも休憩スペースぐらいはあるだろうし……」

そこまでは調べられない

「なら待ち伏せするか。放送なら……放送室か」

「どうか他にあつたかな……あ

「屋上、か」

あそこなら放送機材があるのは今だけで、直点になりやすい

「屋上なら下でも見てれば屋外を探せるしな」

そうと決まれば即移動だ

「秀吉と康太が屋外、明久と雄一が屋内って感じかな？」

「まだ常夏は来ていない

「ん？ 明久達が出ていった？」

「こいつ」とは屋内には見当たらなかつたのか？

ギィイ

「（来た来た）」

テープを出したらその場で壊す  
そう考えて待つていると……

ヒューネン バアアアン

「（は、花火？）」

元を辿ると明久と雄一、それに召喚獣が……

「やれやれ、爆破は良いがテープが生きてたらどうするつもりなん  
だか……ねえ、先輩？」

「「は？」」

明久達からは気付かれない位置に立っているので砲撃は止まない

「さあ、大人しくテープを出して頂けませんか？」

「アイツら、仲間がいるのに止めないぞ！？」

「くっ、そこをどけ！」

「嫌です」

「ひつちに飛んできたな……」

「ほいっと」

すべてを避けながら問う

「テープを渡すなら砲撃を止めさせましょう。どうしますか？」

先の砲撃で機材は全滅。もうここでの放送は無理の筈だ

「教頭も捕まっています。この行為は無意味です」

「…………わかった」

案外素直に渡したな

「念のため、ボディチェックをさせてもらいます」

ビクッとでもいうよに反応した。やはりダミーか  
と、その時、何を間違えたか教頭室に花火が直撃。明久達は鉄人に  
追いかけられている

「申し訳ありませんが、時間切れです。学園長につき出します」

抵抗しだした常夏を縛り上げる

その後、携帯を取り出す

「あ、もしもし学園長でしょうか?」

携帯を肩にはさんで通話しながら屋上からロープを垂らし、片方は柵に結ぶ

『なんだい?』

『盗聴してた馬鹿を捕まえたので人を寄越して下さい』

『あなたはどうするんだい?』

『明久達が鉄人に追われてまして……話をつけてもらえないませんか?』

『いいだろ。じゃあこのまま電話を渡しな』

『了解しました。少々お待ち下さい』

柵を越え、一気に降下……着地

「さてと……鉄人先生……!」

「西村先生だ馬鹿者!」

「あなたにお電話です」

携帯を渡す

「?ただいま代わりました……学園長……?……いや、しかし……  
はい……はい分かりました」

携帯を返してくる鉄人

「貴様ら一人は厳重注意で済ませ、だそつだ」

「ありがとう水月!」

明久、よくは知らんが鉄人の注意だぞ？生易しいものでは無いだろ  
う……

「じゃ、俺は教室の片付けに戻るぜ。つと、秀吉達にも伝えなきゃ  
な」

電話をしながら遠ざかる。後ろで個性的すぎる悲鳴が聞こえたが気  
にしない事にした

## ハルローゲ（前書き）

今回はこれにてラストです！  
次の更新はいつになるのやら……  
あまり早期の更新を期待せず、気長に待つていただけると幸い  
です

「後夜祭が公園つて…………怒られたりしないだらうな？」

聞いた話によると、上位クラスほど後夜祭も豪華な傾向があるらしい

「結局、まだ愛子に料理作つてやつてないんだよな…………」

「ボクは構わないよ？」

「そうか。そりやよかつ…………は？」

気のせいか愛子の声が聞こえた気がした

「えいっ」

後ろから抱きつかれました

「あ、愛子ーー? 何でーー元ーー?」

背中に柔らかい感触が…………つてマズい! 落ち着け俺、落ち着け俺、  
落ち着け俺

「Aクラスの後夜祭つて豪華すぎて、何か近寄りがたい感じだった  
からね」

「そ、そうなのか…………」

「ん? 水月、顔赤いよ?」

「そ、そうか?」

「実技してみたくなっちゃったかな?」

それは笑いながら聞くことでは無い!

「何でもそこには繋げるのはやめろー。」

「むきになるのが怪しいね」

「なつー?」

「あはははは、嘘だよ」

そう言って俺から離れる愛子

ホツヒー鳴つく。心臓に悪いやつとりだな

「やうだ。ボク、お礼を言つてなかつたね」

お礼?何のことだらう?

「あの時助けに来てくれてありがと、水月」

「ああ……でも、あれは俺が巻き込んでしまった訳で……」

「それでも、だよ。助けに来てくれたことが嬉しかったんだから」

「そう言つてもらえると助かるが……」

「はい、お礼」

愛子の言葉を聞き、振り向いたところで頬に当たる柔らかい感触

「あい……」?」

「あはは、いきなりは刺激が強すぎたかな?」

やられたのはもちろんキスである

「あ、ああ……」

「えつと、大丈夫?」

「多分……喉渴いたからジュース取つてくる」

「この場にいるどどつにかなつてしまひやうだ  
ジユースのある位置まで来て一つ取る。周りを見ると…… 明久が姫  
路さんに抱きつかれてる

「つと、島田さん」  
「ん? 何よ、水月」

無言で指をさす

次の瞬間には指をさした方に移動する島田さん。 『このクラスのやつ  
らは変なところでスペックが高過ぎる』がするや

『……ウチが少し目を離したら、その隙に一体何をして……』  
『えー? み、美波! 違うんだ!』「これは別に何も……」  
「……何か、いつも以上に手加減がないな」

歩きながらジユースを一気に飲む

「おつ、あつちには鏡花と秀吉が……ん?」

明らかに幼児化していの…… またかっ!

「酒、か……」

頭が回らなくなってきた……

（side 猫子）

「遅いなあ、水月」

もうそろそろ戻つてもおかしくない

「おっ返しだあ

「わひやつ！？」

えつ、今ボク水月に抱きつかれてる？

「す、  
水月？  
」

「わははははー、じりだあー、」

する  
背中に当たる水月の体がやけに熱い。それに何やら酒の様な匂いも

「水月、酔つてる？」

卷之三

あれ？止まつた？

「えっ？」  
「寂しいよなあ」

何が寂しいんだろう？

「みんないつかは離れていくんだよなあ……」

卷之三

いつまでも一緒に居てくれる人なんていないのかな……」

水月がこんなことを考えてたなんて……なにか辛いことでもあつ

たんだろうか

「 ズズズズ……」

「 ボクでよければいつまでも一緒にいてあげるよ……」

肩に顎をのせて眠る水月に囁く。いつか面と向かって言えることを  
考えながら……

数分後

「 で、どうしよう、この状況……」

その後、秀吉と雄一に助けられたまでは「のままだった」とセ

## 第一問（前書き）

久々の更新！あと、ちょっとした修正やら章を分割してみました  
今回はプール編の最後まで投稿するつもりです（まあ、次の更新は  
また先になりそうですが…）

## 第一問

「週末、プールに入りたくないか？」

「……は？ どういうことだ？」

何を言い出すんだ？ 雄一のやつ

「なに、鉄人から週末にプールを使うのを許可されたからな」

「鉄人の出した条件は？」

「プールの掃除だ」

「プールにくるなら手伝え、といふことか？」

「話が早くて助かる。どうだ？」

確かに最近は暑いから気持ち良さそうではあるが……

「愛子も誘つていいか？」

「ああ。女子は掃除も免除するつもりだ」

そうか。なら安心だ

「じゃあ、行かせてもらおう。……つと、当分は白金の腕輪を持つて来てくれ」

「なぜだ？」

「銅の指輪と召喚獣の腕輪を使つ為だ」

銅の指輪を使えば腕輪の効果も実体化出来るから早く終わるだろ？

「…………なるほど、そう言つことか。いいだろ？持つて行こ？」

「あとは姫路と島田ぐらいだな」

咳きを残して去つていく雄一。霧島さんは誘つたんだらつか……

毎休み（Aクラス教室）

「つて訳なんだが、愛子はどうだ？」

恒例の弁当交換のときこきりだしてみたのだが

「えーと……その日つて部活はなかつたっけかなあ？」

鞄に予定表でもあるのか、中を探つている

「あつた。えーと……部活は無いみたいだね

そうでなくては入れないだらうからな

「じゃあ、一緒に緒をせて貰おうかな（水着どうしよう……）

「オッケー。じゃ、云々とく」

その後はこつも通り他愛ない話をして毎休みが終わった

週末

ビーチやひまつむらがひまつむらだな

「俺達が最後か……悪いな」

「あ、水用。遅かったね」

最後ではあつたが、遅刻はしてないぞ？

「おつし、全員揃つたな。女子は翔子についていってくれ。鍵を渡してある」

雄一についていく俺、明久、康太、秀吉、葉月ちゃん……葉月ちゃん来てたんだ

「こりこり。葉月ちゃんと秀吉は女子更衣室でしょ。霧島さんについていかないとダメだよ」

明久の脳内ではいまだに秀吉が女扱いのようだ……鏡花と付き合いだしてから、大分男として扱われる様になつたんだがな

「えへへ。冗談ですっ」

「最近はマシになつたと思つていたのじゃが……」

明久、康太の二人には永遠に理解されないだろう

「（）は仕方ない。秀吉はプールの便所でも使って着替えろ」「む、仕方ないのう……今だけじやぞ」

名々着替えに行くなかで愛子が振り返つて言った

「覗くなら、バレないようにな」

ブシャアアアア

あ、康太が鼻血を噴き出して倒れた……と思つたらクーラーボックスから輸血用の血液パック（？）を取り出した

「あれ全部輸血用なのか……」

「最初から予防を諦めてるのが男らしこよね」

「そうか？ つと、お前は行かないのか？」

「ピンポイントに二つも殺氣が飛んできてるからね」

だらうな。向こうで雄一も冷や汗かいてるし

姫路さんも大分影響受けてるな

「そういう水月は行かないの？」

「ああ。相手の嫌がるようなことはしない」

「（僕はずいぶん弄られてるよつな……）でも、工藤さんはああ言ってたんだし」

「もし冗談じやなかつたとして、あつらへんのは愛子だけじゃないだらう？」

「じゃあ冗談じやなかつたとして、工藤さん一人だつたら覗くの？」

「…………まあ、俺も男だしな」

「（うわーあんまり想像出来ない）そつか。じゃあ僕達も着替えようか」

——十分後

「ようやく女子のおでましか」

プールサイドには秀吉を除く男子全員が集まっている

そんなんか、一番に現れたのは島田シスター<sup>ズ</sup>だった

「おっ、似合つてゐるじゃ ないか」

葉月ちゃんは典型的な小学生スタイルで島田さんはスポーツタイプのようだ

「ビー<sup>チ</sup>バー<sup>ー</sup>の選手みたい。 どちらも言つべきか……島田さんはどちらかつて言うとスレンダーだからそんな感じのが似合つんだろうな。 なあ明久」

明久が地雷を踏まないよう<sup>に</sup>バスをだしてやる

「あ、ありがと<sup>う</sup>。 …… どうかなアキ？」

「そうだね。 手も足も胸もバストもほつそりとしていて、凄く綺麗だと脚の親指が踏み抜かれたように痛い<sup>い</sup>い<sup>い</sup>つ！」

バカが。俺のバスを華麗にスルーしやがつて。島田さんがご立腹だぞ

「やつほー。 お待たせ！」

「おう、愛子…… つてそれ、部活用か？」

まるで水泳選手の着て<sup>いる</sup>ような、いわゆる競泳用の水着だつた

「実は去年までの水着を捨てちやつてたのを今朝思い出してね。 ホントならもつと普通のやつが良かつたんだけど……」

「いいんじやないか？ 憎<sup>にく</sup>似合つてると<sup>う</sup>思<sup>う</sup>ぞ」

「ありがと（でもやつぱり普通の水着も水月に見て欲しかつたな……）」

何か物足りなさそうだな

「まあ、」の面子なら夏休みにも一回くらいはプールかどこか行くだろ。そんときまでに用意しとけばいいんじゃないかな?」「それもそうだね。そういう時は誘つてね」

「おひ。……いつの間にか全員揃つてるみたいだな」

秀吉はなぜか女物の水着だが……おそらく店員に女子と間違われたんだろう。可哀想に……

## 第一問

『お？なんだ？ いきなり足が……おわあつー？ だ、誰だ！？ 誰が俺を水中に（ガボガボガボ）』

『……雄一。早く溺れて』

『ふはあつ！ しょ、翔子！？ 何をトチ狂つて……！ （ガボガボガボ）』

……あっちは何をやつてるんだ？

「楽しそうだな雄一のやつ。なあ愛、いおおーー？」

俺もか？ 俺もなのか！？

「…………ふはあつ！ 愛子！ 何を……つて逃げてるしー。」

泳ぎ去る愛子を捉える。よし、まだ十分追いつける距離だ

足を掴んで軽く沈めてやつた

「待あてえええ！」  
「きやつ！」

「どうだ愛子！ あつちりお返ししてやつたぜー！」

『ほり葉月ちゃん、あれくらいがちょうどいいんだよ。たすかに溺れさせたら駄目だからね』

『はいですっ！ 今度からそうします』

明久の差し金か……上等じゃないか。後悔させてやる

「明久」

「な、何？ 水月。工藤さんと仲良く遊んでたんじゃないの？」

「少し殺る」とが出来てな」

「誤変換……だよね？」

「いや。あつてるぞ」

「あはははは……わらわ」

必死に逃走（逃泳？）する明久。しかし、やはつさつきの歎子ほど  
じゃない

「沈めええつ！」

「ちょつ、待つ（ガボガボガボ）」

結果は、少しやりすぎて明久が気絶してしまったが上々だった

「何だ、水月じゃないか」

プールの周りを囲うフェンスの外側から声がかかる。この声は

「紫、と四季さんか。何でここに？」

「生徒会の仕事だ。学力強化合宿の為の打ち合わせがあつたからな  
「生徒会？ 紫つて生徒会に入ってるのか？」

「一応副会長だ」

「私は会計でーす」

そうだったのか……

「ところで、水用にそなぜ」「って？」

「ああ、実は

「

「なるほど。さすがFクラスと言つたところか

「まあな。一人もどうだ？って、水着持つてのはずないか……」

「持つてますよー

……なぜ？

「本当に紫痴とプールでも行こうって話だつたんだけど、いつもの

ほうが楽しそう

「いいのか、紫？」

肩を竦める紫。おんじらくは『詠々が良いなら』とか考へているんだ  
わ。熱々ですねえ

「じゃ、適当に着替えて入つてくれればいいよ」

「つよーかいしました。行く？』

「ああ

更衣室入口のある方に歩いていく一人を水に浸かりながら見送った

## 第二問

「で、何なんだこの状況?」

お、紫か。早かつたな

「何か賭けをしているようだぜ。(び)うせ明久関連だらうなあ」「よほど重要な事のようだな」

そう考へてもおかしくない。なぜなら迫力が凄まじいからだ

「お待たせー。……何、あれ?」

「女じうしの熱い戦いらしいぜ」

「そうなんだ。…あ、今サーブが垂直に落ちたよー。」

島田わんのペアの……清水さんだつたかが打つたらしい。

『お姉さま!めんなさい! 美春は嘘をついていました!』

『いいのよ美春! これからも友達でいましょうねー』

そんな会話と共にヒシと抱き合つ一人。が、なにやら片方だけ異様に黒い笑みを浮かべている

『うつふつふ。これぞまさしく千載一遇のチャンスですわ。こうして近づけばお姉さまの胸の谷間へと思つ存分……うつふつふ。うつふつふつふつふつふ!…』

『ちよつと美春! 離しなさいー。』

「…………」「…………」「…………」

向こうで一人ほど鼻血を噴き出して倒れた。アイツら耐性低すぎないか？

その後、ボールが弾けどぶというアクシデントに見舞われ、勝負は流れとなつた

「だいぶ遊んだせいか、小腹が空いたな」

「あ、それならボクマフィンを作ってきたんだ。何人来るか分からなかつたから12個なんだけど……」

「12個……ダースか、当初の人数だと足りていった訳だ。まあ、ここまで増えるとは俺も思わなかつた

「あ、あの、私も作つて来たんですけど……」

「そりなんだ。じゃあ皆にあたりそうだね」

「失敗しちゃつて、一つだけですけど」

「お、ならジャストじゃないか」

『第一回つ！』（雄一の声）

『最速王者決定戦つ！』（明久の声）

『ガチンコ、スピード対決 つ！』（一人の声）

『『イエーツ！』』（康太、秀吉の合いの手）

みんな必死過ぎないか？……俺は未だに食つた事がないから分からぬのだが

「（つてか、俺らが奪い合う意味あるのか？）」

「（何を言つてゐるんだ水月！　あんなものを女子に食べさせる訳にはいかないよ！）」

「ルールは簡単だ。このプールを往復して戻つてきた順に1位2位

…といつ単純な勝負だ

雄一によるルール説明。しかしなんとも穴だらけなルールである

「（まさかとは思つが、妨害するつもりか？）」

「（わすがにバレたか。なら殺るしかないな、明久と共に）」

それは『明久も殺る』なのか『明久と協力して俺を殺る』なのか、教えて欲しいところだ

「1位から順にどちらが食べたいか選ぶ。それで異存は無いな？」

「「「おつー」」」

「……ま、いっか」

（side紫）

「どういづ」と……？」

「多分、姫路さんと工藤さんの作つてきたお菓子のどしどにになるかを決めるんじやないかな？」

鏡花と詠々の会話を何とはなしに聞く。……俺には生命の危機に直面し、生き残りをかけた戦いの幕開けにしか見えない

「紫くんは参加しないの？」

「あのテンションにはついていけない」

「そうかも……（実は面白がつてゐるでしょ？）」

「（まあな。Fクラスの連中は見て飽きないしな）」

鏡花は俺が『実は面白い事好き』だと知つてゐる。まあ、幼馴染み

だから無理もない

「じゃあ誰が1位だと思つべ？」

「「水月」だらうな」

詠々の質問に、一人の返答が挿つ

「あのルールだと穴が多くある。アイツならその穴を見つけるで、どうなるの？」

「……そこは見てのお楽しみ、だな」

（side 明久）

「それじゃ、ボクが判定してあげるよ」

「タッチの差でもきちんと頼むぞ」

「どういふこと？」

「（水月を特別扱いするな、と言つことだ）」

「（なつ！？　べ、別にそんなつもりは……）」

雄一が工藤さんをからかつてゐるようだ。わが親友ながら何て性格の悪いやつだ

「位置について　よーい、スタート！」

「「くたばれええつ……！」」

やはり雄一も同じ事を考えていたようだ。蹴りの向かう先は……僕らに挟まれた位置の水月だ

「甘いな。雄一、明久」

そう言つた水月の居場所は 水面上ーー?

「ルールに穴を作りすぎたな！ あのルールならこれもアリだろーー！」

言いながら折り返す水月は、水面を走つていた

「そんな『テタラメ人間の存在を誰が考慮するつてんだ！』

「仕方ない。ゴールだけは妨害してやるーー！」

「雄一と共に飛び込む。もちろん水月のいるコースだ

「俺なんかに構つてていいのか？ 康太も秀吉ももつ折り返しだぞ」「くそつ！ 明久は秀吉を！ 俺はムツツリーーーを止めるーー！」

「わかつた！」

↓ side 水月～

「まったく、往生際の悪いやつらだ。一度止めても自分がゴールできなきゃ意味無いだろーー！」

1位でゴールしたのち、プールを見ながら呟いた。捕まえて脱落でもさせれる気か？

「水月、あれってありなの？」

「あれ、つてのは今あそこで起つている事か？」

「違う違う。ボクが聞きたいのは水月のやつたこと」

「ああ……ま、いいんじやないか？」

「簡単だねえ。ところで、水月はどっちを選ぶの？」

「うーん……やっぱり愛子の、かな。愛子の作った菓子つて食つた

「ひと無いし」

姫路さんの手前、即答も問題かと思い少し悩んだフリをする

「あ、何か大変な事になつてゐるー。」

言われてプールを見る

水着の上が無い秀吉、鼻血を噴き出す康太。そして、瞬く間に広がりゆく血、血、血、血。

脳裏に浮かび上がる記憶

それは普通の登校風景……のはずが一瞬で真っ赤に染まる。そして俺は

「『つわああああああー。』」

絶叫した

（ Side 番子 ）

プールを見たまま水月が硬直してしまった。

「どうしたの？ 水げ『つわああああああー。』す、水月！？ 大丈夫！？」

皆が注目するなか（ムツツリー＝君は救出済み）、水月の前に行き、肩を搖さぶる

よく見ると田が虚ろで、おそらく何も見てはいない

「あ、あああ……」

「愛子、離れて！ 紫は水月押さえて！」

鏡花の声に咄嗟に後ろに下がる。と、ほぼ同時に水月が暴れだした

「世話のかかるやつだ、な！」

水明山君が水月の首を叩くと糸が切れたように倒れた

「　　」

皆、無言で水月を担ぐ水明山君を見ていた

「……鏡花、説明、してもらつてもいいか？」

「……雄一」

坂本君が鏡花に質問して、代表が止めようとしている。でも、本当は知りたいのだろう。あまり力が入っていない

「…………中学校の頃に、トラウマができちゃって…………」

「血にトラウマができたのか？」

「ある程度なら大丈夫。でも、大量になると…………」

「そうか……とりあえず、ムツツリーは救急車だとして、水月はどうする？」

「今まで通りなら大丈夫…………」

「そうか。じゃあ島田と姫路は救急車を待つてくれ。紫は水月を保健室に。俺達は……仕方ない、鉄人に報告だ」

「……愛子も保健室に。顔色が悪い」

代表たちが支持を的確に出す。ボクは反論できずに詠々ちやんに連れられて保健室に向かう

第二問（後書き）

ふざけすぎた感じがする水泳対決…（もはや泳いでないし）  
ちなみに水月は鋼糸で足場を作つてその上を走つたという設定です

#### 第四問（前書き）

本日の更新はこれにて終了です  
次回はいつかな～？ 夏休み中に一回ぐらいこは更新すると思います  
が：

まあ、次回のこととはさておきプール完結編がいつぞや！

#### 第四問

「…………」とは？

見た記憶の無い天井。まわりにかかつたカーテン  
…………カーテンとベッドってことは保健室か？

「あ、水月。起きた？」

「愛子か。俺はどうしてここに？」

愛子がカーテンを通り、ベッドの横のパイプ椅子に座る

「プールが血で赤くなつて、それを見て暴れだしたんだけど、水明  
山君が気絶させてここまで運んだの」

思い出した……あの時の事を思い出して、暴れだしたのか

「面倒かけて悪かつたな。皆は？」

「みんな帰つたよ。怪我人もいないし、プール掃除もあれだと本格  
的にやらないと駄目だつてことで業者に頼むらしいよ」

「そつか……」

「…………」

「ねえ水月、聞いてもいい？」

「…………」

「何が、あつたのか」

「…………俺が中学一年の時の話だ」

「

あの日、俺は当時の親しい友達たちと学校に向かって歩いていた  
クラスでの事、その日の授業の事…そのほかにもさまざまな事を話  
していた

そんないつもの日常が、唐突に崩れ去った

ヰヰイイイイ！！

車のブレーキ音が後ろから聞こえ、俺はとっさに安全地帯までバツクステップした

そう『俺だけ』が

目の前でトラックと壆に挟まれて押し潰されていく友人たち。その様はひどくゆつくりに見えて、とても現実味がなくて…でも、どうしようもないくらい現実だった

れてきて地面を赤く染めていく  
そんな中、気付いてしまった。

友人の顔がこちらを向いているのを……

その顔も半分ほども潰れかけていたがそれでも「ちりをしつかり見  
ている

生氣の抜けた目になりながらずつとじつちを見ている。その表情はよくわからない

それでも、自分だけ逃れてしまつたことを責めているよつて感じで、気付くと俺は走り出していた。けれど

逃げ出しても『あの顔』が頭から離れない…

がむしゃらに走っていても『あの顔』だけは消えてくれない…家に逃げ帰り、布団にもぐりこんでも『あの顔』は追いかけてくる…やつとのことで眠つても、夢の中で『あの顔』が四方八方から迫つてくる…

それからといふもの、俺は『血が広範囲に広がっていく』と『に恐怖するよつになつた。

あの日あの時の友人を重ねてしまい、耳元で責められているよつて感じるよつになつた…

「 　　といふことだ…」  
「 そう、 だつたんだ…」

夕日が差し込み、オレンジ色に染まつた保健室が沈黙に包まれる数分の後、意を決した様子で愛子が話しかけてきた

「 でも、 今の水月なら大丈夫なんぢやない?」  
「 わからぬ…確かにあの時から進歩はしてるけど…」

「文化祭のときだつてボクを助けてくれたじゃない」「いや、あの時は命の危険とかそんなんじゃ

「いや、あの時は命の危険とかそんなんじゃ

「それなら、なおさらしつかりしないと。トライアのせいでも誰かを守れませんでした、とかいつたらその友達もかわいそうじじゃない?」

その言葉に驚いて俺は愛子を凝視する

愛子は俺の手を握つて真正面から俺を見据える

「忘れられるのは嫌だつけど、自分のせいでも水月が苦しむのはもつと嫌なんじやないかな?」「…………ははっ。そうかもな

一度区切り、深呼吸して

愛子を抱き寄せた

「ふえー?」

「ありがとう愛子。いくらか吹つ切れた気がするよ

「ふふつ。それはよかつた」

愛子も俺の背中に腕を回して、しばらくの間一人でそうしていた。時間としては…短くはなかつたとだけ言っておこう。その後、一人して赤面。帰るとき気まずかったのは言つまでもないことだらう

#### 第四問（後書き）

いかがだったでしょうか？

書き始めた当初は暗い過去なんか持つていらない、普通（ではないだ  
ろうが）な高校生の設定だったんですけどね：

こんな感じの設定を付け加えようと思ったのは一巻の内容を書き終  
わつたあたりでした。こういった設定は人によって好き嫌いが出る  
んでしょうが、楽しんでいただけると幸いです

## 第一問（前書き）

あれ……夏休み中に一回更新するつもりみたいに書いてたんだけど  
なあ……  
まあ、作者は大学生なためまだ休みなのですけどね……  
とりあえず今回は如月ハイランド編の終わりまでです。では、どうぞ

## 第一問

とある土曜日、こつもの様に惰眠を貪つていると、携帯の着信に起  
こされた

「ただいま電話にでられません。御用の方はピーとこつ発信音の後  
にメッセージを残すな」

『残させりよ！』

「おっ、その声とシシコリは雄一か」

『声とシシコリで判断するな。と、いうか携帯の表示を見ろ』

「は？ 非通知だったぜ？」

『ひとつスマン。さつき変えてそのままだつたか』

非通知でかけるよつた用事でもあつたんだろうか？

「で、用件は？」

『依頼がしたい』

ほつ……

「では、依頼内容を」

『今日、翔子と如月ハイランドに行くことになつたんだが……』

今日はプレオープンだろ？ とすると……

『プレミアムチケットで行くことになつてな、あくまで普通程度の  
特典なら良いが……』

「行き過ぎた特典は妨害しない、と？」

しかし意外だ。あの雄一が普通程度なら良いとくるか……

『そうだ。あと、明久達が何かしてきたらそれも』

『……面白い。どうせ暇だったし、無料でやってやるよ』

『いいのか？』

『あえて言うなら、報酬はその面白さだな』

『真面目にやるんだろうな？』

『その辺は手抜きしないさ。わが社の名にかけて』

『ううか。じゃ、たのんだぞ』

携帯をしまい、準備を始める

「おーい鏡花」

リビングに居た鏡花に声をかけてみる

「何？」

「今日暇か？」

「秀吉君に呼ばれてる……吉井君が手伝つてほしいって」

行動が早いな明久。だが甘い

「依頼だ。雄一達へのちょっかいを防ぐやつ」

「えつ、じゃあ……」

「明久達の事も含めてな。秀吉を『あら側にするのもアリだ

「……じゃあ、それで」

そう言つと、少し離れて電話をかける

『秀吉君？あの、実は』

様子を見る限り、大丈夫そうだ  
その後、秀吉と会流して如月ハイランドに向かつた

如月ハイランド

従業員の服に着替えて作戦の開始を待つ

『ターゲット、入場ゲートに到着』

襟につけた小型無線機から鏡花の報告を聞く

「了解。作戦を開始する」

と、一步先に明久が行つた

「すまん鏡花、回避コード001頼む」

『了解』

場内に放送が響く

『従業員の吉井明久さん、ご家族がおいでです。至急、控えまで来てください』

さあ、どう出る……

『そんな馬鹿な！』

『『アキくん……』』

『ね、姉さん！？』

実は電話を放送のマイクと繋いだだけなんだがな

『『早く来ないと』アキくんのあんなことやこんなことを喋つてしま  
いますよ？』』

『なつ！？…………ちょっと失礼』

カメラを持ったまま走り去る明久。いやあ、まさか前に海外の仕事  
で会った玲さんが明久の姉とはね…………数日前に聞いてみていて良か  
つた

「予備のカメラをお持ちしました」

変装はしているが雄一は気が付いた様だ

「あちらに撮影にいい場所があります。そちらで撮影いたしましょ  
う」

雄一と霧島さんをそちらに向かわせる

「（誰だ貴様は）」

工セ外国人が聞いてくる

「（貴方より上の立場の者です。確認してみます？）」

懐から身分証（偽装）を出す

「（や、それは……失礼しました）」

「（いえいえ。この一人は私が担当します）」  
「（わかりました。失礼します）」

あの工セ外国人、簡単に引き下がつたな

「（秀吉、康太がその辺にいるはずだ）」  
『（ア解じや）』

二人のもとに向かう

「さて、ではそのイスに並んでお座りください」

隣り合つたイスの間隔はほぼゼロだ

「…………雄一」  
「…………わかつた」

長い沈黙の末にしぶしぶ座る雄一

「じゃあ撮りまーす」

カシャッ

「…………はい、オッケーです。今なら加工が選べますが、……」

サンプルの写真を見せる  
？私達、結婚します  
？私達、凄く幸せです

？無加工

「一人一種類ずつお選びください」

「……？」

「？だな」

「かしこまりました。加工したうえで、後程お渡しします」

『ああっ！』『真撮影してる！アタシらも撮つてもらおーよー。』

『オレたちの結婚の記念に、か？ そうだな。おい係員。オレたちも

『写つてやんよ』

……なんとも不快な声と態度だな

「それでは、当園をお楽しみ下さい」

雄一と霧島さんを遠ざけた。これで大丈夫だろう

『おいつ！ 無視してんじゃねえよ！』

『申し訳ありません。お客様にはきちんと個別に対応せよ、と言わ  
れています……』

『じゃいいよ！ さつさと撮れや！』

『その前に、これはフレミアムチケット限定ですのでチケットを拝  
見させていただきます』

『ああっ！？ いいじゃねーか！ オレたちやオキヤクサマだぞコル  
アー！』

うつさいなあ。どうか行けよ

「ルールも守れない輩はお客様ではございません。チケットを見せ  
ますか？ それとも諦めますか？」

『けつ！ サイアクな気分だぜ！ おい、行こ！』

『まったく、何て対応なんだろうねリュータ

そんなことを言つても負け犬の遠吠えにしか聞こえないのだが……

：まあ、いいか

## 第一問（後書き）

声とシシ「//」で判断するといつたり、化物語の神原さんですね  
いつかやねんと思っていたので使ってみました

## 第二問

あれから時間は過ぎて、今は毎週である

「お密様、特典のお食事の用意ができました」

あくまで口譲り崩れないよう立派をかたる

「そうが、行くぞ翔子！」

- 1 -

？  
沈黙が長くなかったか？

翔子と云ひた?

「？」

「…………雄一。急がないとばぐれる」

१४५

雄二も何か気が付いたようだ。…………もしかして、弁当でも作つてきたのか？

だとしたら失敗したな……この流れじゃあ戻せない

ପାତ୍ରଦିକ୍

レストラン……と、言うよりクイズ会場に到着した

「それでは、ここからは彼についていって下さい」と

ボーイ（秀吉）を示しながら囁つ

「……秀吉。ボーイの真似事か？」

「い、え、真似事ではなく本物のボーイです（安心せい。ワシは味

方じや）」

「（どうか……）」

「それでは、」  
「あ、ああ……」

秀吉の役者つぶつに若千弓を弾みの雄一。まだ半信半疑なのかもな  
「お姫様は未成年とのことで、」  
「用意をせしと頂きました」

ノンアルコールのシャンパンを注いでいる

数十分後

『皆様、本日は如月ハイラングのプレオープンにご参加頂き、誠に  
ありがとうございます!』

これ、俺がやつてます

『なんとプレミアムチケットをお持ちのペアがいらっしゃるの  
とで、特別イベントを『』用意いたしました』

雄一がむせているのが田にはいる。このイベントは霧島さんがあり  
たそだから残したのだ

『題して『如月ハイラングウェーブティング体験』プレゼントクイズ!』

わつかない「どうしたの？」だと、こういった視線を感じるのだが……まあ、氣のせいだろ

『五問正解で最高級ウハ「トライングプラン」の体験、不正解ならその場で終了です！ わあ、お一方どうぞ！ いらっしゃらへ』

素直に歩き出す霧島をさとしがしぶしぶ歩く雄一。どうせ間違えるつむりなのだから

『では、第一問一』

用意された問題を読み上げる

『坂本雄一さんと翔子さんの結婚記念日は何月何日ですか？』

雄一、わから殺気が凄いんだが……

ピンポン

『……毎日が記念日』

「やめてくれ翔子！ 恥ずかしさのあまり死んでしまうやうだ」  
『正解つ！ 夫婦漫才のようなやうとりでオマケして一問分とします』

「なんだつてー？」

雄一、お前の殺氣は底なしなのか？

『では第二問、お一人の出でこはせりじょつか?』

流れのよつた動作で雄一の田を潰す霧島さん

「ふむおおおつー? 田が、田があつー。」

憐れ雄一。せめて安らかに……

「……小学校」

『正解です! 出でこのは自分で話したいところ♪コアな翔子さんにはさらに一問分オマケです!』

「無茶苦茶だー。」

くだらない出来レースの時間を縮めるためだ

『ちよつとおかしくない? アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんな『一』『一』セーだけがトクベツ扱いなワケ?』

なにやら五度蠅こ密が紛れ込んでいたよつで、ステージまで出てきた

「お密様、ただいまイベントの最中ですの!」不満な点がぞこましたら係員にお申し付け下わー』

『あつー? グダグダとつるセーんだよ! オレたちやオキヤクサマだぞコルアー。』

「だから、せつきも言つたがルールを

「じゃあ、いつこのせじうだ?』

雄一? 何をする気だ

「お前らが最後の問題を出す。で、正解したら俺達、不正解ならお前らが体験をする。といつのは」

『いいだろ？！　じゃあ、問題だ』

空気が張りつめ、周囲も静まり返る

『ヨーロッパの首都はどーだか答えろつー。』

ヨーロッパ…コーサラシア大陸にある六大陸の一つ。断じて国ではない

「…………えつと、司会者としてはマズいことかもしれませんが、答えをお教え頂けませんか？」

『どうやら答えられないようだな。キャンベラだろ？が』

キャンベラ…オーストラリアの首都。断じてコーサラシア大陸にはない

『坂本雄一さん、霧島翔子さん、おめでとうございます。準備がござりますので、スタッフについてこいつて下さー』

秀吉と鏡花がそれぞれ雄一と霧島さんを連れて退場する

『おい待てよ！　あいつら答えられなかつただろ！？　オレたちの勝ちじやねえかコルア！』

『マジありえなくない！？　この司会バカなんじゃないの！？』

彼女も正じいと想つてゐあたり、救いようがないな

「うつせえなあ。ヨーロッパはそもそも国じゃないし、キャンベラ  
はオーストラリアの首都だ」

『なにバカなこと言ってんだこいつ?』

『ホントバカじゃないのこの国会』

お前らにバカと言われるくらいなら明久に言われる方がマシだ

「俺がいま言つたのは常識であり一般教養だ。オーストラリアの首  
都が言えないだけならまだいい。だがヨーロッパが国だというのは  
いくらなんでも……バカだ。なんなら携帯でも使って調べてみるん  
だな」

その後彼らは調べたらしく、おとなしくなった

## 第二問

「で、何のつもりだ水月？」

やべえ。雄一の後ろに鬼が見える……

「何のつもりも何も、一人に楽しんで欲しいだけさ。まあ、搾をする様なものでも危険なものでも無い。霧島さんの為に付き合つてやんな」

実は「これも危険だったんだが、そこは無理矢理ねじ伏せた

「はあ……」

「んで、じゅうらが我らの血漫のメイク担当です」

「秀吉……」

「先に言つておいた。手加減は出来んぞい」

「じゅうら、衣装になります」

サマーと齋やめる雄一。その後、激しい抵抗の末に着替えが終了した

特別会場

「s.i.d.e 雄一」

『 皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎え下さい。』

「どうやら同衾は水月らしいな。うそと終わることを祈つておくか

「何つー?」

何なんだこの設備は…………やはり逃げるが叶か?

『それでは新郎のプロフィールの紹介を 省略します』

これでいいのか如月ハイランド?

『…………』  
『？』  
『！』  
『…………』

何やら最前列で小声で話しあっているヤツがいる。しかもよく見るとさつきのバカどもじゃないか

『………… それでは、いよいよ新婦の『』登場です』

ライトが消え、スモークが立ち込める。このあたりの演出はさすがだな

『本イベントの主役、霧島翔子さんです!』

一条の閃光。後に左右からも光が降り注ぐ

『………… 綺麗』

そんなことをいったのは誰だったのだろう。俺は言葉も出せずに固まっていた

白くしわ一つ無いドレス

薄く塗られた口紅

引き立つ白い肌

胸元で不安げに揺れるブーケ

誰だ？」の少女は……

「翔子、か……？」

「……うん」

まるで初めて会ったような、新鮮な感覚が体を駆け巡る

「……どう……？ 私、お嫁さんに、見えるかな……？」

「ああ、大丈夫だ」

苦し紛れに何か言つてやうつとも思つたが、この場ではやめておこう

「……雄一……」

動きを止め、小さな声で俺を呼ぶ

「お、おこ。翔子……？」

何かマズいこと言つてしまつたか！？

「……嬉しい……」

顔を俯かせて、かすかに震えだす。これはまるで

『ビ、ビウしたのじょつか？ 花嫁が泣いてるよつて見えます  
が……？』

静かに涙を流している翔子を見る。しかし涙の理由は分からぬ

「お、おー。ビウした……？」

観客の小さなざわめきが聞こえる

「……ずっと……夢だったから……」

涙で掠れた声。いまだに表情はつかがえない

『夢、ですか？』

「……小さな頃からずっと……夢だった……。私と雄一、二人で結婚式を挙げること……。私が雄一のお嫁さんになること……。私一人だけじゃ、絶対に叶わない、小さな頃からの私の夢……」

なぜこんな俺のことをここまで想つてくれるのだろうか

「……だから……本当に嬉しい……。他の誰でもなく、雄一と一緒にひりしてござられることが……」

「……間違つてはいけない、俺はアイツの間違いを正すんだ。  
やつ思つたが、なかなか口が動かない

『翔子。俺は……』

『あーあ、つまんなーい！』

突然の声に口が止まる。それどころか、思考能力まで少しとんだ。

耳に入るのはアイツをバカにするような低レベルな言葉

『んだとテメエらつ！ もういつぺん言つてみやがれ！』

『あ、明久君！ 落ち着いてっ！ ステージが台無しになっちゃいます！』

明久に姫路、か……

『霧島さん！？ 皆様、花嫁さんを探してください！？』

「アイツ、いつの間に……まあ、いつかバタバタと走り回る周りの連中をよそに外へ向かう。あの二人組はもういなかつた

「坂本様」

「何だ水月、探すのはバスだぞ。便所にも行きたいしな」

「いえ、写真のほうが出来上がりましたので。あと、御手洗いはそちらを進んだところにござります」

水月の指した方向は、看板とは真逆。気付かれたか

「これが写真です。どうぞ」

写真たてに入つた写真が二つ、片方は加工の施されたものだ。が……

「……ずいぶん綺麗に撮れてるな  
「光榮です」

俺の頼んだ無加工の写真は落ち着いた色の写真たてに入つていた

「後片付けなどは『チラ』でさせいただきますので、この後はビツ  
ぞご自由に」

「そうかい。じゃあ便所だけ行って帰らせてもららうかな」

「それでしたらお帰りの直前にでも、私をお呼び下さい。霧島様の  
お荷物をお渡しします」

「アーッの荷物？……ああ、あのやけに大きなカバンか

「わかつた。じゃあ後で行く」

「準備体操は……必要なさそうだな

『  
？  
！  
？』

「どうやら自分が想つていた以上にキてるらしく、奴らの声がノイズ  
にしか聞こえない

「なあ、アンタら」

『  
？  
？  
？  
？  
？  
？』

やはり理解出来ない。が、威嚇しているのはわかる

「いや、大した用じやないんだが」

上着を脱ぎ、タイを緩める

「 ちょっとそこまでツリあ貸せ」

#### 第四回（前書き）

本日、とこりか今回はこれにて終了！  
次回はいつになるやう……

## 第四問

「どうした？ ずいぶんお疲れの『』様子だな雄一

週明け、しかも朝から机に突っ伏している雄一に声をかける

「ああ……」

「一体何があつたのさ？」

「明久か……これをやるから俺に構うな」

雄一が渡したのは何かのチケットのよつだ

「これって……今話題の恋愛映画のペアチケット？」

「そうだ。『気になる相手』でもいるなら一緒に行くといい

雄一のやつ、しつかり明久に復讐してやがるな。明久は姫路さんと島田さんに詰め寄られているし

「で、何があつた？」

「……色々とな

曰く、霧島さんと一応付き合つことになつたり、その霧島さんがあの体験イベントの結果、ことあるごとに結婚のことを話題に出すようになつたとか。

「一応？」

「ああ。まあ、悪い気はしないし、嫌になつたらすぐ別れたらいいつてことでな。だが……」

「だが？」

「早速問題が発生した」

「ああ、わかつたの結婚話はどのことだらうな

「あのバカ、いきなり婚姻届けを取り出しあがつたんだ  
「は、はははつ……」

すまん。まさかセミまで影響があるとは……

「んで、逃げ回って逃げ回って、やつと今に至る。って説だ」

「……雄一」  
「何だ……つて、翔子！？ なぜセミに元へ？」  
「……雄一」  
「……セミにサイン」  
「人の話を聞けよ！」

夫婦喧嘩が始まつたようだ。ひとまず退散だな

「夫婦じゃない！ それに、見てるくじいなら助ける……」  
「有料です」  
「……ああもうー。それでいいから助けるー。」

その後霧島さんには雄一がまだ結婚出来ないことを言つて時間を稼いだ。

……まさか「……わかつてゐる」とくるとは思わなかつたがな。どんだけ用意周到なんだよ

#### 第四問（後書き）

さて、如月ハイランド編いかがだつたでしょつか？

しかし、この作品の如月ハイランド編には第一部が存在する！！

と、言つことで秀吉と鏡花、水月と愛子の絡みが読みたい方、もうしばらくお待ちください。第一部ではその四人をメインに進行いたしますので……

## 第一問（前書き）

次回予告的な感じで、これだけ投下!  
続きは……今書いてます故、しばらくお待ちください

## 第一問

土曜日の夕方、この日は雄一たちの為に尽力したわけで俺、鏡花、秀吉は少しの疲労感を滲ませていた

「しかし、今日一日で園内を走り回った気がするのじゃが、どうせなら遊びに来てみたいものじゃのう」

「確かに……」

「でも一般公開が始まつたら今日みたいにすこいではないと思づか?」

「それもそうなのじゃが…今日は見ているだけじゃつたし」

「そんなお一人に嬉しいプレゼントがあるんだが、欲しいかい?」

取り出したのはこのプレオーブンペアチケット。一枚を重ならないように挟んで二人の顔の前に持つていく。一人は一瞬意味が理解出来なかつたのか顔を見合せると、秀吉が問い合わせてくる

「なぜ一枚あるのじゃ? 確かおぬしらが勝ち取つたのは一枚じゃつたはずじゃが」

「ちよ~つと譲つ受けただけだよ。頭の弱い先輩から、な」

「それは窃盗……」

「何も盗んできたわけじゃないぞ? 花火が降り注ぐ中で頼んでみただけだ」

「それは罪状が窃盗から脅迫に変わるだけだと愚のじゃが…」

「常夏からの迷惑料つて考えとけばいいんだよ。どうする? 要らないなら換金しちまうけど」

「そうこういとなら、頂こうつかのう。鏡花、明日の予定は空いておるか?」

「うん……」

秀吉にチケットを渡すと、二人が明日の集合時間など（「ホール」）を話しかけたので数歩下がった場所をついて行く。俺の方はといふと、恒例となつてゐる弁当交換の日に愛子と予定を立てており、明日行くことになつてゐる。もし雄一たちも明日だったら手伝いはしていなかつただろうな……。図らずも下見が出来て良かったと思つておいつ

「そういえば、水月はどうするのじゃ？」

「俺？　俺は明日愛子と行く予定だが？」

「（確かに、水月と工藤は付き合つておらんのじゃよな？）」

「（うん……それはす……）」

「（もう付き合つてしまえば良いこと思つるのはじやがの）」

「ん？　何か一人でヒソヒソと話しかけたか？」

「そういふして、うちに俺たちの家が見えてきた。前の一人が名残惜しそうに見つめあつていて、俺は何も見ていない。俺は空氣。そういうことにしておいてください……」

お、どうやらお別れも済んだようで鏡花が歩き出した。俺も自然な流れで斜め後ろを歩いて行つた

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0208n/>

---

バカとテストと鏡花水月

2011年10月4日07時41分発行